

魔法少女リリカルなのはで盗掘中

ムロヤ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

フェイト・T・ハラウンが執務官となり、ジェイル・スカリエツティを追っていくさなかに出会った一人の次元犯罪者イオリ。

彼は古代遺物を専門とする犯罪者で今までは目立たぬように痕跡を消し、管理外世界での活動を主としていた。

だが機動六課との遭遇から彼の運命の歯車が動き出す。

※何度か「あらすじと内容が合っていない」という指摘を受けたことがあるので、再開を機にあらすじを変更しました。

目次

プロローグ	1
運悪く	4
さらに運悪く	8
罨の香り	12
予感的中	17
絶対絶命	25
作戦会議	33
報酬と契約	39
人物紹介&用語解説	44
絶対絶命Ⅱ	48
まだ続く絶体絶命Ⅱ	57
愛機誕生	64
非常識	71
格闘訓練	79
悪巧み	89
接敵	96
激闘	110
大当たり	125
オークション会場	138
人物紹介Ⅱ・ラヴィエ保有スキル	151
最悪の再会	156
情報提供	164
襲撃と逃走	171
逃走その後	177

機動六課のついで

今後の指針

古代遺跡



182



187



192

プロローグ

「ん〜。この辺の遺跡なら何かありそうだな」

俺の名前はイオリ。

現在俺はとある管理外世界にある遺跡に^{ロストロギア}古代遺物があるという情報を聞き付け、この世界へ探索にやってきていた。

遺跡はすぐに発見する事ができたので、周辺の安全を確保してサーチャーの準備を行なっている。

「よしっと、さっそくサーチャーを飛ばすか」

準備が出来たところでさっそくサーチャーを遺跡内部に飛ばし、^{ロストロギア}古代遺物の探索を始めた。

「おつ、いきなり反応があるな」

サーチャーを飛ばしてほどなくして、デバイスに^{ロストロギア}古代遺物らしき反応が返ってきた。

俺はさっそく遺跡の中に入り目標のあるフロアへと向かって、進んでいった。

あらかじめサーチャーで探索していたので、迷うこともなく^{ロストロギア}古代遺物があるフロアへと到着した。

「この部屋か。……おつ！ あのケースか？」

部屋の隅に転がっていたケースが目についた。

俺はケースに近づき手に取ると、トラップが仕掛けられてないかを確認しケースの封印を解除した。

ガチャ

「……って、なんだよまたレリックかよ」

ケースの中身はレリックと呼ばれる魔力結晶体だった。

「はあく。しょうがないか。またあいつに買ってもらおうか」

俺はレリックを回収し再封印を施すと、遺跡から脱出した。

「止まりなさい！」

遺跡から出たところで、上から声が聞こえた。

「げっ！ 管理局か！」

そこにはデバイスを構えた金色の髪に黒いバリアジャケットを

纏った魔導師がいた。

「時空管理局執務官フェイト・T・ハラオウンです。ロストロギア不法所持及び、密売の容疑であなたを逮捕します。おとなしく投降してください」

(マジかよ！ 何でこんな有名な名人がこんな辺境にいんだよ!?)

俺は表情には出さなかったが、内心ではかなり驚いていた。

フェイト・T・ハラオウンと言えば現在の管理局員の中でも、エースオブエースと並んで上位の実力者だ。

本来はこんな辺境にいるような存在ではない。

(やべー！ やべー！)

「驚いたな。こんな辺境にあんたみたいな大物が来るなんて……」

「武器を捨ててください。抵抗しなければこちらも攻撃しません。それと所持しているロストロギアをこちらに渡してください」

俺はとにかく状況を分析していた。

先ほど考えたように、こんな辺境にいるような人物ではないことを考えると、俺の所持するロストロギアが目的か、あるいは俺の顧客リストが目的と見るのが正しいだろう。

(とりあえず何とか逃げないとな)

「了解。了解」

持っていたデバイスを置き、俺は両手を上げた。

そして先ほど得たレリックも地面に置いた。

「シャーリー。彼からロストロギアの反応は？」

『スキャンでは反応はありません』

「ありがとう。……あなたに聞きたいことがあります」

「なんだ？ 顧客の情報はやらないぞ」

俺は先手を打って彼女に釘を打った。

効果があるかは微妙だが、なにもしないよりは時間が稼げるはずだ。

「……ジェイル・スカリエツィという男を知っていますね」

少々意外に思いながら、俺は頭の中でそこそこ付き合いの長い科学者の顔を思い出した。

「あの変態科学者か？ ……あいつがどうかしたか？」

「居場所を知っているなら教えてください」

納得がいった。

どうやら彼女の狙いはスカリエッツィのようで、居場所を掴むために動きが読みやすい俺を追ってきたようだ。

(とはいえあいつの居場所なんて俺も知らないしな)

そんな風に時間稼ぎをしていると、どうやら準備ができたようだ。

「あく。なんであいつを追ってるかは知らんが、あの変態には関わらないことをお勧めするぞ」

「そういうわけにはいきません。知っているなら……」

『フェイトさん！ 彼から魔力反応が！』

「っ！ バルディッシュ！」

〈Sonic Move〉

「残念。すこし遅いよ」

そう言う俺の体は輪郭がぼやけていき、まるで最初からその場になかったように消えていった。

『一つ忠告。あいつに関わると碌なことにならないぞ。それとレリックはそつちに譲るよ』

俺はそれだけ言い残し、この場から転移した。

運悪く

「あくあ、今回は大赤字だな。」

執務官から逃げられたのは良かったが、ロストロギア古代遺物は管理局に取られた上にスカリエツティと繋がりがあってもばれてしまった。

「おまけに転移型ロストロギアの古代遺物一個消費したしなく。……はあく。」

ポケットの中に手を入れると中には白い結晶が3つと黒ずんだ結晶が1つ入っていた。

俺が黒ずんだ結晶を取り出し地面に捨てると、結晶は地面に落ちると同時に砕け散った。

「これからはもうちよつと対策を念入りにした方がよさそうだな。」

今までは辺境での活動と言うこともあり、そこまで優秀な魔導師が来ることがなかったので逃げるだけならどうにでもなった。

だがスカリエツティとの繋がりがばれた今では、今まで以上に優秀な魔導師が俺の逮捕に来るかもしれない。

現に今回は化け物といっても差し支えないレベルの魔導師がやってきた。

「はあく、仕方ないか。とりあえずはアジトに戻るか。」

かなり遠くの世界に来たとはいえ、それで安心できるほど俺は凶太くない。

ここは早々に自分のアジトに隠れるのがいいだろう。

「……にしても何である変スカリエツティ態との繋がりがばれたんだ？」

基本的に慎重なスカリエツティがへまをすとは思えない。

それに基本的に俺とスカリエツティあの関係は、売り手と買い手で仲間介屋を通しているわけでもない。

「わからん……後で通信でも入れるか。」

とりあえず俺はアジトに向けて移動を開始した。

アジトに戻った俺はさっそく通信端末を取り、スカリエツティへと連絡を取ることにした。

「えくと、端末はどこやったっけかな。」

ここ最近では管理局に優秀な人材が固まって入ったため、買い手の数がめつきりと減ってきた。

そのため連絡端末を使う機会が減り、どこに片付けたか分からなくなってしまうた。

「おーあった。さて、スカリエツティはつと。……この連絡先生きてるかな。」

こういった連中は定期的に連絡先や潜伏先を変えるため、下手をしたら連絡が取れないかもしれないことに気がついた。

「……。……。……。マジか。」

いくらコールを繰り返しても返信がないため、俺は半ば諦めかけていた。

『やあ、君の方から連絡してくるなんてずいぶん珍しいね。』

そのとき端末から聞き覚えのある声がした。

「はあ、いるならもつと早く出ろよ。」

『すまないね。No, 5の調整で手が離せなかったのだよ。』

どうやらまた実験していたようだ。

「御苦労なこった。No, 5つて言うとおのチビか。怪我でもしたか？」

『まあ、そんなところだよ。それより今日はどういう要件だい？レリックならいつも通りの金額で買い取るよ。』

話しをはぐらかしたところを見ると、また面倒なことをやっていたのだろう。

関わりと面倒なので俺はとつとと本題に入ることにした。

「いや、違う。今日管理局の人間に襲われた。」

『ほう。それは珍しい。それがどうしたんだい？』

「どういうわけか俺とお前が繋がってることがばれたらしい。」

そういうとスカリエツティは、まるで世間話でもするように俺が知りたかった答えを教えてくれた。

『ああ、そのことか。私と君の共通の顧客が管理局に捕まってね。その顧客の資料からばれたのだろう。』

「……マジか。」

俺はあまりにもあつさり得られた答えに愕然とした。

『それにしても管理局に捕捉されるとは珍しくミスをしたのかい？』

スカリエツティが楽しそうに聞いてきた。

俺は普段からステルス効果のある古代遺物ロストロギアを所持しているの、本来は目視以外で俺を捕らえることはかなり難しい。

そのことを知っているスカリエツティは人の失敗を面白がるように笑っていた。

「残念ながら違う。管理局の奴ら、俺が狙いそうな遺跡に複数で張り込んでたようだ。」

逃げた後にあの世界の周辺の世界もいくつか調べたところ、目を着けていた遺跡にばらばらにそれらしい反応があった。

『おや、そうなのかい。』

「そうだよ。早々へまなんかするか。」

へまはしていないが今回は運がなかったとしか言いようがない。

おそらくは配置されていた局員の中で、あのフェイト・T・ハラオウンが一番の大物だった。

「ただ俺は運がないらしい。ちょうどいた遺跡にいた局員がフェイト・T・ハラオウンだった。おかげで転移結晶一個使った上に、レリックも取られた。」

俺はがっくりと肩を落としながら愚痴った。

『ははは！それは運が悪いね。……それにしてもFか。』

「なんか言ったか？」

スカリエツティが何かつぶやいたようだったが、うまく聞き取ることはできなかつた。

『なんでもないさ。それよりお金が少ないなら、君の収集品コレクションをいくつか譲ってくれるなら言い値を支払うよ。』

「あれは俺の収集品コレクションだから売らんって何度も言ってるだろ。」

スカリエツティは話しを切り上げ、いつもの交渉を持ちかけてき

た。

『ふう、君の収集品には私もかなり興味があるのだがね。古代遺物コレクター収集家と名高い君の。』

基本的に俺が売り捌いている古代遺物はもう持っているか、興味がない物だけで本当に気に入った物は俺の手元にある。

そんなことを続けてきた結果、いつしか俺は古代遺物収集家なんて呼ばれるようになった。

「なんと言おうが絶対売らん。」

『ふう、やれやれ。今回はあきらめようか。』

スカリエツティとのこのやり取りはもはやお約束になってきているため、スカリエツティの方もすぐにあきらめた。

『ドクター。No, 5の調整が最終調整に入ります。』

俺たちが不毛なやり取りをしていると、女性の声が割り込んできた。

「ん？No, 1《ウーノ》か。元気そうだな。」

『お久しぶりです。イオリ様。』

俺は画面に映った女性に挨拶をすると、女性の方も事務的な口調で挨拶を返してきた。

『もうそんな時間かい。それじゃあイオリ。またレリックが入ったら連絡をくれるかい。』

「ああ、わかったよ。じゃあな。」

そうやって俺は端末を切り、ベッドの上に寝っころがった。

そして何故か今日であったフェイト・T・ハラオウン執務官とは、長い付き合いになりそうな予感がした。

さらに運悪く

「フェイトさん、すみませんでした！私がつもつと早く気がついていれば……」

シャーリーはそう言つてフェイトに頭を下げた。

「シャーリーのせいじゃないよ。デバイスを捨てたときに油断した私が悪いんだよ。」

そう言つてフェイトはシャーリーの肩に手を置いた。

「でも……。」

「今回に限つては情報不足だ。二人とも気にすることはないさ。」

二人がお互いに謝りあつていると、そこに一人の青年がやつてきた。

「お義兄ちゃん。」「クロノ提督。」

二人は声の主の方を振り向くと、そこにはクロノ・ハラオウンが資料の束を持つて立つていた。

「フェイト。局内ここでは義兄ちゃんはやめてくれ。」

「あ、ごめんね。クロノ。それよりその資料は？」

フェイトはクロノの持つている資料の束に目をやった。

一番上の資料のタイトルからロストロギア古代遺物に関する資料であることが分かったが、すべてがロストロギア古代遺物関連だとしたら、とんでもない量である。

「ああ、これか。」

クロノはかなり疲れた表情で両手で抱えている資料に目をやった。

「ユーノに頼んで至急探してもらった。今までイオリが盗掘した遺跡ロストロギアに関する資料さ。」

それを聞いたフェイトとシャーリーは目を丸くして驚いた。

「こ、これが全部ですか!?!」

「クロノ……。」

「……残念だがこれはほんの一部だ。よく今まで見つからずにいたものだよ。」

クロノは苦虫を噛み潰したような表情でそう言った。

そしてクロノは資料を持ったまま歩き出した。

「詳しいことは執務室^{やくむちや}で話そう。」

そう言っつてクロノは二人を伴って、執務室^{やくむちや}へと向かった。

・
・
・

部屋につくとクロノは机の上に資料を置き、椅子に座った。

「あ、私お茶入れてきます。」

シャーリーはそう言っつて奥に入っつていった。

「ありがとう。……さて、今回の件だがフェイトたちが接触した犯人の資料だ。」

クロノがそう言っつとフェイトの前に先ほどの犯罪者のデータが表示された。

だがそのデータは資料と言うにはあまりにも穴だらけであった。

「お茶をどうぞ。……これっつて。」

お茶を入れて戻っつてきたシャーリーもその資料を見て愕然としていた。

データが穴だらけなうえに、本人の画像データすらない。

そこにあるのは容疑と名前だけで、とても資料とは呼べない物だった。

「クロノ。これっつて……。」

フェイトは資料からクロノに視線を移した。

その視線を受けたクロノは眉間に皺を寄せて、困った表情で話し始めた。

「この前捕まえた男が持つつていた資料から得た情報だ。……とはいえ何もわからないと同じだな。名前もおそらくは偽名だろう。」

フェイトとシャーリーは再び視線を資料に戻し、付属のもう一つの資料に目をやった。

そこには前に逮捕された男が持つつていた情報が記載されていた。

「ロストロギアコレクター古代遺物収集家……。かなり昔から盗掘や密売を繰り返して。ほ

かにも古代遺物の不法所持も。それもかなりの数を所有していると思われる。そしてDr. スカリエツティとも交友があるらしい。」

シャーリーが声に出して資料を読み始めた。

「でもクロノ。どうして今まで名前も聞かなかったの？それに本人の映像がないのはどうして？」

「まず名前だが、どうやらかなりしたたかな奴らしい。基本的に管理外世界でのみ活動している。密売も足がつかないように何重にも策を凝らしているようだ。……そして映像だが、君たちは奴の姿を見たときどう見えた？」

クロノの質問の意図が分からず、フェイトとシャーリーはお互いの顔を見ながら同時に答えた。

「黒髪短髪の青年……え？」

「白髪長髪の少女……え？」

二人はもう一度お互いの顔を見ながら声を上げた。

「そういうことだ。どうやら認識阻害の古代遺物を使用しているらしい。肉眼だけでなく機械の映像までばらばらだ。二人が見た転移にしても、こちらで把握していない古代遺物だろう。」

二人は何度目かになる驚きを感じていた。

だがそこでフェイトが何かに気がついたようで考え始めた。

「でもクロノ。古代遺物は制御が困難なものが多いよね。なのに転移の時の映像もダメなの？」

フェイトは過去の記憶で、制御が簡単な古代遺物など見たことがなかった。

「そうですね！フェイトさんのバルディッシュになら……。」

「残念だがそれはもう調べた。そして管理局の見解はイオリが複数の古代遺物を同時に使用できるとなった。」

クロノの話しを聞き二人は息を飲んだ。

「とはいえ、今のままでは情報が少なすぎる。あくまでも仮説だ。……だが今回の件でこちらにも人を回してもらえることになった。」

クロノはそう言ってわずかに口元に笑いを浮かべながら新しい資料を表示した。

そこにはフェイトのよく知る人物が映し出されていた。

「あ、シグナムとヴィータが来てくれるの。」

「それなら心強いです！」

フェイトとシャリーは嬉しそうに表示されている人物を見つめた。

「ああ、だが相手はどんな古代遺物ロストロギアを所持しているのか全く分からない。」

クロノは真剣な表情で二人を見ながら油断しないように釘を刺した。

「はい！」

こうしてイオリの知らないところで面倒事は大きくなっていった。

罨の香り

「くかあ〜。」

ピリリリリリ。

「んあ？……朝か。ねみい。」

目覚ましの音で目が覚めた俺は寝ぼけたままベッドの上に取り上がった。

「どうやら昨日はベッドの上に移動してから、そのまま眠ってしまったようだ。」

「あ〜、今日はどうするかな。」

正直なところ管理局の動きが落ち着くまで、ロストロギア古代遺物の探索は控えたいところだが、昨日の赤字やアジトの維持費を考えるとこの辺りで収入が欲しいところだ。

「……手っ取り早いのはレリックか。」

レリックならスカリエッテイが、かなりの金額で買い取ってくれる。

2個くらい見つけられれば、しばらくはおとなしくしていても問題がないはずだ。

「とはいえレリックあがあるのは、聖王ゆかりの場所が多いからなく。下手すると聖王教会がなく。」

教会と管理局から目を着けられると、さすがに逃げ切れる保証はない。

「あれ？よく考えるとかなり手詰まりだな。……どうすつかなく。」

とはいえ管理局むも俺のことを、完全に捕捉しているわけではないはずだ。

少し楽観的かもしれないが、そう考えないと動くことができないので、そう思うことにした。

「まあ、一応装備は整えておくか。」

俺は立ちあがり部屋の奥にある金庫に近づいた。

カチカチ、ガチャ。

金庫を開けると、そこには拳ほどの大きさの水晶が一つ鎮座してい

た。

「さてと、とりあえずはステルス系と転移系かな。」

水晶は古代遺物の一つで、水晶内に亜空間を作り倉庫として使えるものだ。

その中から、コレクションのいくつかを取り出した。

俺は生まれつき魔力の精密操作に長けていたため、本来は困難な古代遺物複数操作を行うことができた。

だがいくら複数と同時に扱えるといっても、俺の魔力量はBランクそこらで、使うものを選ばないとすぐの魔力が底をつく。

「もうちよつと魔力があればなく。まあ、無い物ねだりか……。」

そんなことをぼやきながら、俺は探索、戦闘、逃走と臨機応変に対応できるように古代遺物の組み合わせを考えていた。

「ん〜。こんなもんかな。これなら大抵は逃げられるか。」

準備を整えた俺は外套を羽織り、ダミーのデバイスを手に取りアジトをあとにした。

・
・
・
・

アジトを出た後はランダムに転移し、見知らぬ世界にやってきた。

「ここなら問題ないかな。」

俺は通信端末を取り出し、ある場所に連絡を入れた。

「よお。ちよつと聞きたいことがあるんだけど……。」

俺は相手からの返事を待たず、要件を話し始めた。

「管理局が俺を追っているらしいんだが、現在の主力メンバーの情報を送ってくれよ。」

『――』

「あれ？おくい？聞こえてるかあ？」

返事がないことを不思議に思っていると、俺の通信端末に情報が送られてきた。

「なんだよ。聞こえてんなら、返事くらいすればいいだろ。」

俺は相手に文句を言ってみたが、相変わらず返事はなくそのまま通信は終了した。

「?……なんだったんだ?」

不思議に思いながらも、俺は送られてきたデータを他の端末に転送し、今まで通信していた端末を破壊した。

ガシャンツ

「さて、内容はつと……。おいおい、マジかよ。」

データを見た俺はがっくりとうなだれた。

そこには俺の逮捕に向けて選抜されたメンバーたちが表示されていた。

フエイト・T・ハラオウン。

魔法術式・ミッドチルダ式／魔導師ランク・空戦S+。

特殊犯罪対策チームリーダー。

他ミッドチルダ式・古代ベルカ式／魔導師ランク・空戦Bを7名。

「ええ〜！完全にオーバーキルだろ。これ!」

データには俺が予想していた最悪の状況のはるか上をいつていた。

「あく、でもホントにこれどうしょ。……ん?」

頭を抱えて悩んでいた俺だが、データと一緒にいつてきたメッセージを見つけた。

そこにはある遺跡にあると思われる^{ロストロギア}古代遺物についての情報と、その買い取り価格がついていた。

その価格は半年ほどアジトや設備の維持費を賄えるものだった。

「……いやな予感がする。」

俺は何とも言えない違和感と、嫌な予感を感じていたが、送られていたデータにある遺跡と^{ロストロギア}古代遺物については以前から目をつけていたものなので嘘ではないと確信していた。

だがどうにも都合がよすぎる。

「ん〜。でもこの^{ロストロギア}古代遺物なら、これくらいの値はつくからなく。」

さんざん迷ったが、とりあえず俺はこの遺跡に向かってみることにした。

先ほどまでイオリと通信していた男は青い顔をしていた。

「こ、これでいいのかね?」

男が後ろを振り向くと、そこにはクロノ・ハラウンと数名の部下が武装した状態で立っていた

「ええ、ご協力感謝します。トレス少佐。」

「くっ!この若造が。」

トレスと呼ばれた男はギリギリと音が聞こえるほど、歯を噛みしめながら憎悪の籠った目でクロノを睨みつけた。

「トレス少佐、あなたが犯罪者イオリを援助していたことはわかってます。よってあなたを共同正犯として逮捕します。……連れて行け。」

クロノがそういうと部下たちはトレス元少佐を拘束し、そのまま部屋から連れ出そうとしたとき。

「くくく、お前らはイオリあれを捕まえることなどできないさ!」

トレス元少佐は去り際に、そう意味深なことを言い残し連行された。

「……ふう。」

「やあ、お疲れだね。」

トレス元少佐と入れ替わりに入ってきた男が、クロノに向けてねぎらいの言葉を掛けた。

「ヴェロツサ。今回は助かった。捜査への協力、感謝するよ。」

「気にすることないさ。僕らは親友なんだから。」

ヴェロツサはそう言って大げさに手を広げた。

「それより、さっきのトレス元少佐が言ったことどう思う?」

「……負け惜しみ。そう思いたいな。だが相手は未知の古代遺物ロストロギアを複数所持している。」

クロノは眉間に指を当て、疲れたようにため息をついた。

「そうだね。一筋縄ではいかなさそうだ。……網にはかかりそうかい

？」

「三割くらいかな。どうやらイオリは常に大金を必要としているようだ。」

今回クロノたちは局内にいる内通者を事前に発見することに成功し、イオリに対して罫を張った。

場所の誘導、局員の情報を一部隠しての油断を誘う作戦だ。

そして運よくイオリを捕捉し、網に誘導できる機会をえた。

「あとは神のみぞ知るかな？……どうだい、休憩にケーキでも？」

ヴェロツサはそう言っ手の上にケーキの入った箱を呼び出した。

「……甘いものは苦手なんだが。」

「甘さは控えめさ。」

そう言っクロノとヴェロツサは部屋をあとにした。

予感的中

「さてと、目的の場所にようやく到着か。」

俺はアジトを後にした後、いつも通り足がつかないよういくつもの管理世界と管理外世界に転移し、わざと足跡を残したり、残さないようにしたりと念には念を入れてようやく目的の管理外世界に到着した。

「さてと周囲には何の反応もないな。……さすがに心配しすぎだったか?」

今回必要以上にいろいろな世界を移動してきたのは、先ほどの管理局の情報のためだ。

別段なんの確証もないがどうにも嫌な予感がした俺は、途中で捕捉される危険を冒してまで移動に時間を掛けた。

「まあ管理局のフェイト・T・ハラオウンともなれば、慎重になりすぎて悪いなんてことはないだろう。……あれの母親も頭が切れる上に執念深かったしなく。」

そういつて少し昔に苦い思いをしたことを思い出したが、気持ちを切り替えた俺はさっそく遺跡に向かった。

・
・
・

「ヴィータ副隊長!対象が例の管理外世界へ侵入しました。現在遺跡に向かっています。」

「おう。そのまま追跡してろ。ばれんじゃねえぞ。」

「了解!」

ヴィータはそう言つて画面に映し出されているイオリに目を向けた。

とはいえイオリは見る人によって姿が変わるらしく、今現在画面に映っている人物がイオリ《本人》なのかはわからない。

だが状況から見ておそらくは間違いないだろうと、ヴィータたちは考えていた。

「ヴィータ。そちらの様子はどうか？」

「シグナム。いまのところは問題ねーよ。ただやたら警戒してやがるんだよこいつ。」

二人がモニターを見ると少し進んでは周囲を警戒しているイオリの姿が映し出されていた。

その様子は異常と言えるほど警戒心が強く、犯罪を重ね何度も成功してきた者にありがちな油断や慢心が一切見られない。

「……厄介だな。こいつった手合いはかなりの切れ者か、臆病者が多い。」

「だな。」

シグナムの答えにヴィータも苦い顔をしていた。

今回こうやって一方的に姿を捉えることができたのは、クロノと騎士カリムたちが裏から手を回したおかげで小型だが次元航行艦を一時的に与えられ、ユーノの協力で事前情報が得られたためだ。

本来であれば一犯罪者のために次元航行艦が一隻貸し出されるなど異例なことだ。

それにより宇宙^空からイオリを捕捉し、こちらは気づかれることなく待ち伏せができている。

「シグナム。ヴィータ。監視の方はどうですか？」

シグナムたちが難しい顔をしていると、フェイトが指令室にやってきた。

「あまりいい状況ではないな。……かなり警戒されているようだ。」

「だな。あいつ、何かあればすぐに逃げそうだな。」

シグナムとヴィータはそれぞれの感想を口にした。

それを聞いたフェイトは先日の戦闘でまんまと逃げられたことを思い出した。

「ユーノの話しだと、あれはたぶん古代遺物^{ロストロギア}によるものだから、何度も同じ手は使えないって言っていました。」

それを聞いてもシグナムたちは難しい顔のままだった。

「戦場でもああいった手合いはいたが、ああいった手合いほど奥の手をいくつも持っている。油断はできないな。」

「おう。戦場では見つけたら真っ先にぶっ潰してたな。」

古い戦でも思いついているのか、その顔には悲しみともつかない複雑な感情が浮かんでいた。

「隊長！対象が遺跡に接触しました。」

その報告により指令室の空気が変わった。

「考えていても仕方ありません。元より対象は複数の^{ロストロギア}古代遺物を所持しています。最大限に警戒していきましょう。」

「ふっ。たしかに。」

「だな。とりあえずはぶっ潰せばいいだけだしな。」

二人は獰猛な笑みを浮かべて自らの相棒を手にした。

「おかしい。なんか知らんがおかしい。」

俺は現在急速に膨らんできた違和感の正体を探していた。

「……罠か？いや、それならこの周辺に何の反応もないのはおかしい。……俺の勘も鈍ったか？」

いくら管理局の連中が気配を消していても、俺の手には^{ロストロギア}古代遺物の一つで半径100kmに存在する生命体と熱源、魔力を探索するものがある。これは魔力消費が多いが、今回は警戒してそれを複数回使用しているが人間は一度も引つかからない。

いくら魔力を隠したところで、生きているものは、この探索から逃れることはできない。そして俺はステルス系の^{ロストロギア}古代遺物も所持しているのです、俺を見つければ常に俺が来る遺跡が視界に収めなければならないので、周辺に管理局がないのは確実だ。

「……なのにこの嫌な予感なんだよ。」

そうこうしているうちに遺跡に到着してしまった。

「なんか釈然としないが、まあいいか。」

^{ロストロギア}納得できないがアジトの維持費などにかかる金を考えると、ここで^{ロストロギア}古代遺物を回収しないは無理なため俺は意を決して遺跡に侵入した。

「対象が遺跡に侵入しました。」

報告を受けたフェイトはシグナムとヴィータに視線を向けた。

二人は領き他の隊員にも指示を出し始めた。

「結果班は拘束用の閉鎖結界の維持を！相手は未知の古代遺物を所持している隙を見せるな。」

「戦闘は基本的にあたしとシグナム、フェイトの三人だ。それ以外は結界に専念しな。」

指示を受けた隊員たちはそれぞれの役割につき始めた。

「それでは転送を開始します。ご武運を！」

「ごいつか。」

俺は遺跡の奥にあった隠し部屋でそれを見つけた。

それが何なのかわからないが、スカリエツティが探しているものらしい。他にもいくつか売れそうなものがあり、なかなかの大量だった。

「にしてもなんだこれ？……何かのパーツみたいだな。」

見た感じでは古代ベルカで使われていた建造物の制御用コアユニットに似ているが、今手の中にあるこれは少し違うようだ。

「なにか特注の巨大建造物の制御ユニットか？……なんでこんなものをスカリエツティは欲しがるんだ？あいつの専門は生体系だったはずだけど……。まあいいか。余計な詮索はしないに限る。」

納得した俺は回収したそれらをしまおうと来た道戻り始めた。

「!？」

その時、周囲に突然転移反応が現れた。

それと同時に遺跡を中心に閉鎖型の捕獲結界が展開された。

「くそっ！やっぱ罠か！けどどうして反応が今までないんだ？……考えてても仕方ない。ここに入ってこられると袋小路だ。外で隙を

窺うか。」

俺は管理局の連中が遺跡に入ってくる前に、外へと出た。

そこにはかなり絶体絶命の状況が展開されていた。

「おいおい。勘弁してくれよ。」

「管理局です。今度は逃がしません。」

俺の視線の先には、先日も現れたフェイト執務官に加え管理局でも有名な八神ファミリーの二人、烈火の将と鉄槌の騎士がいた。

「随分と物騒だな。フェイト・T・ハラオウン執務官殿。俺みたいな小物に管理局の有名どころがさらに追加なんて。」

(ぎゃー！どうすんだよこれ！詰んだ!?)

俺は内心かなり焦りながら話しかけた。

(たしかあつちの二人は闇の書の守護騎士だったな。なんで主から離れてんだー！くっついとけよ！くんじゃねーよ!)

あまりのオーバーキルぶりに俺は泣いて良いなら泣きたい気分だった。

「おとなしく投降してください。指示に従わない場合は……」

「テストロツサ。その手合いに時間を与えるな。逃げられるぞ。」

フェイト・T・ハラオウンが発していた降伏勧告を遮り、シグナムは剣を構えた。

「そうだな。ぶっ叩いて捕まえればいいだけだな。」

ヴィータも自らの相棒を手に構えた。

「はっ！さすがは闇の書のプログラム！物騒極まりないな！今代の所有者もやることは他人を害することだけだな！」

(会話で時間稼ぎは無理か。なら怒らせて隙を作るか。)

俺は頭に入っている情報から、二人が怒りそうな言葉を選んだ。

「……てめえ！」

「落ち着けヴィータ。安い挑発だ。主はやてに謝罪させるのも逃がしてしまつては、元も子もない。」

一瞬ヴィータが食いついたと思ったが、どうやら将と呼ばれるだけあつてシグナムの方は冷静だった。だがその目には静かな怒りが浮かんでいた。

(ああー!!冷静に怒ってる!逆にヤバイ!?)

どうやら目論見は失敗したただけでなく、事態を悪い方に進展させてしまったようだ。

「テストarroツサ。交渉は決裂だ。……行くぞ!」

それだけ言って二人がこちらに突っ込んできた。

「あー!くそっつ!《氷柱》」

俺は牽制のために二人に向けて、人の腕ほどある氷の杭を数本打ち込んだ。

「甘い!」

ゴウという音とともにシグナムから炎が燃え上がり、俺の出した氷の杭は全て溶けていった。

(がー!!わかってたけど炎熱変換に凍結変換は相性が悪すぎる!)

「……テストarroツサ。ヴィータ。気をつけろ。どうやらイオリは凍結の変換資質があるようだ。特にテストarroツサは気をつけろ。奴の攻撃は質量兵器と変わらない。当たれば魔導師の防御では厳しい。」

氷の杭の出現速度から、フェイトたちは俺が凍結変換を持っていると悟ったらしい。

「私は当たりません。」

フェイトはそう言ってシグナムに微笑みかけた。

それを見たシグナムも無用な心配だったかと、笑みで返した。

「ふうー。久々に本気でやらないとまずいか。《氷鏡》」

俺は本気で戦うことを決意し、自分の周りに4枚の氷でできた鏡を出した。

鏡は俺の周りをクルクルと回りながら浮いていた。

「そんな氷まとめて叩き割ってやる!アイゼン!」

へJa Rocketenform! (ラケーテンフォルム)へ

ヴィータの声に応えアイゼンがフォームチェンジし、回転しながら突撃してきた。

(ちい!いきなりかよ!)

俺は突っ込んでくるヴィータに対して氷鏡を一枚防御に向かわせながら、他の二人にも意識を向けた。

〈Arc Saber〉

「はあああ！」

「!こつちもかよ!? 《凍弾》!」

俺がヴィータに意識を取られたほんのわずかな隙を見逃すことなく、フェイトがすぐそばまで接近していた。

俺は眼前にまで接近してきたフェイトに向けて魔力弾を撃ち込んだ。

〈Sonic Move〉

打ち込んだ魔力弾はあっさりと思われてしまった。

「そうだよな! 当然避けるよな!」

もとより俺は今の魔力弾が当たるとは思っていない。

何せフェイトと言えば管理局でも速さがトップクラス魔導師という情報だ。そんな奴に正面から攻撃して当たるとは思っていない。「なっ!」

フェイトが避けて空いた空間に、いつの間にか一枚の水鏡が移動していた。魔力弾は水鏡に当たると鏡の中に吸い込まれていった。

そして水鏡を割ろうとしてデバイスで攻撃を加えていたヴィータの目の前の鏡から、突然魔力弾が現れた。

「ヴィータ!?!」

フェイトとシグナムは驚きの声を上げた。

シグナムが急いで近寄ると、ヴィータは右腕が肩のあたりまで氷漬けにされていた。

「くっ。問題ねーよ。」

ヴィータは苦しそうな呼吸をしながらも、寄ってきたシグナムにそう言った。

「強がりにはよした方がいいぞ。その凍結は徐々に進行していく。ほつといたり無理に動かすと腕が砕け散るぞ。」

(えー、今の不意打ちもギリギリで回避するのかよ! 普通は間に合わなくて完全に氷漬けなのに。)

俺の魔力弾は普通とは異なり、凍結変換によりぶつかった対象を凍らせていく。

今言ったように放っておくと徐々に凍結が進行し砕け散る。ただし凍結の進行は俺の周囲半径100mの中でのみで、そこから出られてしまえば進行は止まる。

とはいえ進行が止まるだけで凍ったものもとに戻るわけではないので、適切な処置をしなければ壊死していく。

(とはいえこいつらはもともと闇の書のプログラムだっけか？生きてないなら壊死とかないのか？)

「シグナム。炎で溶かせねーか？」

「やめた方がよさそうだ。ヴィータお前は下がれ。」

シグナムがヴィータに撤退するように言った。

(おうおう、減ってくれるなら大歓迎だ。……それより下がれか。気軽に言えるってことは近くに拠点ないし、それに類するものがある。だが反応はなかった。)

俺はシグナムとフェイトを警戒しながらも、今の言葉から今回の不可解な点の分析を始めた。

(なら結論は100km以上離れながら、ピンポイントでここを監視できるところ。もしくは設備。あるいは両方か。……まさか!?)

俺はそこまで考えて一つの結論が出た。

「はーどうにも動きが素早いと思ったら、艦ふねごとお出ましかよ！」

俺の言葉を聞き三人は息を飲んだ。

それだけで俺の推測が当たっていたことが証明された。

(マジかー！どんだけ本気なんだよ!?)

当たったからと言って、今さらどうしようもない俺はどうやって現状を脱するか悩むことは変わりなかった。

絶対絶命

(さてどうしたものか。)

現状で戦力の一つを戦闘不能状態にできたのは僥倖だが、一度見せてしまった氷鏡の効果は二度は通じないだろう。

一人減ったとはいえ、どのみち俺に対してオーバーキルの戦力であることに変わりはない。

「《氷霧》」

俺が新たに魔法を展開すると、フェイトたちは警戒度を上げた。

フェイトたちが警戒する中、俺を中心とした空間にダイヤモンドダストが広がっていく。

「これは……」

「気をつけるテストタロツサ。あいつの魔法は私たちの知っている体系とはかなり異なるようだ。」

シグナムの言葉を受けてフェイトは頷いた。

(そりゃそうだ。俺の魔法はオリジナルなんだからな。……よし！氷霧展開完了つと。)

俺は空間内に氷霧が広がり切ったことを確認し、氷鏡を自分の周囲に戻して警戒を始めた。

〈There is lost life response within the range (範囲内に生命反応は失われました)〉
「バルディッシュユー！どういうこと!?!」

「どうやらあの周りに出した霧のようなものがセンサーを狂わせているようだな。」

〈Ja (はい)〉

シグナムの予想にレヴァンティンが肯定の返事を返した。

『ヴィータ副……帰還を確認……ました。それ……ら……センサ……及び光……器での……が不可能……。』

そのとき艦からの通信が入ったがひどく途切れ途切れとなっていた。

聞き取れた部分からフェイトたちはヴィータの帰還と、おそらくは

艦からもこの辺り一帯が観測できなくなったことを悟った。

「どうやら通信妨害もあるようだな。」

「そうみたいです。……シグナムの炎で消すことはできますか？」
フェイトの提案にシグナムは少し考えたが、すぐに首を横に振った。

「現在の程度まで広がっているか分からない上に、一時的に視界が悪くなる。その隙に逃げられかねないな。」

「そうですか。……なら本人を捕まえるまでです。」

二人は警戒度を高めながらも俺にデバイスを向けてきた。

（どうするかな。あまり時間を掛けるのも得策じゃないしな。……一気に勝負に出るか？）

この後どうするかと数十パターンの^{プラン}作戦を頭で計算しながら、様子を窺っていると同様に動きがあった。

「奴には私の炎が有効だ。援護は任せろテストタロッサ。行くぞレヴァンティン！」

〈J a w o h l. (了解) N a c h l a d e n. (装填)！〉
バシュツ！

デバイスから空のカードリッジが排出され、シグナムの魔力が跳ね上がった。

レヴァンティンに炎を纏わせながらシグナムは一気に間合いを詰めるようとしてきた。

「させるか！ 《氷柱六連》」

氷鏡は周囲の水分を吸収し再生し続けるので打撃には強いが、あれだけの熱量を持った炎を受けてはひとたまりもない。

俺は近づかせないためにも先ほど撃った氷の杭よりも、大きく密度の高い氷をシグナムに向けて連射した。

「甘い！ 紫電一閃！」

シグナムは向かってくる氷に怯むことなく、さらに熱量を増した炎の剣閃ですべてを打ち払った。

氷の杭は抵抗できずに一瞬で水蒸気になって霧散した。

「《凍結拘束》！」

シグナムが氷を撃退するために大技を使うのは予想の範囲内で、俺は大技によってカードリッジの効果が悪くなった瞬間を見逃すことなく新たに魔法を使った。

「くっ!?」

魔法の効果によりシグナムの周りに大量発生した水蒸気が急激に冷却され、レヴェンティンのカードリッジシステムの部分が氷で覆われていった。

(よしーこれでしばらくはカードリッジが使えないはずだ。)

俺は心でガッツポーズ取っていた。

ただでさえ炎熱系の魔法とは相性が悪いのに、そこにカードリッジが加わっては攻撃のしようも防御のしようもない。

だからこそ俺は何よりも先にシグナムのデバイスの封印を優先した。

「撃ち抜け、轟雷！」

〈Thunder Smasher〉

俺は咄嗟に声のした方に氷鏡を4枚重ねて向けた。

(くそー！一人でも俺より上の魔導師や騎士を同時に相手にするのはやっぱり無理だ！)

何とか防げているのは氷鏡にある魔力反射の能力によるものだが、そもそも反射できる限界はB-の魔法だ。

おそらくこの魔法はAランク相当だろう。氷鏡は反射しきることができず、高魔力と雷に押し負け徐々に亀裂が走ってきている。再生も行われているがフェイトの魔法の威力がバカみたいに高いため、焼け石に水状態だ。

(これだから化け物は！なんでこんな魔法軽々うてんだよ！)

そうこうしているうちに気がついた時には、シグナムに懐まで迫られていた。

「貰った！」

「やられるかよー！《氷檻》！」

念のために戦闘中気がつかれないように、足元に魔力を通し自分の近くにいつでも氷を展開できるようにしていた。

そのおかげでほぼノータイムで氷の檻を作り上げ、シグナムを閉じ込めた。

パリン

砲撃の方を見るとすでに氷鏡は一枚まで減っていた。

(がー！無理だ無理だ！なんだよこの化け物たちは!?)

パリン

今度の音はシグナムが氷の檻を砕いた音だった。

「シグナムー！」

フェイトがシグナムの名を叫ぶと、二人は念話で作戦でも立てたのかシグナムが離脱した。

「バルディッツシュ」

〈Sir. Load Cartridge.〉

バシユツ

バルディッツシュから空のカードリッジが排出されるとフェイトの砲撃の威力が急激に上がった。

「《氷柱林》《氷楯》！」

それと同時に俺は自分の周囲に万遍なく、円錐状の氷の柱を大量に出現させた。そして今にも砕けてしまいそうな最後の氷鏡に魔力を追加し、単純に防御力の高い氷の楯に変化させた。

「はあああああ！」

「ぐうううう！」

ドオオオン

魔力のぶつかりによつて爆発が起きた。

(な、何とか耐えた。次は無理だ。つてかあんなの当たったらいくら非殺傷でも意味ないだろ!?)

俺は心で悪態をつきながら、新たに氷鏡を出現させ油断なく周囲を警戒した。

自分の周囲に魔力を誘導する氷柱体を大量に作りフェイトの魔力の収束率を下げ、純粋な防御力が高い氷楯で何とか耐えたが、今の攻防でかなりの魔力を消費してしまった。

「氷鏡変化 《万華鏡》」

俺はもう防御は不可能だと結論付け、攻撃に回ることにした。

氷鏡は俺の魔力を受け綺麗な鏡面に大量の凹凸を作り、歪な氷鏡へと形を変えた。

「バルディツシュ。もう一回いくよ。」

〈Yes, sir. (了解)〉

「レヴァンディン。いけるな。」

〈Jawohl. (了解)〉

いつの間にか凍結が溶けたシグナムも加わり、俺はさらに絶体絶命に陥った。

（てか拘束溶けるの早すぎだ！それでもう一回って連射できるのかよ!?）

もはや俺は悲鳴を上げるしかなかった。

舐めているつもりは微塵もなかったが、俺が想像できるレベルから大きく外れていたようだ。

最初にヴィータが退場していなかったら、もっと早くに決着がついていただろう。とはいえこのまま簡単に捕まってしまうわけにはいかない。

少なくとももう少し抵抗することに決めた。

「『凍弾拡散』」

俺は周りにいくつかの魔力弾を生成すると、フェイトやシグナムに直接打ち込むことなく万華鏡に打ち込んだ。

二人が怪訝な表情をした次の瞬間、その表情は驚きに変わった。

「くっ!?」

万華鏡を通過した凍弾は、まるでフラツシユライトのように広範囲を俺の魔力光で包み込み、魔力光の触れた場所は例外なく凍結していた。

（とはいえこれ、凍るのは表面だけの虚仮脅し何だけだな。）

そうはいつでも現状で二人がそれを知ることはない。さらに速度が早く、範囲が広いため嫌でも回避せざるおえない。

だがさすがは管理局のエリート。

俺の攻撃は全て躲され、シグナムは自分の周囲に炎を展開すること

で凍結そのものを防いで、フェイトはそもそも俺の目では捉えることも難しくすぐに手詰まりになってしまった。

(終わったな。)

俺は自分の終わりを悟った。

「紫電一閃！」

「プラスマランサー！」

俺の意識はそこで途切れた。

・

「終わりましたね。シグナム。」

「ああ、魔導師としてのランクは高くないがかなりの使い手だったな。」

フェイトとシグナムは自分たちが倒した男に目を向けた。

『シグナム！フェイト！応答しやがれ！』

どうやらイオリが気絶したことで霧が晴れ、通信が戻ったようだ。

「ヴィータか。こちらは終わったぞ。テストタロツサも無事だ。」

通信の向こうからわずかに安堵するような吐息が聞こえた。

『そうかよ。なら早いところ戻ろうぜ。今日ははやても早く帰ってくるんだ。』

「そうだな。」

「なら早く彼を連行しましょう。」

二人は気絶しているイオリに手錠をはめると、艦へと転送されていった。

そして周囲には人の気配がなくなった。

・

「……行ったか。それにしても本当に化け物ばっかだな。」

俺は呆れながら愚痴を零し、遺跡の入口から顔を出し先ほどの戦闘の後に目を向けた。

「はあく。今回ののが最初から罠だつてことは、管理局のお偉いさんは捕まつたかな？」

ピリリリ

突然通信機が鳴り出したが、俺は慌てることなく通信に出た。

『やあやあ。捕まつたと聞いたけど大丈夫かい？』

スカリエツティはいつも通り薄い笑いを浮かべながら、こちらをか
らかうようにそんなことを聞いてきた。

「大丈夫じゃねえよ。なんだよあの化け物は……」

俺は疲れたように盛大にため息をついた。

「おかげでリンカーコアを一つ消費しちまつたよ。」

俺は先ほどの戦闘で連行されていった自分の姿を思い出し、苦虫を
噛み潰したような顔をした。

『相変わらず面白いレアスキルだね。リンカーコアを複数所持し、一
つにつき一人の自分の完全複製を生み出す。』

「お前にこれを知られたのが人生最大の誤算だ。」

俺は本当に嫌そうな顔で画面の向こうを睨みつけた。

こいつの言った通り俺には複数のリンカーコアがあり、体内からリ
ンカーコアを取り出し俺の血液を加えると俺と全く同じ能力スベックの分身
を24時間作ることができる。

とはいえ制限も多く最大ストックは4つまで全て消費すると魔法
が使えないので、実質作れる分身は3体が限度。

さらに作つた分身は24時間存在するが、それはあくまで魔法を使
用しない場合で、魔法使用を計算に入れるとせいぜい3〜4時間が限
界だろう。

他にも複数のリンカーコアがあるが出力に限界があり、Bランクの
魔法までしか使えない上に消滅が決定しているので貴重な古代遺物ロストロギア
を持たせることはできないなど、いろいろな制約がある。

スカリエツティに知られたのは運が悪かつたからとしか言えない。
幸いなことに向こうには制約については何も教えていない。

「とりあえず今回はもう帰る。すつげえ疲れた。回収した古代遺物ロストロギアは
明日取引な。」

『おや？私と取引するのかい？』

スカリエツティが不思議そうに聞き返してきた。

「とぼけるな。どうせ管理局向こうからスカリエツティおまの所に流れる予定だったんだろ？」

『くくつ、ではまた明日。』

スケリエツティは明確な回答はせずに、ただ嗤っただけで通信を切った。

「あの腹黒が……」

俺はいろいろと嫌な思いをしながら帰路へとついた。

作戦会議

管理局内のとある一室にて、クロノを含めフェイト、シグナム、ヴィータの作戦参加組とはやての5人がある待っていた。

「今回集まってもらったのは、この映像の解析結果とユーノに頼んでいた依頼の報告がきているからだ。」

クロノはそう言っ中央に問題となつて映像を映し出した。

その映像には数時間前に逮捕し、護送中のイオリの姿が映し出されていた。

「まずこの映像に移っている人物だが、今までと違い全員が同じ人物と認識できている。」

そう言っクロノは中央の拘束台に拘束されている人物を拡大した。

「うん。バルディツシユたちに残っているデータも同じ映像だったよ。」

フェイトはクロノの言葉をさらに捕捉し、件の映像の人物が常に一定の姿であることを肯定した。

「……そうだ。だからこの映像を見た解析班は最初、この人物はイオリではないのかと仮定していた。」

それを聞いたメンバーは全員頷き、そう判断したのも頷けると考えた。

今までのイオリに関する映像データは、おそらくは古代遺物ロストロギアによるものだろうが見る人によつて姿がバラバラになっていた。

「せやけど、過去形つちゅことはイオリ本人やったことでええんか？それと消えた理由はなんやったんや？」

はやてはこの場にいるメンバーの疑問を代表してクロノに質問した。

映像は先ほどの拘束されている場面から進み、イオリの体が徐々にその輪郭を失い消えるように消失している場面に移っていた。

「それに関してユーノから説明を頼む。」

クロノがそう言っ回線を繋ぐと無限書庫内の映像が映し出され

た。

『やあみんな。久しぶり。』

そこにユーノ・スクライアが映ると、室内にいる馴染みのメンバーに軽く挨拶を済ませた。

『今回クロノから依頼された調査だけど、現状わかっていることを伝えるね。』

ユーノはそう言って手元に集めてきた資料からいくつかのデータを室内にいる5人に送った。

そこには今までイオリが関与したと思われる盗掘事件や、20年ほど前に管理局にとつて潰された違法研究の資料が乗っていた。

『盗掘に関してだけど今みんなの手元にあるデータがイオリが行ったと考えられる遺跡と古代遺物のデータだよ。』

全員はその膨大な量のデータに驚愕と呆れの表情を浮かべていた。
『今まで話題にならなかったのが不思議なくらいだな。』

クロノは苦虫を噛み潰したように苦い顔をしていった。

『そうだね。……あまり言いたくないけど管理局内でも彼に加担していた人間は少なくないと思うよ。彼によつて多くの古代遺物が発掘され、用途が判明した物が多いのも事実だから。もし彼が正規の研究者だったら、古代遺物研究が今よりも進んでいたと思うよ。』

同じ遺跡を調査し探索する研究者として思うところがあるのか、ユーノは悲しそうな顔をしてそう言った。

『ユーノ。』

このままでは話が脱線しそうな空気を感じ、クロノが先を促した。
『そうだね、本題に入るね。今みんなに送った、古代遺物データに管理局で押収したデータを重ねると、現在イオリが所持、または使用していると思われるものが分かるんだ。』

そういつてユーノが映像の向こうで何か操作すると、今まで表示されていた、古代遺物のデータに変化があった。

『基本的には同じもんはいらんゆうことやな。……なるほど、それで収集家なんやな。』

はやては新たに表示されたそのデータから、イオリが収集家と呼ば

れる最大の要因に気がついた。

イオリは基本的に同じものは複数持たない主義（例外な、ロストロギア古代遺物もある）で、盗掘後に同じだった場合は高い確率で密売され、管理局がそれを押収する形になっている。

「でもこれって……」

はやてと同じ結論に達したフェイトだが、表示されたデータを見て眉をひそめた。

この場に揃った全員が何かに気がついたようで、違いはあるが全員が納得できないという表情をしている。

「そうだ。多すぎる。まるで予定調和のようにかなりの確率で管理局が回収しているんだ。」

クロノは縛りだすようにそう言った。

それが意味するところは管理局の中で、かなりの地位にいる存在もがイオリと繋がりがあるということの意味している。

だが繋がっていることはわかっている、いったい誰が繋がっているのか、また何人いるのかもわからない状態では手の打ちようはない。

「……この件に関しては、今は頭の片隅に入れておくだけでいい。ユーノ次のデータを。」

クロノはそれだけ言って次の資料を映し出した。

全員今はどうにもできないことを理解し、複雑な思いを抱きながらもその思いをそっち胸の内にした。

『うん。こっちは20年ぐらい前に合った違法研究のデータだよ。』

「人造魔導師計画……コードプロジェクトM?」

資料を見たフェイトが誰よりも先に反応した。

それはフェイトにとってかつての事件を思い出させるには十分すぎるタイトルだった。

事情を知っている全員は目を見開き、クロノとユーノに視線を送った。

「……皆の知っているプロジェクトFとは別物だ。ただ無関係ではな

い。」

『簡単にいうならプロジェクトFの雛形ひながたとでも言えばいいのかな。目的は違うけどプロジェクトMの実験データをもとに進められたのがプロジェクトFのようなんだ。』

「それじゃあイオリ……」

フェイトはイオリも自分と同じ存在なのかと考えたが、
「違うー！」

クロノが声を大きくし、それを否定した。

『うん。違うんだ。プロジェクトMとプロジェクトFはデータが使用されたこと以外は完全に別物だよ。』

ユーノもフェイトの考えを否定し、プロジェクトMについて説明し始めた。

『プロジェクトMは人工的に最高の能力を持った魔導師を作ることが目的なんだ。まずは魔力資質の高い者やレアスキルを所有する者を集めて、彼らから遺伝子情報とリンカーコアを採取していく。それらを無理やり一つにまとめ、人造のリンカーコアを作り出す。……そして人造リンカーコアに適合するように遺伝子レベルから人工的に生まれさせた人間に移植するというのがプロジェクトMなんだ。』

ユーノがそう言ってまた別のデータを表示すると、培養槽の中に漂う胎児とサンプルとなった少年少女の姿が映し出された。

「あー！」

そのなかの一人に先ほどの映像よりもずっと幼いが、イオリの面影を持った少年の姿があった。

「10—11？これは……」

映し出された画像には首に何らかの装置をつけられ、そこに10—11と刻まれているのが見えた。それが何を意味しているのかは、この場にいる全員が予想が付き重い空気が満ちていた。

「……彼も何らかの理由でここに連れてこられて、いろいろな実験を受けたんだと思う。だが過去の実験そと今の犯罪れとは話しが別だ。」

クロノが重い空気を振り切るように、強い意志の籠った目で全員を見渡す。それにこたえるように全員頷き返した。

『それでこの施設のデータから彼の能力について断片的だけど分かったんだ。まず彼の特異な能力は魔力の超精密制御、これは本来デバイスで行う魔力運用をデバイスなしで出来るんだ。』

ユーノの説明を受け全員が首を傾げた。

「デバイスがあんのに自分でやる意味があんのか？」

疑問に思ったヴィータが尋ねると、ユーノはどう説明しようかとなやんだ。

『うくん、ここからは推測になるけどいいかな？』

ユーノが自信なさげに聞くと、全員首を縦に振った。

『フェイトたちとの戦闘データをみるに、彼の魔法はオリジナルか未発見の魔法なんだと思うよ。魔法陣も詠唱もないから、それを行うのに既存のデバイスでは無理があるんだと思う。』

フェイトやシグナム、そしてヴィータはイオリが戦闘で見せた魔法を思い出した。たしかにイオリは戦闘で一度も魔法陣も詠唱も見せることなく、予備動作なしで魔法を発動させていた。

『それと艦から消えたのだけど、こっちはレアスキルによるものだと思うよ。能力名「ドツペルゲンガー」。発動条件なんかはデータが消失していて分からないけど、ようするに容姿も思考も能力も全部オリジナルと同じ分身を生み出す能力みたいなんだ。』

それを聞いた全員は驚きのあまり目を見開いた。

「なんやそれ!? せやったらイオリはたくさんおるっちゆことか!？」

本来はいろいろな制限が存在するが、現在でそれを知っているのはイオリ本人だけで、制限を知らない人間からすればどうやって捕まえればいいのかわからない能力だ。

仮にまた捕まえたとしても全てが同じ分身など、本物かどうかなどわかるわけではない。

「映像を見る限りではそうだが、おそらく分身は消滅が確定しているはずだ。そうじゃなければ古代遺物ロストロギアどころか武器を一つも持っていないのはおかしい。そこが攻略の鍵だと考えている。」

はやての困惑をクロノはそう言って訂正した。

「ただ現状ではもう足取りを掴むことも、網を張ることもできない。」

全員これからは情報収集を主体で行ってほしい。……みんな頼んだ。」

そしてクロノたちの会議は終了を迎えた。

・
・
・

そのころ対策を考えられていたイオリ本人はというと、

「ギャー!?なんだこれ!?地面に引きずり込まれた!?!え?どーなってんだこれ!?!」

指定されたスカリエツテイのアジトを訪れたイオリは、突然地面に引きずり込まれ下半身が地面に埋まってしまった。

「成功!あたしだよー!」

突然のことに混乱していると、水面から顔を出すようにナンバーズの一人が地面から顔を出した。

「たしか……お前はセインだったか。何してんだよ。」

イオリが問いたですが、セインは悪戯を成功させた子供のように満面の笑みを浮かべながら再び地面に潜ってしまった。

その後悪戯に気がついたウーノによってセインが連れて来られるまで1時間ほど、イオリは地面から生えるという奇妙な体験をしていた。

報酬と契約

「まったく、ひどい目にあった」

ようやく地面から出られたイオリは、正座させられてウーノに叱られているセインに目をやった。

「で？ あいつは何がしたかったんだ？」

「フフツ。セインはISの最終調整がさつき終わったところでね。使ってみたかったんだろう」

スカリエツティは愉快そうに笑うと、セインの悪戯の動機についてそう説明した。

「そういうことは身内でやってくれ」

俺はは呆れた顔をしながらそう吐き捨てた。

実際なんの前触れもなく地面に引きずり込まれるなど、ただのホラーでしかない。

「申し訳ありませんでした。私の監督不備です」

セインへのお説教が終わったのか、いつの間にかスカリエツティの後ろにウーノが立っていた。

ウーノはそう言って俺に対して謝罪してきた。ただ笑って済ませるどこぞの変態とは段違いだと思った。

「ああ、もういいよ。ただ驚いただけだから。セインも、もうやんなよ！」

ウーノの謝罪を受けた俺はセインにそう言ってこの話を終わらせた。

セインも分かったと叫ぶとどこかへと行ってしまった。

「君は相変わらずナンバーズ彼女たちには甘いね」

スカリエツティは何がおかしいのか、笑いを噛み殺しながらこちらを見てきた。

「ふん。俺にとっては親戚みたいなもんだからな」

俺はそっぽを向いた。

「そうだね。プロジェクトMの遺児である君にとってはそうなるだろうね」

かつて俺がいた施設は多くの魔導師やレアスキル保有者が集められ、それらのデータをもとに最高の魔導師を作り上げようとしていた。

ただ全くの別人から集めた遺伝子情報とリンカーコアでは拒絶反応が大きく、最高の魔導師など夢のまた夢だった。

「そこで目をつけたのが系統樹。拒絶反応が少ないデータから少しずつ能力を合わせた子供を作り調整し、さらにその子供からデータを取り能力を合わせた子供を作る。すると最終的にはすべての能力を合わせた一人が生まれる。全く気の長い話だね。結局実験は管理局に見つかり頓挫、残ったのは僅かな実験体だけ」

スカリエッティは呆れを含ませた声で俺が作られた実験についてを語った。

同意するのは癪だが、スカリエッティの言うように、あの実験はあまりにも気が長すぎると俺も思う。だがその実験は研究者たちが慎重だったためもあり、長い間管理局の目からも逃れていた。そしてその膨大な実験データは様々な形で役に立っていた。

「そうは言うが俺で10代目のIIタイプだ。それだけの実験データは貴重なんだろう？ 現にお前の戦闘機人やプロジェクトFにも実験データの大部分が転用されている」

プロジェクトMは完成を間近に見た段階で管理局に見つかり、研究者は捕まる前に研究データを外部へ流出させ施設もろとも自爆した。「そうだね。ただわからないのはなぜ同じ実験体の君が実験を引きつぎMを完成させようとしているんだい？ 私はそれが前から疑問だったんだ。」

「ん〜……。まあたしかに変だが、俺にとっては全員が兄妹みたいなもんだったからな。兄妹が無駄死にしているのは何とも複雑だ。だからとりあえずは完成だけは目指してみただけさ」

俺のアジトは当時施設の設備と同じで、そこに一つの培養槽がある。

その中には俺たち実験体のデータの結晶とでもいうべき存在がある。あとはその人造リンカーコア【M】に適合する素体があれば、プ

ロジエクトMは一つの完成を迎えるだろう。

「ふむ。私には些か理解できないが、君の研究には私も興味がある。協力するのはやぶさかではないよ」

スカリエツティがそう言つてウーノに目を向けると、ウーノもそれが何を意味しているかを悟り奥へと消えていった。

「まあいい。それよりこれが依頼の物だ」

スカリエツティが何を考えているか考えたところでわかるわけもないので、俺は商談に移ることにした。

「ふむ……確かに本物のようだね」

スカリエツティはじつくりと俺が盗ってきた制御用ユニットを確認すると、満足そうに笑つた。

「ところで、君はこれが何かわかるかい？」

まるで俺を試すかのように手に持った古代遺物ロストロギアを掲げて見せた。

俺はスケリエツティの意図が分からずどうしようかと迷っていた。

あれが何らかの特殊な制御コアであることはわかるが、本来こういった依頼で詮索はご法度だ。だからこそ俺はあの古代遺物ロストロギアをアジトに持って帰つた時も、特に分析などはせずにそのままの状態でスカリエツティに渡したのだ。

なのに目の前のスカリエツティはわざわざこれがなんであるかを俺に聞いてきている。

「何かの制御コアだろ。……それで、一体何がしたい？」

俺の勘が面倒事が起こると注げているが、はぐらかしたところで結果は変わらないだろう。

俺は渋々と自分の見立てを話した。

スカリエツティは俺の見立てに対し「正解」と一言だけ言うように楽しそうに笑い、こちらを見てきた。

「君に少し頼みたいことがあるのさ。……ちなみに報酬の方はもう用意してあるよ」

そう言つて後ろに視線を向けた。

俺もその視線に釣られてスカリエツティの後ろを見ると、そこには先ほど奥へと消えていったウーノがいた。ただ先ほどとは違い、ウー

ノの横には手を引かれた少女が一緒にいた。

「……で？ それは何？」

俺は考えるのも面倒になり、目の前の人物に一言だけで問いかけた。

「彼女が君への報酬さ！ 彼女なら君の研究に必要な最後のピースになるはずさ」

スカリエッツィの言葉を聞きながら、俺は少女に目を向けた。

おそらくはスカリエッツィが生み出した人造魔導師だろう。

解析してみたがウーノ達のように体内に機械があるわけでもなく、リンカーコアも正常に機能しているのが見えた。だがそれ以上に恐ろしいのは、少女の魔力量と魔力光だ。

「おいおいこいつは何を元にしたらこんなのが生まれるんだ？」

別段世間一般の倫理観など語るつもりはない。

俺の研究に必要なならば、俺とてクローンを作ったりする。だがスカリエッツィが連れてきた少女は、明らかに異常だ。

少女の魔力量は絶対値が途方もなく大きいのに対して魔力の生成量があまりにも少ない。

例えるならダムをコップでいっぱいにしようとしているようで、はつきり言つて無駄な努力だ。

そして魔力光は指紋のようなもので、魔力を持っているなら必ずあるはずなのに、少女からはその魔力光が確認できない。

「魔力があるのに魔力光がない？ おいおい、矛盾してるぞ」

俺は訳も分からず見たままの分析結果を口にした。
「相変わらずその左ロストコア目は便利だね。見ただけでそこまで分析できるなんて」

スカリエッツィは興味深そうに俺の左目に注目するが、俺にとってはそんなことどうでもよかった。

「いいから答えろ」

俺はスカリエッツィを睨みつけた。

スカリエッツィはわざとらしく肩を竦めて見せて説明を始めた。

「彼女はある人物のクローンを作る途中で生まれた失敗作さ。彼女は要は空っぽなのさ。元の器は大きくとも、そこに収まるべきものを何も持たずにできてしまつてね。……ただここまで見事に空っぽな器なら、君の持つている【M】を入れるのにちょうどいいとは思わないかい？」

確かに少女の器なら、もしかしたら可能かもしれない。

なにを元にしたのかは知らないが、元となった人物は相当な資質を持つていたのだろう。だが少女はそれらすべてを持つていない。

本来【M】はあまりに多機能で膨大な魔力生成量を誇るため、少しでも移植者に合わないとは壮絶な拒絶反応が出る。そのためにプロジエクトMは何代も代を重ね、少しずつ適応させていった。だがここまで空っぽならば、【M】を移植したところで拒絶反応は起きない可能性が高いはずだ。

「……はあく。分かったよ！ 協力すればいいんだろ？」

俺がそう言つて了承すると、スカリエツティは口に笑みを浮かべた。

そしてウーノに少女を俺に渡すように指示すると、本題を口にし始めた。

「契約成立だね。なに、頼みたいのは探し物。いつもと同じさ」

「何を探せばいい」

俺は隣に來た少女の姿を改めて観察しながらスカリエツティに訊いた。

少女は色が抜け落ちたかのような白い髪に、白い肌をしていた。そして瞳は、本人の性質を表しているかのように何の感情の色もない虚ろな瞳だ。

「……聖王のゆりかご」

ただ左右で色の違う瞳だけが印象的だった。

どうやら俺はとんでもないことに足を突っ込んでしまったようだ。

人物紹介&用語解説

人物紹介

名前 イオリ

身長 173 cm 体重 62 kg

魔力量 B

魔力光 青に近い水色

魔導師ランク 推定B

所有スキル 凍結変換 超精密制御 ドツペルゲンガー 並列処

理 魔力の高速運用

・元はプロジェクトMの実験体。10世代目のIIタイプ。

作成時のコンセプトが制御能力の高い個体であったため、攻撃や防御よりも魔力の運用、操作に特化している。さらに生まれつきリンカーコアが4つあり、自由に抜き取ることができる。

かなり慎重で見つからない努力だけでなく、見つかった場合の対処法やなどまで数十通りの作戦^{プラン}を常に用意している。その他にも管理局の上層部にパイプを作り、そもそも捜査の対象にならないように根回しもしている。

戦闘技術や駆け引き、逃走に関しては高い能力を有するが、戦闘能力自体はさほど高くない。

フェイトたちのことを化け物扱いして、かなり恐れている。

本人いわく、「まともに戦ったら瞬殺される自信がある」

本来の戦闘方法は、所有するロストロギアを主体として、魔法はあくまで補助的なもの。

所有しているロストロギアはかなりの数だが、実際には魔力量の関係もあり使用できない物が多数ある。

かつて実験体ではあったが、実験でされたことは血液採取とリンカーコアの採取だけなので、研究者にたいしては恨みなどは持っていない。(他の実験地はリンカーコアを抜き取られる際に、苦痛を感じていたため研究者に恨みや恐怖を抱いていた。)

そのため死んでしまった実験^兄体^妹のために、形だけでも完成させて彼

らの生きた証にしたいと考えている。

名前

身長 125 cm 体重 22 kg

魔力量 不明（絶対値は大きいですが、回復量は限りなくゼロに近いため正確には測定できない）

魔力光 無色

魔導師ランク 無

所有スキル 不明

・スカリエツティによって作られた実験体。左右で色の違う瞳が特徴。

元は聖王オリヴィエを元にされているが、何らかの原因で突然変異を起こした。

聖王の能力は持つておらず、イオリ曰く空っぽの器。

感情面でも空っぽのようで、命令されなければ何の反応も示さない。

イオリへの報酬として渡された。

用語解説

【プロジェクトM】

・イオリが作られた実験。

最高の魔導師を造ることを生み出すことを目的とし、多種多様なレアスキルと膨大な魔力を持つ人造のリンカーコア造ろうとしていた。だが全く違う人間から魔力やレアスキルを移植した際に、拒絶反応が大きすぎたため頓挫し一時プロジェクトは凍結しかかった。

そのため研究者たちは視点をかえ、手段として系統樹に目をつけた。

一世代では無理なら、何世代もかけて徐々に能力と魔力を増やし、

最終的にそれらを一人にまとめようとした。

13世代で完成する予定だったが、イオリたち10世代目で管理局に見つかり実験データを流出させ研究所を爆破し、研究者は全員死亡した。

【M】

・イオリが入手した実験データを元に、いくつかの古代遺物の力を
ロストロギア
使い完成させた人造のリンカーコア。

あまりに複数のレアスキルと、膨大な魔力のため移植できる個体がないため放置中。

【ドツペルゲンガー】

・イオリのレアスキルの一つ。

リンカーコアに自身の血液を与えることで、能力、魔力、容姿すべてがオリジナルと同じ、完全な複製を作り出す。

作り出された複製は独自に思考し行動する。本体とリンクしているので、念話を用いずとも互いの位置や状態が把握できる。

【超精密制御】

・イオリのレアスキルの一つ。

最新のデバイス以上の精度で魔力を制御できる。そのため無駄な魔力の消費はなく、本来ならあり得ないほど魔法の長時間維持ができる。

デバイスなしで魔法を使用できるのはこのレアスキルのおかげ。

【並列処理】

・イオリのレアスキルの一つ。

完全に違う魔法を複数同時に操作したり、使用中の魔法を他の魔法で上書きしたりできる。

【凍結変換資質】

・変換資質の一つ。

炎熱や電気よりは珍しい。

イオリにとつてお手軽に使える質量兵器。おもに氷で攻撃したり、対象を凍らせたりして攻撃している。

炎熱系とはあまり相性が良くない。

絶対絶命Ⅱ

「……拒絶反応は今のところなし」

俺は調整用の培養槽に浮かんでいる少女に目をやりながら、手にもった端末に収集してあるデータに目を通した。

あの後スカリエツティからの「聖王のゆりかご」の探索を請け負い、少女の身柄を受け取った俺はアジトへと戻り数日かけて少女と人造リンカーコアの融合をおこなっていた。

「ふう〜。疲れた」

実験の結果は問題なく成功を収めた。

少女は培養槽に浮かんだまま動かないが、端末に送られてくるデータや左目で得られた情報ではこれといった問題は確認できず、一番懸念していた拒絶反応も出ていない。

「あとは完全に安定したら終わりだな」

ようやく一息をつくことができた俺は、実験のデータを脇にやり別のデータを端末に表示した。

そこにはスカリエツティから渡された聖王ゆかりの遺跡や、伝承から推測される「聖王のゆりかご」の封印場所の候補などのデータが入っていた。

「……」

データを見ていると自分の顔が徐々に不機嫌になっていくのを感じた。

ゆりかごに関する封印場所の候補は、何処を見ても聖王教会が管理している場所がほとんどで、おいそれとは近寄れない。

「あいつ……面倒事を押し付けやがったな」

今頃いつもの腹黒い笑みを浮かべているスカリエツティの表情を想像し、腹が立ってきた。

とはいえ報酬を受け取ってしまったからには、依頼を破棄することもできない。

俺は少女に目を向け、ふとあることに気がついた。

「名前が必要だな……」

少女に名前がないことを思い出し、これから一緒に行動することを考えれば名前がないのは不便だ。

俺は少女の名前をどうするか考え始めた。

「こいつは聖王のクローンだったな。確か聖王の名はオリヴィエ、とはいえ同じ名前はさすがにな。どうするかな？ うくん」

さすがにそのままの名前はどうかと思う。かといっていい名前が浮かばない。

「白いから……雪？ いやでも雪なんて生易しい能力じゃないか」

その白い肌や髪から雪を連想したが、魔力も能力も雪というには可愛らしさの欠片もない凶悪なものだ。

「ん……雪じゃなく雪崩か？ ラヴィエにしとくか？」

俺は少女を見ながらそう告げた。

雪崩と元のオリヴィエをくつつけた感じた。

「まあ気に入らないなら起きてから自分で考えてくれ」

俺は近くにあったソファに横になり、一休みすることにした

微睡まどろみの中で、何処からか視線を感じた気がした。

「ん〜？」

脇に置いていた端末を探し当て、今の時間を確認するとかなりの時間が経っていたようだ。

一休みのつもりだったが自分で思っていた以上に疲れが溜まっていたようで、本格的に眠ってしまったようだ。

「……」

「……」

端末から目を放すと目が合った。

そこには寝る前は確かに培養槽の中で最終調整を行っていたはずのラヴィエが、ソファで寝ている俺のことをじーっと観察していた。

「お、おはようっ？」

思わずそんな間抜けな挨拶をしてしまった。

「……」(こくこく)

俺の言葉に反応を見せ、ラヴィエは首を小さく振りながら頷いた。どうやら最終調整で施した必要最低限の知識の学習も問題ないようだ。

「言葉はわかるな？」

念のために確認してみた。

「……わかる」

左目で確認してみると初めて会った時とは違い魔力が充実している上に、魔力光も安定している。

たださすがに感情はどうにもできないため、声は固く感情の起伏が感じられない。

「わかるならいい。よろしくなラヴィエ。俺はイオリだ」

「……ラヴィエ？ ……イオリ？」

首を傾げながらオウム返しで聞き返してきた。

「ああ。名前がないと不便だからな。ラヴィエはお前の名前で、イオリは俺の名前だ」

「……ラヴィエ」

ラヴィエは自分の名前を確かめるように、何度も繰り返しつつやっていた。

そんなラヴィエに視線を送りながらあることに気がついた。

「……そっぴや服がないか。とりあえずこれでも着ろ」

ラヴィエは現在培養槽に入っていた時と同じ格好、つまり素っ裸だった。

俺は傍にあった自分の服を渡してやった。

「……大きい」

俺の服を着て一言そう漏らした

「当たり前だ。……そう言えばお前はどうかやって培養槽から出たんだ？」

あれは内部から操作できない。

出るにしても外部から操作しなければならぬが、端末から確認しても操作された記録は存在しない。

「……………」

一言そう言うのとラヴィエは俺に手を伸ばしてきた。その手は俺に触れると何の抵抗もなく俺の中に入ってきた。

「うお!!」

俺は驚きのあまりソファから転げ落ちてしまった。

「……………」

ラヴィエは俺の行動の意味が分からず首を傾げていた。

「あゝ。今のは?」

「……物質透過」

なるほど。

持っていた端末でリンカーコアのデータを参照すると、たしかにラヴィエの言っていたレアスキルが記録されているのを確認した。

培養槽から出たばかりなのに一切濡れていないのも、その物質透過で水ごと透過したためだろう。

「どうやらレアスキルの行使は問題ないようだな。となると後は魔法の使用か」

俺はこれからの予定を考え始めた。

これまでのように人造リンカーコアの研究や維持をしなくていい分、アジトに必要な維持費はかなり軽くなる。

そして当面の目的はスカリエツティから依頼された「聖王のゆりかご」の探索が最優先だ。それならラヴィエに魔法や戦闘技術を教えながらできそうだ。

「まあ、それより先にラヴィエの服だな」

何をするにしても服がない状態では、何の行動もできない。

「ラヴィエ。出かけるぞ」

俺はソファから立ち上がるとラヴィエの手を引いた。

・
・
・

ミッド中央にやってきた俺とラヴィエは、現在街から少し離れた人通りの少ない場所を移動していた。

もつともラヴィエを連れてきたのはいいが、着ている服が俺の上着だけではさすがにまずいためどうしようかと考えた。

「……大丈夫」

俺が頭を悩ませていると、ラヴィエは一言そう言っただけで目を閉じた。次の瞬間、ラヴィエの魔力が高まると光に包まれた。

ラヴィエを覆っていた光が静まると、先ほどまでの服装とは違いラヴィエのサイズに合った白を基調とした防護服を身にまとっていた。

「……ヴァイスシュトルツ白の誇り」

どうやらバリアジャケットのようなものらしい。

スキルの一つのようにだがどうやらかなり強固な防衛機能があるようで、左目を使用したにもかかわらず、はつきりとした情報を得ることができなかつた。

おそらく物理的な防御だけでなく、情報面においても防御能力を発揮しているのだろう。

「……なんでもありだよな。お前」

あの防護服にどれだけの能力があるかはわからないが、おそらく俺が本気で攻撃しても傷一つ付かないだろう。

俺は空しさと呆れを含ませた視線でラヴィエを見た。

「……お前違う。……ラヴィエ」

そんな俺の心境を全く無視してラヴィエが初めて自己主張した。

「あ、ああ。そうだったな。ラヴィエ」

どうやら予想以上に名前を気に入ってくれたようだ。

俺は戸惑いながら頷いた。

「……」(こくこく)

それに満足したようで、ラヴィエはこくこくと頷きながらこちらを見してきた。

そして俺はラヴィエの恰好を見ながら、これなら問題ないだろう判断し手を握り街へと入っていた。

街へと入った俺たちは、さっそくラヴィエの服を買うために店を探し始めた。

「え〜つと、ラヴィエくらいの子の服が置いてある店は……」

俺は端末を操作し、条件に当てはまりそうな店舗の情報を検索していた。

くいくいつ

店を探していた俺の手をラヴィエが引いてきた。

「どうした?」

「……あれ」

そう言っつてラヴィエが指差した方を見ると、そこにはウィンドウスペースに女性物の服を飾っている店があった。

ウィンドウにはラヴィエくらいのサイズのマネキンも飾られており、俺はラヴィエの手を引いて店へと入っつていった。

「いらっしやいませ」

店に入ると、さっそく店員が出迎えてくれた。

店内を見回すと外からはわからなかつたが、奥行きがあり予想以上に広い店だつた。そして並んでいる服に関しても、良いセンスの物が多く俺はここでラヴィエの服を買うことにした。

「この子に合う服を何点かお願いできますか?」

正直俺は自分で女の子の服を選ぶのは気まずいので、出迎えてくれた店員にお願いした。

「あら、可愛いお嬢さんですね。かしこまりました。何かご希望などはございますか?」

「いえ、お任せします。それとこの子の下着もお願いします」

そう言っつてラヴィエの背中を押してやつた。

ラヴィエは素直に従い、店員と一緒に店内のサイズの合う服のある場所へと移動していった。

「やつと」

こうなると俺はヒマになるので、今のうちにラヴィエに関してのデータを整理することにした。

「え〜つと、最初は物質透過か」

まずはラヴィエが最初に使用した物質透過に関しての詳細データを表示した。

物質透過は連続使用時間は20〜30分で、使用中は物理や魔法など問わず外部からの干渉を一切受けなくなるといふ。

「とんでもないな。……あれ？　ならどうやって地面に立ってんだ？」

完全に透過するなら地面に立つのは不可能なのではないかと思ひ、続きを進めていく。

透過中は無意識下により、自分の位置を固定することでその場に存在していると書いてあった。

「つまり透過中はホログラムみたいな状態か」

俺は納得すると、次のデータを参照し始めた。

次のデータは先ほどラヴィエが使用した、防護服に関してだった。
ヴァイスシュトルツ
白の誇り。

基本としてはデバイスなどによるバリアジャケットと同じだが、その能力は桁違いに高性能だった。

「……なんだよこれ」

そこにはあきれ返るほどのデータが記載されていた。

物理防御、魔法防御が高いのはいうに及ばず、身体能力強化や自己治癒能力、自動修復、さらにはステルス機能までついている始末だ。

「おいおい」

もはや異常なまでの防御機能だった。

これでは先ほどの予想通り、俺の魔法は完全に通用しないだろう。

自分たちの研究の結晶とはいえ、ここまでの物だとは予想をはるかに上回る存在だったようだ。

「いらっしやいませ」

データを見てみると新しく客が来たようだ。

俺は何となく入口に視線を向けると、そこにか完全に想定外の緊急事態が発生していた。

「っ!？」

慌てた俺は椅子から転げ落ちるように物陰に隠れた。

(おいおい!?　なんで管理局のエースとフェイト執務官がいるんだよ!?　おまけにもう一人は歩くロストロギア八神はやてか!!?)

組織というものは生き物のようで、大きくなればなるほど足物が疎かになる。

そのためミッド中央ではそうした管理局の隙について、闇市が開かれていた場所がある

今回買い物をするのにわざわざミッド中央を選んだのは、服のついでにラヴィエのデバイスを組むパーツを闇市から買っていくためだったが、完全に裏目に出ってしまったようだ。

(会話からすると休暇か?　なんでよりにもよって今日この場所なんだよ!?)

俺は心で悪態をつきながら何とかばれない様に物陰を移動し始めた。

おそらくフェイト執務官には俺の顔が知られていると考えて間違いない。

ドツペルゲンガーは基本的に自分の分身を造るだけで、ロストロギア古代遺物を再現することはできない。

そのためドツペルゲンガーは俺の素顔のまま、相手に見えてしまっている。

(おまけに認識障害のロストロギア古代遺物はおいてきたしな)

俺の所持する認識障害の古代遺物《ロストロギア》は人が多いと多いほど魔力を多く消費してしまうため、こういった街などでは使用できない。そのため今日はアジトに置いてきてしまった。

「……何してるの?」

物陰で蹲っていると服を選び終えたラヴィエが戻ってきた。

店員も困惑した表情でこちらを見ている。

店内にいる人たちも何かあったのかとこちらに注目しているのが分かった。

(最悪だ)

どうやら絶体絶命は続くようだ。

まだ続く絶体絶命Ⅱ

「あの……お客様？　どうかなさいましたか？」

俺がベンチの裏に転がっているのを見て、ラヴィエとともにこちらへやってきた店員がそう聞いてきた。

「あく、いや。ちよつとウトウトしてて……」

我ながら言い訳としては厳しいものがあると思うが、店員は深くは追及してこなかった。

「そ、そうですか。気をつけてください」

店員の目は完全に俺を変な人として見ており、きつと店員は俺と関わらない方がいいと思ったに違いない。

「そ、そうなんです。ラ、ラヴィエ。財布渡すから支払してきてくれ」俺はそう言つて懐から財布を取り出すと、ラヴィエに渡した。

今この死角から出てしまうと、管理局の化け物三姉妹？に見つかる恐れがある。

「……ん」(こくり)

ラヴィエは俺から財布を受け取ると、店員を連れて会計に向かった。

「なんや？　おもしろいことでもあつたんかな？」

「にやはは、どうかな」

「誰かベンチから落ちたみたい。それより今の声、なんだか聞き覚えが……」

俺の心臓は破裂するのではないかと思うほど早く脈打っていた。

「うくん？　せやかてここは女性服の店や。それに女の子もおつたし子連れの知り合いなんかおらんで？」

「……気のせいかな？」

「にやはは。ここ最近仕事を立て込んでるから疲れたんだよ。せつかくみんな一緒に休暇なんだからたのしもう？」

三人はそんな会話をしながら俺の方から遠ざかっていった。

(か、確実に寿命が縮んだ！)

俺はいまだに鳴り止まない心臓を落ち着けるために深呼吸をした。

「……なにしてるの？」

俺が先ほどから同じ体勢でいるのが不思議でしょうがないのか、戻ってきたラヴィエは先ほどと同じことを聞いてきた。

「お、終わったか？」

「……」(コクン)

見れば確かにラヴィエの横には服の入った袋があった。

俺はそつと周囲を確認し、近くにあの三人がいないことを確認すると、ラヴィエの持ってきた袋とラヴィエの手を掴み慌てて店から出て行った。

「ありがとうございました」

後ろからは店員の挨拶が聞こえた。

「はあ〜」

先ほどの店からはかなり離れた公園で、ラヴィエを隣に座らせながら、俺は盛大にため息をついた。

「街に来て見かけた人間があの人三つて、どんだけ運が悪いんだよ俺」
管理局はいつも人手不足で、ある程度の能力がある人材の休暇はバラけている。

あの三人クラスの魔導師なら、よほど運が良くなければ一緒に休暇を取るなんてできないはずだ。

「もう今日は厄日だ」

「……イオリ」

俺が頭を抱えて項垂れていると、ラヴィエが慰めるように頭を撫でてくれた。

なんとも癒される。

「ありがとな。ラヴィエ」

「……」(ふるふる)

そう言うとラヴィエは首を横に振った。

おそらくは気にするなと言っているのだろう。

顔を上げると公園の入り口にアイスクリームの販売車が止まっているのが見えた。

「アイス食うか？」

「……あいす？」

そう言えば最終調整で入れた知識は一般常識やスキル関係、それと魔法関係のみだったことを思い出した。

「食べてみるか？」

「……」（こくん）

もう一度確認すると、少し迷ってから首を縦に振った。

俺はラヴィエの手を引いてアイスクリーム屋の前に来た。

「すいません。バニラと……ラヴィエはどうする？」

「……おんなじ」

「バニラ二つください」

ラヴィエに確認してから注文した。

「どうぞ」

アイスを受け取った俺はラヴィエに持たせると、財布からお金を取り出し支払いを済ませた。

ラヴィエは手に持ったアイスが冷たいことに驚いているようで、困ったような顔で俺を見上げてきた。

「ほら、食べてみ」

俺はラヴィエにお手本を見せるようにアイスを食べ始めた。

それを見たラヴィエは、恐る恐るといった表情でアイスに舌を伸ばした。

「……甘くて冷たい」

それからラヴィエは夢中になってアイスを舐め始めた。

「零すなよ」

そんなラヴィエをしり目に俺は持っていたアイスに噛り付き、しばらくと口に入れて呑み込んだ。

ラヴィエのようにのんびり舐めながら食べるのは性に合わない。

俺はアイスを食べ終わると、のんびりとベンチに腰掛けながらラヴィエの様子を観察していた。

「……おいしい」

「そうか」

今日だけでラヴィエにも感情らしき片鱗が見えたのは大きな収穫だろうと考えながら、俺は何となく公園の入り口に目を向けた。

「ん、んん?」

俺は思わず自分の目を擦ってしまった。

いつから俺の目はこんなに悪くなったのだろうか、一瞬本気で考えてしまった。

視線の先。

公園の入り口について最近見た記憶があるピンクの頭と紅い頭が見えた。

「んな!?!」

俺は慌ててラヴィエを抱えて後ろのベンチに移動した。

(き、気がついてないよな!?)

ようやく収まっていた心臓が再びたたましい鼓動を上げ始め、冷や汗が頭上から顎まで流れてくるのを感じた。

「まったく。なぜ私が」

「しょうがねーだろ。はやてはなのはたちと買い物いったんだから」

例の二人組は先ほどまで俺たちが座っていたベンチに腰かけた。

現在俺たちとシグナムたちは背を向けて座りあっている状態になっている。

バクンバクン

心臓の音が後ろの二人に聞こえるのではないか心配になってきた。

それほどまでに俺の心臓は脈打っている。

「……おいしい」

そんな俺の心配をよそに、隣ではラヴィエが暢気のんきにアイスを舐めていた。

「それよりもヴィータ。腕は問題ないのか?」

「ん? ああ。シャマルにも見てもらったけど、軽い凍傷だったよ」

「問題ねえよ」とヴィータは答え、買ってきたアイスを食べ始めた。

シグナムのほうも「そうか」とだけ言うと、二人は静かにアイスを

食べていた。

(うがー!! 早くどつかいてくれー!!!)

俺は心の中で絶叫した。

今日は厄日なんてものじゃない。きっと今日は俺の人生で最悪な一日だ。

俺は確信した。

「それよりもこの間のイオリってやつのはどうなんだよ?」

「何も無いな。おそらくどこかに潜伏しているのだろう」

「はっ! 案外近くにいるかもしれないな」

ヴィータはシグナムの問いに面白くなさそうにそう言った。

(大正解だよ! ちくしょうが!)

「……イオつむぐ」

俺は慌ててラヴィエの口にハンカチを押し当てた。

「あん?」

後ろで何が起きたのか気になったのか、ヴィータがこちらを振り返った。

俺はかつてない緊張を感じていた。

「むぐ……むぐ……」

ヴィータには俺とラヴィエの様子は口の汚れを吹いている親子か、兄妹に見えたのか興味をなくしたように正面に視線を戻した。

「ヴィータ、そろそろ行くぞ。主はやてとの合流時間だ」

「わかったよ」

ヴィータは残っていたアイスを口に入れると、ベンチから立ち上がりシグナムと共に公園を後にした。

「……ぶはあゝ」

「……イオリ?」

俺は肺に入っていた鉛のように重い空気を、ようやく吐き出すことができた。

「……さ、最悪だ」

「……イオリ」(くいくい)

俺が再び項垂れそうになると、ラヴィエが袖を引いてきた。

「ラヴィエ……どうした？ 慰めてくれるのか？」

俺がラヴィエにそう尋ねると、予想外の返答があった。

「……アイス。……もう一個」

目を輝かせながらラヴィエはそう言った。

「……もう好きにしてくれ」

俺はがつくりと項垂れながら、アイスを買うお金をラヴィエに渡した。

「なあ、シグナム」

「なんだ、ヴィータ」

先ほどの公園を後にした二人は、荷物を持ちながら街中を歩いていた。

「さっきの公園にいた男。どっかで見たことねえか？」

ヴィータは先ほどの公園で、子供の口を拭いていた男についてどこか納得がいかない表情をしていた。

「ふっ」

ヴィータの口から出た内容にシグナムは笑みを浮かべた。

「な、なんだよ！」

「いや、あのヴィータから男の話題が出るとはな」

ヴィータは不機嫌に表情を歪めた。

「ふざっけんな！」

ヴィータが食って掛かってきたところで、シグナムはからかうのをやめた。

「冗談だ。さっきの男については私も見覚えがある気がする」

今度はヴィータの質問にちゃんと答えたシグナムだが、ヴィータと同様にどうにも釈然としない様子だ。

「とはいえどこでだったかが思い出せない」

「そうなんだよな。子連れの知り合いなんかクロノの野郎くらいしか思い浮かばねえよ」

二人は男が子連れということに目が行き、しっかりと顔を確認して
いなかった。

あの場で二人が男の顔を確認したならば、イオリのことを思い出し
即座に行動に移っていただろう。

二人は悩みながら街を進んでいった。

「ヴィータ！ シグナム！ こっちやくー！」

二人が考えながら歩いていると、前方から二人を呼ぶ声が聞こえ
た。

「あ！ はやて〜！」

ヴィータははやてを見つけると、先ほどまで悩んでいたことを頭か
ら追いやり、はやての元へと走り出した。

そんなヴィータを見ながら、シグナムは苦笑を浮かべながら歩いて
後を追った。

「ヴィータ、お疲れさんやな。シグナムもご苦労さん」

はやては二人を労った。

「テストロッサも休暇は楽しめたか？」

「はい！ シグナムも今日は買い出しをお願いしてごめんなさい」

フェイトがシグナムに頭を下げると、シグナムは気にするなと言
いフェイトの頭に手を置いた。

「にやはは、ヴィータちゃんもありがとう」

「おめーはたまには休め！ それといちいち頭をなでんな！」

なのはがヴィータの頭を撫でようとすると、ヴィータはそれを躲し
はやての陰に隠れた。

「それじゃあみんな帰るか」

そう言っではやてがまとめて、全員が帰路へとついた。

その間イオリの方は、また誰かに合うんじゃないかと怯えながら、
街中を少しづつ移動していた。

愛機誕生

「つ、疲れた。……最悪の一日だった」

あのあと細心の注意を払いながら公園を後にし、目的の闇市で必要な物を見つけだしアジトへと戻ってきた。

俺はアジトへ着くと同時にソファへと身を投げた。

「……大丈夫?」

ラヴィエがしやがみながら俺の顔を覗いてきた。

「ああ、大丈夫だ。……とりあえずそのアイスは冷凍庫に入れとけよ。」

「……」(こくこく)

ラヴィエは途中で買った大量のアイスを抱えたまま、冷凍庫を目指して食料庫へと向かっていった。

「さて……ラヴィエのデバイスの設計でもするかな」

俺は一息つくくとソファから起き上がり、ラボへと向かった。

「ラヴィエの魔力ならミッドチルダ式か? いやでも元が元だから相性は古代ベルカの方がいいのか? いやでもレアスキルと魔力を考慮すると近代ベルカも……」

ラヴィエは膨大な魔力を持っている。

それだけなら無理に近接戦闘を優先するより、膨大な魔力に物を言わせた遠距離が主体のミッドチルダ式のインテリジェンスデバイスが良いだろう。

ただラヴィエ自身が古代ベルカの王の一人、聖王オリヴィエのクローンだ。

それならば古代ベルカ式や近代ベルカ式に多くあるアームドデバイスも悪くない。

他にも純粹にサポートを優先するなら、作成が困難ではあるが融合騎も視野に入れてもいいかもしれない。

「ん……どうすつかなく」

「……ない?」

「うおっ!」

悩んでいたところにいきなり声を掛けられ、俺は驚いてしまった。

「ドア開いてないぞ? ……物質透過で入ったのか?」

「……」(こくり)

物質透過で近づかれたら音も気配も感じないため、ひどく心臓に悪い。

「アジトで物質透過禁止だ」

「……わかった」

ラヴィエは無表情にそう言った。

その様子を見る限り、本当に理解したのか疑いたくなる。

「まあいい。……ラヴィエ、ちょっとこっちに来て」

俺はラヴィエを呼ぶと、ラボの奥にある計測器をいくつか取り出した。

「……?」

ラヴィエは興味深そうに俺の手元を覗き込んできた。

俺はそれをラヴィエの手に嵌めていき、モニタリングを開始した。

「……なに?」

ラヴィエは首を傾げながら聞いてきた。

「これか? これはラヴィエの魔力と身体機能を計測を計測してデバイスの相性を調べる装置だよ。デバイスを作るにしてもラヴィエがどういった魔導師なのか分からないと作りようがないからな」

ラヴィエはしばらく装置を眺めたり触って確かめたりと、興味深々と言った様子で眺めていた。

しばらくすると計測が終了したようで、俺の手元の端末にデータが表示された。

「ん〜……やっぱベルカ式との相性が高いか。とはいえミッドチルダ式とも相性が悪いわけでもないな……ラヴィエはどっちがいい?」

「……イオリの魔法は? それとデバイスは?」

俺が悩んでいると、ラヴィエが俺の使う魔法とデバイスについて聞いてきた。

「俺か? 俺のは参考にはならないぞ。俺の魔法はミッドチルダ式でもベルカ式でもないし、デバイスも使わない」

俺は正直に答えた。

超精密制御能力は魔力を制御するうえでデバイスよりも効率よく制御できるが、俺の制御範囲が半径50m、直径100mの球状だ。その範囲から出てしまった魔力はや魔法は一気に制御力が落ちてしまい、シューターなどの遠隔制御がままならない。

さらに俺は収束系が苦手な遠距離での攻撃はほぼ使えない。そして身体能力が高いわけでも、格闘術の才能があるわけでもないので近接戦闘も危険だ。

これらの結果から俺は独自の魔法体系を作り、現在の戦闘技術を確認した。

俺はそのことをラヴィエに説明してやった。

「……ラヴィエもイオリと同じ」

「あく……たしかに俺の能力もラヴィエはもってるけど、俺と同じは無理だ」

ラヴィエの希望を俺はバツサリと切り捨てた。

「……どうして？」

ラヴィエは少し不機嫌そうな顔で俺に問い詰めてきた。

「単純に魔力量の違いだ。俺の魔力をバケツの中の水とする。俺はそれを自分で正確に量って使える。……でもラヴィエの場合は魔力がダムに溜まった水だ。ダムから水を取り出すのに自力で正確に量るのは無理だ。だからデバイスという補助が必要なんだ」

超精密制御はいわば魔力という見えない水を正確に測り操るための目と手のようなものだ。

バケツの水を量ったり持ち運んだりするのは簡単だが、それがダムの水のように膨大なら専用の設備などがないと不可能だ。

ラヴィエにとってデバイスはそういつた役割にあたる。

「わかったか？」

「……ん」(こくり)

俺はラヴィエの説得に成功した。

「それで……結局何か希望はないのか？」

「……ない」

ラヴィエの身もふたもない一言に困ってしまった。

「……しかたない。ラヴィエのもとになった聖王の戦い方を参考に
するか」

俺は昔文献で読んだ聖王に関する資料を思い出した。

聖王オリヴィエは両腕がなく、鋼の義手を用いた戦闘を行っていた
という。

「なら肘まである鋼の手甲でいいかな」

形状はそれでいいだろう。

そうなると自然に近接戦闘が主体になってくる。それを考慮する
なら魔法は近代ベルカを教えていくことにしよう。

「あとはカードリτζジシステムかな……いらないか」

ラヴィエの魔力量を考えるとカードリτζジの必要性を感じない。

「あとは待機形態か。ラヴィエ……好きな形はあるか？」

「……アイス」

「アイスは好きな食べ物で形じゃない」

俺は呆れながらツツコミを入れた。

「……わからない」

アイスを否定されたせいかわ、少し悲しそうな表情をしていた。

「うくん……どうするかな」

俺はもう一度考える羽目になった。

(アイスから連想するもの……氷……冷たい……)

とりあえずラヴィエの希望にできるだけそうように、アイスから一
人で連想ゲームのように考えていると、俺の目の前で揺れている真っ
白なラヴィエの髪が目に入った。

「雪……かな」

「……ゆき？」

雪の結晶をモチーフにすることにした。

(形状は腕を覆う手甲。魔法は近代ベルカ式でラヴィエのリンカーコ
アとリンクさせてスキルの補助もするようにしよう。それで待機状
態は雪の結晶の髪飾りかな)

そうと決まれば俺はさっそくデバイスの作成に取り掛かった。

「デバイスの素材はコレクションのレアメタルでいいな。AIも探せばいくつかあるはず。……さて、早速取り掛かるか」

俺はラヴィエに休んでいるように部屋に戻すと、ラボにある機材をフル稼働させ始めた。

・
・
・

「よし！ これでとりあえずは完成だ。あとはラヴィエが使つて、少しずつ調整していくしかないな」

完成したデバイスを装置から取り外した。

いつの間に部屋に入ってきたのか、ラヴィエは完成したデバイスを眺めていた。

俺はデバイスをラヴィエに手渡した。

「ほれ、あとは名前を付けてやれ」

「……名前」

いきなりそう言われてもすぐには思いつかないようで、ラヴィエは真剣な表情で考え始めた。

「ふあ………決まったら教えてくれ」

俺は疲れがピークに達したため、睡魔に負けて椅子に座ったまま眠りに落ちた。

「……名前」

ラヴィエは真剣に考えていた。

ラヴィエ自身もつい最近まで名前を持っておらず、イオリに名前をもらった時に初めて嬉しいと感じた。そのため名前には人一倍思い入れがあった。

「……名前」

だからこそこのデバイスの名前もしっかりとしたものを考えようとしている。

ラヴィエは自分の知識として与えられた情報から、このデバイスに合う名前を必死に探した。

「……決めた。エファンゲリウム」

《B e g l a u b i g u n g》(認証)

ラヴィエが名前を決めるとデバイスはそれに答えた。

「……よろしく、エファンゲーリウム」

《F r e u n d l i c h e G r a ß e》(宜しくお願いします)

「……おきて」

ゆさゆさ

「んあ?」

ゆさゆさと身体を揺らされる感覚に目が覚めた。

「あゝ……おはよう」

「……おはよ」

俺は寝ぼけた頭で、寝る前に何をしていたか思い出そうとした。

「名前……決まったよ」

「お、そうかデバイス」

ラヴィエの一言で寝る前に何をしていたのか思い出した。

デバイスを作成した後、疲れがピークに達した俺はラヴィエに名前を決めるように言っていたはずだ。

「決まったのか?」

「……うん。エファンゲーリウム」

ラヴィエはそう言って俺の目の前にデバイスを持ってきた。

「そうか。エファンゲーリウム……意味は福音か。いい名前だな」

《D a n k e》(ありがとうございます)

名前を褒めると、ラヴィエの手の中でエファンゲーリウムが答えた。

ラヴィエも自分で名前を付けたせいかわ、デバイスを見る目にはどことなく大切なものを見るような眼差しをしていた。

どうやらお互いに良いパートナーになりそうだ

「さてつと……名前が決まったら、さっそく魔法の練習といくか?」

「……うん！」《ja》

俺の問いかけに一人と一機は、同意に応えた。

非常識

「さて、今から魔法の練習に入るわけだが……アイスをしまいなさい」
ラヴィエには調整の時に魔法に関しての知識は基本中の基本しか入っていない。

というよりもスキル関係や一般常識を学習させたため、それ以上は脳への負荷が大きすぎる危険があったのでできなかったのだ。

なので今からラヴィエに魔法に関して教えようとしていたのだが、ラヴィエは暢気にアイスを頬張っていた。

「……溶ける」

「……凍結」

ラヴィエがぼそりと反抗してきたため、俺はラヴィエの持っていたアイスのケースごと凍らせた。

「……」

「……」

街から帰って以降、ラヴィエの感情はかなりの速度で成長しているようだ。

「アイスは勉強の後だ」

「……はい」

ラヴィエは名残惜しそうにアイスを見ていたが、カチカチに凍ってしまっただけでもできないため、諦めて椅子へと座った。

「さてと、始めるか」

「……」（こくり）

俺はラヴィエの前にモニターを表示した。

そこにはラヴィエの基本的なデータが表示され、俺はそのデータを操作しながらラヴィエ相手に魔法を教えることにした。

「基本的にベルカやミッドの魔法はデバイスに任せている面が大きい。なので実際にラヴィエが学ぶことは、魔力の効率的な運用法だ。あとラヴィエの魔力なら飛行も可能だろうから、それも覚えてもらう」

画面を切り替えた。

そこには飛行魔法や防御、高機動魔法、収束に圧縮、儀式魔法や魔力付与などの情報が載っていた。

ラヴィエは興味深そうにデータの一つ一つに、首を縦に振ったり傾げたりしながら見ていた。

「……いっぱい」

ラヴィエが困ったようにこちらを見てきた。

どうやら数が多すぎて、何を覚えたらいいのかわからなくなったようだ。

「全部覚える必要はないよ。それに相性なんかもあるからな」

実際ラヴィエのデバイスは近接タイプなので、儀式魔法を覚えたところであまり使い道はない。

さらにラヴィエには短距離瞬間移動ショートジャンプなどのスキルも大量にあるため、ラヴィエがこれから学んでいくべきは魔法そのものではなく、魔法とスキルを併用した戦闘技術と言った方が正しい。

「あ、それと魔法だけじゃなく格闘技も覚えてもらうことになるぞ」

「……かくとうぎっ？」

ラヴィエは何だそれといった表情で首を傾げた。

「あく素手でやる戦い方かな？」

格闘技とはなにかと聞かれても、うまい回答が見つからずそう答えた。

「……パンチ？」

「そうそう……とはいえ誰に教わるかが問題だな」

俺も多少はできるが才能があるわけでもなく、かなりのアレンジが加わっているため、俺が教えるの却下するしかない。

ラヴィエは俺と一緒にいるところを見られていないので、一般人に紛れてそういった場所に入れるとういのも考えたが、能力の高さに気がつかれたら面倒なのでこれも却下するしかない。

「ふむ……」

現状ではいい手が思いつかないため、基礎だけは俺が教えることにした。

「まあいい。まずは魔法だ」

俺はそう言つてラヴィエの前のモニターのデータを変えた。

「そこにある魔法の術式を頭に入れたら実際にやってみるぞ」

「……」(こくん)

・

座学によるラヴィエへの魔法知識の学習は滞りなく進められた。

もことから余計な知識や変な思い込みがない分、苦手意識も存在しないラヴィエはそれこそ真綿が水を吸うかのような勢いで次々と知識を吸収していく。

「さて……そろそろ仮想空間での実技をやってみるか」

「……」(こくり)

《Jawohl》(了解)

俺はラヴィエを連れて訓練部屋へと移動した。

「ここだ」

トレーニングルーム

訓練部屋についた俺は早速準備を始めた。まずは自分用に接続デバイス进行调整し直し、仮想空間にアクセスできるようにエフアンゲリウムの接続も同時に行つた。

トレーニングルーム

この訓練部屋にもコレクションの一つが使用されているため、現在の仮想現実よりもより現実に近い状態での訓練ができる。ただ異常にエネルギーを消費してしまうので、本来はあまり使いたくはないため普段は封印されている。

「まあ先行投資だと思えば問題ないな」

最近の赤字のせいでかなり厳しいが、ラヴィエの能力を上げると考えればそう悪い投資ではない。

「よし……ラヴィエ。エフアンをここにセットしてこの椅子に座れ」

俺がそう言うと、ラヴィエは素直に従いエフアンゲリウムをセットし、椅子に座つた。

それを確認した俺も隣の自分専用に調整した椅子に深く腰掛け、仮想空間へとダイブを開始した。

「……………は？」

目を開けたラヴィエの前には一面に海が広がり、陸地が一切ない空と海だけの空間が広がっていた。

《Ist wie ein virtueler Raum》(ここは仮想空間内のようです)

ラヴィエの質問に、周囲の空間分析を開始していたエフアンが結果をつげる。

「……………蒼い」

《Ja》(そうですね)

「まあほかの物を作ると余計エネルギーを使うからな。今回はあくまで魔法になれることが目的だから、建造物は必要ないからな」

俺はラヴィエの言葉に、この仮想空間について説明した。

「……………羽？」

ラヴィエが俺の声にこちらを振り返り、俺の背中に生えている羽に目を向けた。

「ん？ これか？ これも俺のコレクションの一つだ。俺の魔力だと空戦は無理だからな」

そう説明して俺は自分の背中にある羽を指差した。

これは俺のコレクションの中でもかなりのお気に入りの中で、装着者の魔力を使うことなくリンカーコアと同じ原理で空気中から自動で魔力を吸収し、自動防御と高機動飛行を使用者に与えてくれる。

「……………べんり？」

「ああ、俺のお気に入りだ」

俺は収集家^{コレクター}として、ラヴィエに自慢するように見せびらかした。

「……………」

だがラヴィエの反応は薄かった。

「まあ、自力で飛べる奴にはあんまり関係ないか」

切なくなつた俺はそう言つてこの話を終えた。

気を取り直して魔法の実技を始めることにした。

「まずはデバイスを起動してバリアジャケットを装着してみろ」

「……セットアップ」

《Anfang》(起動)

ラヴィエの体が光に包まれた。

「ほう？ 魔力光に色が付いた。……【M】が原因か？」

初めてあった時に確認した時は魔力光に色がなかったラヴィエに、今は白色の魔力光が見えた。

光は太陽光などのように複数の色が混じると白色光になる。もしもそれと同じ原理なのならば、このラヴィエの魔力光は俺の兄妹たち全てが混じり合った色なのかもしれないと、柄にもなく感傷的な気分になってしまった。

「……できた」

《Ich kann jederzeit gehen》(いつでも行けます)

「そうか……なら早速やるか」

自然と笑みがこぼれそうになった俺は、その感情をごまかすようにそう言った。

「まずは魔力弾の生成からだな……こんな感じだ」

俺はまずラヴィエに手本を見せるため、手の平に青色の魔力弾を一つ生成した。

「……こう？」

それを見たラヴィエはあっさり手の平に魔力弾を作り出した。ただまだ加減がわからないせいか、その一つの魔力弾に込められた魔力がとんでもない量だった。

「バカー！ 少しでいいよ少しで！」

あまりの魔力量に俺は慌てて出力を下げるようにいった。

「……このくらい？」

「あく、まあさつきよりはましかな？ ただそんなに使ったら数が作れないだろ」

「……数？」

「そう、数だ。魔力弾なんて基本的には牽制に使うものだ。それ単体で敵を落とすなんてのは、管理局の白い悪魔とかその辺の化け物だけだよ」

俺はそう言い切った。

実際のところ魔力弾に大量の魔力を籠め、誘導弾で敵を撃墜するなんて非常識なことをする人間はいない。普通は自分の有利な間合いへと敵を誘導するために使うのが一般的だ。

「最低このくらいは作ってやる……の………が………」

管理局の白い悪魔の話进行い出しながら、魔力弾についての説明を進め目ていた俺はラヴィエに複数の魔力弾を生成するように教えようとした矢先に、目の前の光景に絶句した。

先ほどラヴィエが作って見せた魔力弾の数が、目の前に無数に浮かんでいたので。

《Hundred》(100個目です)

「……無理？」

《Dies ist die Grenze derzeit》(現状では限界です)

「………」

目の前の魔力弾の群れに俺は戦慄した。

数もそうだが一つ一つに込められた魔力量がかなりのもので、もしこれが俺に目がけて飛んできたら回避も防御もできる気がしない。

(これは予想以上だな)

まさかここまでの魔力があるとは予想だにできなかった。いや左目で確認したときの魔力量からでは、これだけの数を作るのは難しい。俺はもう一度左目でラヴィエを確認した。

「……は？」

とんでもない光景が映った。

魔力を消費した矢先にリンカーコアが、凄まじい勢いで魔力を増幅していた。

レアスキルには確かに増幅があつたが、まさかリンカーコアで直接魔力を増幅するように作用するとは夢にも思わなかった。

今のラヴィエはもはや一種の永久機関のように、体内の魔力が尽き
ない限りは外部から魔力を集める必要がない。

「……これでいいの?」

《Gut gemacht》(上出来です)

「あ、ああ。次は砲撃魔法をやってみるか」

魔力弾でこれなら砲撃はどうなってしまうのかと、少し恐ろしい
かったがやらないわけにはいかなかった。

「とはいえ、俺は砲撃はほとんど使えないからな。お手本はなしだ」

俺はそういうと氷での的を作り、離れた場所に設置した。

「とりあえずエファンに協力してもらって、あの的を撃ちぬいてみる」

「……」(こくり)

《Jawohl》(了解)

ラヴィエは的を見つめながら右手を前にかざした。

《schlen Form》(砲撃形態)

するとエファンの形が変わり始めた。

その形はまるで腕に弓を着けたかのような形態で、弓の先には魔力
が高密度に収束し始めた。

さらに魔力の性質が変化し、先ほどまでとちがいバチバチと放電が
始まった。

「……打ち砕け」

《Mjöl'nir》(雷鎚)

その瞬間激しい光と轟音によって、俺の視覚と聴覚は機能を果たさ
なくなった。

しばらくしてようやく目と耳が回復した。

「なんつーか……」

もはや何の言葉も出なかった。

視覚と聴覚が死んだ状態でも、左目は正常に機能していたので俺は
何が起きたのかをしっかりと把握している。

あのときラヴィエの魔力は電気変換を起こし、高密度に収束された
魔力はプラズマのような状態になっていた。そしてその魔力砲はラ
ヴィエが宣言した通り、すべてを打ち砕く威力を持っていた。

俺の作った氷の的など、砲撃が触れる前にその熱で一瞬で蒸発していた。もしこの砲撃が建造物のある場所で行われたのなら、いったいどれだけの被害があったか想像もつかない。

ここまでできたらもはや非殺傷設定など、あつてないようなものだ。

「これは俺の許可なく使用禁止だ」

「……わかった」

《Ja》(はい)

二人はどこか納得がいかなさそうではあったが、こんなものを管理局に見られては俺の危険度まで跳ね上げられてしまいそうなので、二人には納得してもらおうしかない。

「あとは細々とした調整で、威力を落とした魔法を覚えてもらおうしかないな」

「……」(こくり)

俺はラヴィエにはまず魔法よりも、格闘を優先して覚えさせようと心に誓った。

格闘訓練

あの後魔法に関しては近接魔法、防御魔法、捕縛魔法や結界魔法までいろいろと実践させていったが、結論はラヴィエに教えていると俺の自信がなくなるということが分かった。

「……おしまい？」

「いやまあ……これで一通りかな。あとは自分に合うように調整してからだな。今回でラヴィエの得意な魔法を特定しようと思っていたが、ラヴィエにはそういつた偏りはないようだから、気にする必要もない。あとは状況によって使い分けられるようになることだが、これはもう経験を積んでいくしかないからな」

今回でわかったのはラヴィエには下手に教えて、変な偏りを作るよりも今のオールマイティな状態を維持することの方がいいということが分かったただけだ。

本来ならスピードか防御かや、手数でいくか威力でいくかなどの方向も決めた方がいいのだが、ラヴィエはそういつた弱点になりそうなものは数多く所持しているレアスキルで大概はカバーできてしまうので、正直教えることがなさすぎる。

「とりあえずしばらくは、ここで仮想敵と戦うか格闘術を学ぶことが優先だ」

「……」（こくり）

俺がそう言うと、ラヴィエは頷いた。

「さて次の格闘術だ。まずはどの程度、自分の体力が続くかテストする」

「……」（こくり）

まずはラヴィエの体力を知るため、俺は持久走を行うことにした。とはいえこの近くには走り回れるような場所はないので、アジトのトレーニングルームにあるマラソンマシンでのテストになる。

「……一緒」

「俺も走るのか？　まあ、マシンは二台あるし構わないか」

珍しくラヴィエの方から提案してきたので、俺はラヴィエの隣の

マシンに乗る。

「まずは流す感じでだ。それじゃあスタート」

こうして俺とラヴィエは並んで走り始めた。

一時間が経過

「ラヴィエも余裕そうだな」

「……」(こくり)

俺は遺跡でぼ活動も考えて、それなりに体をきたえているため一時間程度を緩やかに走る程度では息は上がらない。

ラヴィエの方は、体はあの変態《スカリエツティ》が調整しただけあつて身体能力が高く、疲れた様子もない。

「それじゃあ速度を上げるぞ」

「……」(こくり)

五時間経過

「ふう」

流石に速度を徐々に上げながら五時間が経過すると汗が出てくる。

「……」

「大丈夫か？　今で大体時速20kmくらいだが……」

隣を見るとラヴィエは先ほどと変わらない表情で走っていた。

十時間経過

「ひゅーひゅー……」

あれからさらに速度を上げて行き、今では殆どが全力疾走と変わらない速度となっている。俺は既に体力の限界を超え、呼吸も怪しい音へと変わっていた。

「……」

そんな俺の方をラヴィエは不思議そうに見ている。
そして俺はようやくあることを思い出した。

【M】の中には身体能力を強化するタイプのレアスキルを始め、再生や体力高速回復などもあったことを。

そしてそれらの肉体関係のレアスキルの多くは常時発動型で、その結果ラヴィエの体力は文字通り底無しの状態となっている。

戦闘のように凄まじい集中力や激しい動きを必要とするならともかく、何も考えずに走っているだけではラヴィエの体力は減った瞬間には回復している。これではマラソンでの体力測定など無意味ではない。

「ぜえぜえ……」

「……大丈夫？」

顔を覗き込んでくるラヴィエの頭をポンポンと叩きながら、俺はスポーツドリンク手に取る。

「だ、大丈夫だ。うぐ、うつく」

一気にそれを飲み干して何とか一息ついた。

「……おしまい？」

「ああ、おしまいだ。ってか、意味がなかったな」

体力測定も魔法技能の確認も、正直に言っただけならラヴィエには必要なかったというのが結論だ。

「ふう、少し休憩したら出かけよう」

「……どこ？」

俺が出かけると言ったことで、先日街に出かけたことを思い出したのか。それとも街で買ったアイスを思い出したのか、若干嬉しそうな表情でラヴィエが俺の服の裾を握ってくる。

そんなラヴィエには申し訳ないが、今回俺達が行くところは決して楽しいところではない。というか、むしろ俺は行きたくない。

「残念だが街じゃない。今回出かける先は変態のところだ」

「……へんたい？」

「ああ、変態だ」

俺はそう言ってラヴィエの手を引き、スカリエツティのアジトへと

向かうことにした。

「おや？ これはこれは、珍しい客人だね。どうしたんだい？」
アジトに着くと、ウーノに案内されスカリエッツィの下まで俺たちは通された。

「別にお前に用があるわけじゃない。トーレはどこだ？」

だが、今回はスカリエッツィに用があつたわけではない。

今回俺が会いたい人物は彼ではなく、その娘の一人であるトーレだ。彼女は名前の通りナンバーズの三番目であり稼働している時間も長い。

さらに実戦での近接格闘に秀でている上に、ウーノ^{N₀,₁}やドウエ^{N₀,₂}と違い完全な戦闘タイプだ。

これほどラヴィエに格闘術を教えるのにうってつけの人物はいない。

「トーレかい？ 彼女ならノーヴェに訓練を付けているよ。ふむ、私に用事ではなくトーレに言うことは、その子の訓練かい？」

スカリエッツィがそう言つて俺の側に立つているラヴィエに視線を向ける。

「ああ、そうだ。それより、ノーヴェってのは？」

俺は初めて聞いた名前に首を傾げた。

「私たちの新しい妹です」

ウーノが空中にモニターを出現させると、そこには気の強そうな顔つきの少女の映像が映し出された。どうやらこの少女がノーヴェらしい。

「なるほど、ノーヴェ。9番目か」

どうやらまたこの変態が新しい戦闘機人を造つたようだ。

「まあ、訓練中なら丁度いいな。訓練室はどこだ？」

「ご案内します」

「ああ、頼む。ラヴィエ、行くぞ」

「……」（こくり）

ラヴィエはウーノの後ろをちよこちよこと追いかけて、俺も部屋を後にしようとした。

「ああ、そうだ。訓練が終わったら少しいいかな？　君に仕事を頼みたいんだ」

「……また面倒事か？」

嫌そうな顔でスカリエツテイの方に振り返ると、いつも通り胡散臭い薄ら笑いを浮かべたまま曖昧に頷いていた。

「わかった。後でな」

俺はそれだけ言ってラヴィエ達の後を追って訓練室へと向かった。

訓練室ではトーレが先ほどの映像の少女、ノーヴェと訓練を行っていた。

「やってるな」

「……」（こくり）

どうやら訓練に熱が入っているせいか、二人は俺達3人が訓練室に入ってきたことに気が付いていないようだ。

ノーヴェが果敢に攻勢に出ているが、その拳や蹴りはほとんどがトーレには届かず、仮に届いても綺麗に受け流されている。

このあたりはさすがに経験の差が出てしまっているようだ。

それでもノーヴェは攻める手を弛めない。

「なんていうか、えらく攻撃一辺倒だな。……本人の性格か？」

ノーヴェの攻撃は一打一打が速く重いようだが、俺から見ても防御に難があるのが分かる。俺の経験上、あの手のタイプは搦め手に弱い奴が多い。

その証拠にノーヴェが右ストレートを放つが正直すぎるその拳はあっさりとトーレに回避されてしまう。

「家族思いのいい子ですよ」

ウーノの言葉を聞きながら二人の訓練を眺める。

ノーヴェは右ストレートを回避したトーレに対し、左での拳打を放つがそれはトーレにいなされ体勢を崩してしまう。だが、それは予想

していたのかいなされて体勢を崩しながらも、勢いを殺すことなく身体を捻り、勢いのままトーレに向かって体重を乗せた蹴りを放つ。

「動きは良いんだけどな」

今の一連の流れは実にスムーズな動きではあったが、本人の視線や動きでこの流れは傍から見ている俺にも予想が着いた。当然、対峙しているトーレも分かりきっているためあつさりと防がれてしまう。

そこにトーレの一撃が入り、ノーヴェエが息を詰まらせる。

かなりいい一撃を貰ってしまったノーヴェエは床に膝を着き苦しうだ。

そのやり取りを見ていたウーノが手をパンパンと手を鳴らした。

そこでようやくトーレ達は俺達に気が付いたのか、訓練を止めた。

「ウーノ、それにイオリか」

「よう、トーレ」

俺は軽くトーレに挨拶をする。

トーレとは顔見知りであるため、俺がここにいることに特に疑問も内容で向こうも挨拶を返してくる。だが、この場で俺と初対面の人物であるノーヴェエは警戒しているようだ

「……誰だ」

「初めましてだな。俺はイオリ、何ていったらいいのかな？ スカリエツティの外部協力者みたいなものだ。んで、こっちはトーレも初めてだろ？ こっちはラヴィエ、俺にとって末の妹みたいなものだ」

俺はノーヴェエに軽く手を上げて自己紹介をし、ラヴィエのことを前に出した。

「……ラヴィエ、この子はエファンゲリウム」

ラヴィエはそう言って自分のデバイスを手のひらに乗っけながら自己紹介をする。

「ああ、私はトーレだ」

ラヴィエの挨拶に口元を緩めながら、トーレはしゃがんでラヴィエの視線と高さを合わせて挨拶をする。こういったところをみると、本当に面倒見のいいお姉さんといった感じだ。

それに対してノーヴェエの方は未だに警戒しているのか鋭い眼つき

のままだ。

「ノーヴェ、ご挨拶を」

そんなノーヴェに対してウーノが自己紹介するように促す。

「あたしはノーヴェだ」

それだけ言っただけで踵を返すと訓練室の奥へと消えていった。

「えらく不機嫌そうだな」

「ああ、気にするな。少し前にチンクが重傷を負ったせいで、機嫌が悪
いんだ。ノーヴェはチンクに特に懐いていたからな」

「ああ、そう言えばそう言ってたな」

前回きたときにスカリエツティが言っていたことを思い出した。

「それで？ イオリがここに来るのは珍しい……いや、初めてだな」

「ああ、ちよつとトーレに頼みがあつてな。このラヴィエなんだが、近
接格闘術を教えて欲しんだ。知識とかなら俺でも可能なんだが、俺が
教えると搦め手ばつかで正攻法が身に着かない」

ラヴィエの頭をポンポンと撫でながらトーレに頼み込む。

「別にかまわないが、私とて正道とは言い難いぞ？」

「トーレのは正道ではないかもしれないが、実戦的だからな。むしろ
その方がいい」

それに俺が教えるよりは遥かにマシだ。

「わかった」

「サンキュー、ほらラヴィエも」

「……ありがとうございます？」

ラヴィエにもお礼を言わせたのだが、なぜだか疑問形だ。

「なら始めよう。好きに打ってこい」

「……」(こくり)

二人は訓練室の中央へと移動し、正面から対峙する。

そして、次の瞬間ラヴィエが動いた。

正面のトーレに対して右ストレートを放つ。トーレはそれを危な
げなく回避するが、ラヴィエが続けざまに左での拳打を放つ。

それをトーレはいなし、ラヴィエの体勢を崩しにかかる。

そこまでの動きで俺たちはラヴィエが何をしようとしているのか

悟った。

「ん？」

「ほう」

崩された体勢の勢いを殺さず、ラヴィエは体重を乗せた蹴りをトーレに向けて放つ。先ほどのノーヴェと全く同じ動きだ。

俺とトーレはそのラヴィエの動きを見て驚いた。

いくら身体能力が高いとはいえ、まさか初見でノーヴェと同じ動きができるとは思わなかった。それに、同じ動きではあっても、速さがノーヴェよりも速い。

トーレは先ほどノーヴェにやったように一撃入れることはせず、その一撃を回避することしかできなかった。

「驚いたな。先ほどの私達の訓練を見て覚えたのか？」

「……ん」（こくり）

ラヴィエが小さく頷いて肯定する。

「すごいな、身内を鼻負するわけではないが、ノーヴェは十分才能がある。そのノーヴェの動きを見て真似るとは……」

トーレが感心していると、ラヴィエはどこか誇らしげに胸を張る。

そしてその勢いのままトーレに向かって再び攻撃を開始した。

「ん！……ん！」

初めはノーヴェを真似てなのか力を主体にする攻撃を繰り出す。

しっかりと地に足を付け、全身の力を拳に乗せての一撃だ。

「良い拳だ。だが、軽い」

一撃一撃をしっかりと打ち込むも、ラヴィエの身体そのものが軽いためなかなかトーレに攻撃が通らない。そして自分にこのスタイルが合っていないと判断したのか、次は速さと手数を主体にし始めた。

「ん！ ん！ ん！」

拳で蹴りでトーレの周囲を素早く動きながら、常にトーレの死角へ死角へと小さな身体を動かしての攻撃だ。だがトーレとて速さを主体とした攻撃を得意としている。

まだ無駄の多いラヴィエの動きに対して、極限まで無駄を排した最短距離の動きで常にラヴィエの攻撃を視界に捉えて防ぎきる。

「少しこちらかも攻撃するぞ？　しつかり対応しろ」

しばらくはラヴィエに好きにさせていたトーレが動き出した。

「ふっー」

ラヴィエが再び死角に潜り込もうとした瞬間、先ほどまで見せていた以上の速さでラヴィエの動こうとしている方へと身体を向け、ラヴィエへと牽制の一撃を送る。

「っんー」

突然の攻撃にラヴィエはやや反応が遅れたが、それを紙一重で躲した。

「甘い。この距離で先制させたのなら、体勢を崩す前に離脱しろ」

トーレはそう言っただけでラヴィエにさらに攻撃を繰り返す。

一度目の攻撃は紙一重で躲したものの、そこから僅かに体勢を崩してしまっただけでラヴィエは、その一撃を躲すためにさらに体勢を崩した。

そこからはもはや一方的となる。

体勢を崩したところにさらに一撃、それを躲してもさらに体勢を崩してしまおうという悪循環に陥る。何とか離脱を試みたラヴィエだが、その瞬間にさらに鋭い一撃が訪れ、余計に不利な状況へと陥るだけとなった。

そしてそこから丁度十手目、完全に回避できなくなったラヴィエの眼前にトーレの拳が寸止めされた。

「ここまでだな」

「……………」

尻もちをついたラヴィエにトーレが手を差し伸べ、その手をラヴィエが握った。

その光景を俺はただ茫然と見ていることしかできなかった。

「驚いたぞ、イオリ。ラヴィエだったか？　凄まじい才能だな。いや、才能の一言で片づけていいのか？」

「いや、俺も驚いた。こいつの素体自体はスカリエツィに貫つたものだから、データでしかスペックは知らなかったけど、ここまでとは。そういうえば昔の技術で、記憶や知識ごとクローンを造るってのがあったらしいけど……………関係あるのか？」

その変態がどういった方法でクローンを造ったのか知らないが、あの変態ならできそうな気がする。それならラヴィエに聖王オリヴィエの記憶や知識、あるいは技術が受け継がれていても不思議ではない。というか、そうでも考えないとこの近接戦闘の能力の説明が付かない。

「……まあ、関係ないか」

とはいえ、その辺のことを聞こうにも背後にいるウーノから僅かに危険な空気が発せられているのを察した俺は、深く追求することはしなかった。

「まあ、これからもラヴィエの訓練を頼むよ」

「ああ、構わない。ノーヴェにもいい刺激になるだろう」

俺はそう言っただけでトーレにラヴィエの訓練を頼んだ。

悪巧み

「スカリエツティ、来たぞ」

俺はラヴィエとトーレの訓練が終わってから、ウーノにラヴィエをシャワールームに連れて行くように頼み、そのままスカリエツティの下へとやってきた。

例の頼みごとを聞くためだ。

「おや、早かったじゃないか」

「いいから要件を言え、要件を」

あんまりスカリエツティと話していてもいいことがない。なるべく早めに切り上げるために、とつとと本題に入ることにした。

「せっかちなだね。まあいい、それでは本題に入ろうか。要件と言うのは依頼だよ」

スカリエツティの方も特にそれで異論がないようで、すぐに本題を切り出してきた。

「だろうな。で？ 何を探しているんだ？」

前回みたいにおそらくは聖王ゆかりの古代遺物《ロストログア》だろう。俺はそう当たりを付けていたが、スカリエツティの口から出た言葉は全くの予想外のものだった。

「いや、別段探し物はしていないよ。ああ、レリックは別だ。あれはまだ集めている。ただ今回私が頼みたいのは、何かを探してほしいのではなく、ここを探索してほしいんだよ」

そう言つて一つのデータを表示した。

そのデータを見て俺は表情を歪めてスカリエツティを見返した。

「おいおい、ここは管理局の管轄じゃねえか。俺は基本的に管理外界がメインなんだが……」

嫌な予感しかしないが、一応最後まで話しを聞いてみることにした。

「ああ、そうだね。こんなところを探索したら、管理局が飛んでくる」

スカリエツティが楽しそうな笑みを浮かべながらそう言ってくる。そこで俺は、スカリエツティが俺に何を依頼したいのかを悟った。

「おいおい、俺に囮をやれってか？ 勘弁しろよ」

「そんなに長くなくていいんだよ。ただ最近、私の周りが騒がしくてね。少しの間、他に目を移したいのさ。もうすぐお祭りを開くために、少し集中して作業をしたいのでね」

スカリエツティの言う祭りが何なのかはわからないが、どうやらこいつは何か大掛かりなことをしでかそうとしているようだ。

今まで水面下でしか活動してこないこいつが何をやらかすのか非常に気になるところだが、ここで問い詰めたところで素直に白状するわけがない。アジトに帰ってからここ数年の物資や資金の流れ、後は管理局の動きを一度調べてみる必要があるそうだ。

最悪の場合、こちらに余波が来ることも想定しておかないと拙いかもしれない。

「……その依頼を俺が受けると思っているのか？」

「いいや。面倒事を嫌う君が、こんな依頼を受けるとは思っていないよ。……通常の時ならね」

ニヤリと胡散臭い笑みを浮かべて意味深なことを言う。

「通常なら、か。まるで今は通常ではないと言いたげだな？」

スカリエツティは研究が命と言ってもいいマッドサイエンティストではあるが、取引で嘘をつくことはない。

嘘は言わないだけで本当のこととも言わずに相手を貶めることはあるが――。

「ああ、そうとも。君は機動六課という部隊を聞いたことはあるかい？」

「ああ、あの化け物部隊な」

俺はスカリエツティの言う、古代遺物管理部機動六課のメンツを思い描いた。

管理局のエース・オブ・エースである高町なのはと、執務官フェイト・T・ハラオウンを分隊長に据え、さらに歩く遺失物ロストログニアこと八神はやてが部隊長を務めるトンデモ部隊だ。

その3人だけでも十分に過剰戦力と言えるのに、そこに八神はやての下にいる守護騎士プログラムまで存在している。

いったい何が目的であんな部隊を作ったのか理解に苦しむところだ。正直に言つて、あの部隊のせいでミッドチルダ近辺の世界には足を踏み入れずらくなっているのが、俺のような犯罪者たちの心境だ。特に古代遺物管理部という部署名の通り、俺のような古代遺物^{ロストロギア}を狙う盗掘者にとつては鬼門中の鬼門だ。

おそらく今、俺が何らかの痕跡を残せば真つ先に飛んでくる部隊だろう。だからこそ、今はおとなしくしていたのだが、スカリエツティが話しを進めていく。

「あの部隊はね、これから起こるであろうちよつとした事件に備えてのものなのさ。だから、種を開かせばあまりミッドチルダからは動けない。いや、動かせないと言った方が正しいかな。だから、今ならこの世界に君のような盗掘者が入っても、動くのはせいぜいこの新人たちと言つたところさ」

そう言つてスカリエツティが個人データを俺に渡してきた。

ティアナ・ランスター

スバル・ナカジマ

エリオ・モンディアル

キャロ・ル・ルシエ

それぞれの名前と魔導師ランク、それと保有技能、さらに個人が抱える問題点などが掲載されているデータだ。

完全に管理局から流出してきたデータだな、これは。

「……確かにこの程度ならどうとでもなるな」

データを見て思ったことを正直に口にする。

年齢に比べれば優秀ではあるが、それはあくまで秀才の域に留まる。おまけに経験も浅いとくれば、いざ対峙したところでどうとでもなる。

「だが、この新人だけで行動するとは思えないな。守護騎士プログラム、あるいは分隊長の誰かは付き添いで来るんじゃないのか？」

「まあ、そうだろうね」

「それじゃアリスクが高すぎる。正直、あの辺の化け物連中とは会わないのが一番だ」

この間は仕方なく戦闘したが、俺のスタイルは基本的に相手の虚を突いて逃走に全力を費やす、というものだ。それだったら初めから出会わないというのが最も賢い自衛策といえる。

「君の【M】なら対抗できるんじゃないかい？」

「ラヴィエか？ 無理だな。能力だけなら確かに対抗できるが、こちらは生まれたてで、あちらは歴戦の猛者だ。一人くらいなら俺とラヴィエでどうにかなるが、それをやると向こうも本格的に動いてくる」

俺が今まで管理局側からあまり注目されなかつた理由は裏で繋がっていたこと意外にも、俺個人の有する能力があまり高くなく脅威度が低いと考えられていたことも理由の一つだ。

——本当は管理局も把握していない古代遺失物ロストロギアなども加味すれば、自分で言うのもなんだがかなりの脅威度に跳ね上がるが、相手が勝手に勘違いしているのを正す理由にはならない。

だが、ここでラヴィエなどと言う仲間がいることが知れてしまえば、その状況が一変する。ただでさえ裏で繋がっていた管理局の幹部が捕まってしまう、俺への注目度が高まりつつある今の状況では勘弁してほしい。

「私としてはそのほうが助かるのだがね」

「……何でお前のために俺が苦労しなきゃいけないんだよ？」

やれやれと言いたげに肩を竦めるスカリエッティ。

おい、それは俺の心情だ。

「では、こちらからも戦力を出すならどうだい？」

そう言つて新たなデータを俺に送ってくる。

「なんだ？ この不細工なメカは？」

そこには卵のような形をしたよくわからないメカの画像と、性能についてが詳細に記されてあった。

「管理局はガジェット・ドローンと呼んでいるそうだよ」

「ふくん。お前がこういうの造るなんて珍しいな」

スカリエッティは認めたくはないが天才だ。大概の物なら時間と資金があれば造り出すことができるが、その専攻はあくまで生体を主

軸としたものだ。

だから、造れるとは言ってもこういった完全に機械のみで構成された兵器を造るのは非常に珍しいと言える。

「まあ、玩具のような物さ。単純に人手が足りなくてね、無いよりはましさ」

「玩具ね。AMFを装備した玩具なんて、管理局側からしたら迷惑この上ないだろうな」

魔力の結合を解除するAMFの影響範囲内では、通常の魔法は非常に使いづらい。

特に魔法による砲撃や射撃を主体とするミッドチルダ式は非常に相性が悪い。確かにこれならばかなりの実力者でも、破壊するのには時間がかかる。

……囧としてはもってこいだ。

俺は頭の中でこのガジェット・ドローンを運用して、機動六課と遭遇した場合を計算する。

部隊長である八神はやては、前線にでることはない。これは絶対と言える。

なぜなら彼女はかつて起きた大きな事件の重要参考だ。おそらく今でも動くとなれば、あちこちから非難の声があがるか、あるいは幾重にもセーフティが掛けられているはずだ。事前に申請しているのならともかく、突発的な遭遇戦ではまず会うことはない。

次に高町なのはだ。

彼女こそ、今回俺が動いた場合に最も遭遇する可能性が高い。

資料によるとこの新人たちの教導官をしているようなので、おそらく現場にも同行しているはずだ。

そしてこの所、何故か縁のあるフェイト・T・ハラオウン。

彼女が高町なのは次に可能性が高い。

彼女も分隊長となっていることから同行している可能性はあるが、どうやら執務官として目の前のスカリエッティの調査も並行しているらしく、高町なのはよりは可能性が低い。

他にもこの間であった守護騎士プログラム、八神シグナムと八神

ヴィータがいる。

おそらく同行しても精々が一人、あるいは二人だと考えればこのガジェット・ドローンを十体ほどけしかけて足止めすれば、逃げる時間は稼げるだろう。

「……」

「決まったかい？」

俺の考えがまとまったのを察したのか、スカリエツティがそう問いかけてくる。

「……ちなみにこのガジェット・ドローン、何体用意できる？」

「ふむ……現在レリックの回収も命じてあるから、すぐに用意できるのは15体といったところかな」

それを聞いて俺の考えはまとまった。

「なら全部よこせ。それと、俺が動くときはそつちも何か動きを起こせよ。そうすれば俺のリスクも減る」

「それなら丁度いい。今度レリックの輸送列車を襲撃する予定だ。それと同時にことを起こそうじゃないか」

「それはどこだ？」

腹を括った俺はさつそく計画を立てることにした。

「ここさ。日程はこの日、この時間。そしてこの列車だ。これをガジェット・ドローンで襲撃する予定さ」

「……ナンバーズは出ないのか？」

「彼女たちのお披露目はもう少し先さ。この襲撃は新型のガジェット・ドローンのテストも兼ねているのさ」

おそらくは失敗してもいいのだろう。

新型のガジェット・ドローンとやらのデータを見せてもらったが、どう見ても機動六課相手には戦力不足だ。レリックが目的とは言っているが、本当は大して重要視はしていないのだろう。

「わかった。なら俺はこの世界から離れたここに行く」

そういつては俺はとある世界を表示した。

「おや？ 意外だね。君はもつと人の少ないところに行くと思っていたよ。ここにある遺跡は聖王教会直轄管理の遺跡だ。おそらくそれ

なりの妨害があると思うのだが……」

俺が選んだ世界が予想外だったのか、珍しくスカリエツティが驚いた表情になる。

「まあな。おそろくこの世界に行けば、いやでも機動六課の分隊長か副隊長が飛んでくるだろうな。ただ、それでも来ても一人か、二人だろう。それならラヴィエの実戦テストにはちようどいい」

そこは本来が狙うような場所ではないが、ドローンという足止めがあることを考えれば不可能ではない。それに文献にはよればあそこには、古代ベルカの聖王ゆかりの古代遺物ロストロギアが眠っているとある。

今まではリスクが高すぎて狙えなかったが、手段がある今ならコレクターとして狙わない手はない。

「まあ、私としては都合がいい。よろしく頼むよ」

「契約成立だ。俺はこれから準備するから、情報があつたら何でもいいから俺にも回せよ」

俺はそう言つてスカリエツティと契約した。

予定日までは時間もない。

俺はさつそく準備を整えることにした。

接敵

あれから数日、俺は今日のために準備を怠ることはなかった。まずはラヴィエの訓練。

実戦を経験するということもあり、トーレとラヴィエに事情を説明しより格闘訓練に力を入れるように言っておいた。

そして少しでも実戦でのリスクを下げるため、仮想装置を使つての俺やトーレとの戦闘訓練だ。

俺が搦め手を主体にしての対処法を教え、トーレが正攻法での正面からのぶつかり合いを教えた。途中から何故か訓練にノーヴェが混じり、俺&ラヴィエVSトーレ&ノーヴェの2対2のチーム戦も行ったが、これにより俺とラヴィエも連携を訓練することができたのは僥倖だ。

それとは別に俺は襲撃を掛ける場所の地理を入念に調べ上げ、スカリエッティからもたらされる情報から聖王教会と管理局からどれだけの人員が駆けつけるのかをウーノやクアットロにも手伝つてもらい考察した。

結論から言えば、おそらく今回の襲撃で駆けつけるのは管理局では守護騎士プログラムかフェイト・T・ハラオウンの可能性が高くなった。

ただフェイト・T・ハラオウンに関しては執務官として各地を調査しているため、その時の状況によつては距離的に来ない可能性も高くなる。そうなると最も警戒すべきは守護騎士プログラム、八神シグナムと八神ヴィータだ。

それと聖王協会に關しては何とも言えないという結論に至った。

あそこはいろいろなところに強い影響力を持つてはいるが、組織の規模が大きすぎるために正直今回のような一遺跡の襲撃に動くかと言われれば首を傾げるしかない。ただ機動六課の設立にカリム・グラシアが関与しているとのことなので、その近辺が個人的に動くことは考えられる。

——そんなことをああだこうだと考えている間に、あつと言う間に計画遂行の日になってしまった。

「はあ、やっぱり面倒になってきたな」

俺はため息を吐きながらガツクリと頭を垂れた。

あれこれ考えて準備をしてきたは良いが、それでもやはり機動六課の化け物が出てくる可能性を考えると気が進まない。

それに今回は戦闘ありきで作戦を考えているため、いつも以上にコレクションの古代遺物ロストロギアを所持しているため、魔力の消費が大きく疲れる。

「……頑張る」

ただそんな俺とは対照的に、今回の件を初めてのお仕事だと教えられたラヴィエは、妙にやる気に満ちている。無表情は相変わらずであるが、言葉と共に両手を胸の前で握り拳にしていることから、そのやる気が伺える。

「そうだな、ここまできてウダウダ言ってもしょうがないな。頑張るか」

ラヴィエがやる気を示しているのに俺がいつまでもダレているわけにもいかない。

俺は気を引き締めた。

「さて、っと……聞こえてるか？ スカリエツティ」

やると決めた俺はさっそくスカリエツティへと通信を入れる。

『聞こえているよ』

返事はすぐに返ってきた。

「こっちは準備完了だ。そっちはどうだ？」

『こちら問題ないよ』

「なら同時に襲撃を掛けて派手に行く。こっちはこっちで勝手にやるから、お前も好きに動け」

『ああ、もとよりそのつもりさ。それでは頑張ってくれたまえ』

スカリエツティとの通信を終えた俺は、ラヴィエと今後の動きと万が一はぐれた場合の集合場所を確認した。

「いいか？ 無理はするなよ。それと、俺はこれから遺跡の最下層に最短で突っ込む。ラヴィエは適当に外の連中と遊んでろ。ただし昨日見せた人物の誰かが来たらすぐに教えろよ」

「……」（こくり）

ラヴィエが頷いたのを確認した俺は、ラヴィエの頭をポンポンと撫でながら目標の遺跡に視線を向けた。

「なら——行くぞ」

と、気合を入れて来てはみたものの、遺跡の最深部までは驚くほどスムーズに到達した。おまけに最深部の宝物庫には未だに手つかずの古代遺物お宝がたんまりと残っているという、少し信じられない状況だ。

「……いや違うな」

だが俺はそこで強い違和感を覚えた。

この手の遺跡でこんなにお宝が残っているわけがない。例えこの遺跡の管理が聖王教会であったとしても、完全に手つかずと言うのはあり得ない。ならば考えられる可能性は、手つかずなのではなく手が付けられないということだ。

「っ！ あぶね!?!」

左目の古代遺物ロストロギアが警告を発した瞬間、俺は危険予測線から全力で飛び退いた。

次の瞬間、先ほどまで俺の頭があつた場所を何か鋭い物が通り過ぎるのがうつすらと見えた。俺は左目の古代遺物をフル稼働され、たつた今通り過ぎた存在を確認する。

「あ?」

そこにはスカリエツティから買い受けたガジェット・ドローンとは違うガジェット・ドローンがこちらに武器を向けていた。

「なんだこいつ？ ガジェット？ いや、でも違うな。良く視ると古いうえに、スカリエッツィの造ったやつより高出力だ。おまけにさっきのはステルスか？ 俺の左目のフル稼働でようやく見えるってことは、かなりの高性能だな」

内部を透視してみると古代ベルカに造られた兵器に良くみられる形式のパーツが視えた。

おそらくは古代ベルカの時代に造られ、この遺跡を守るガーディアンとして配置されたのだろう。それなら先ほどの高性能なステルス機能にも納得がいく。

「スカリエッツィのヤツ……知ってたな」

俺は目の前のガジェット・ドローン？を見ながら変態科学者の顔を思い浮かべた。

「あいつのガジェット・ドローンに似ている……いや、逆か。あいつの造ったのがこれに似てるのか」

おそらくスカリエッツィのヤツが聖王ゆかりの遺跡を調査しているときに同じものを見つけ、それを参考にこのガジェット・ドローンを造ったのだろう。なら聖王ゆかりのこの遺跡にこのガーディアンがいることくらい予想は付いているはずだ。

「……後で文句言つてやる」

おそらく本人は悪戯くらい感覚で情報を隠したのだろうが、危うく首と胴体がお別れをするところだったのだ。

……文句くらい言わないとやってられない。

「それにしても、いままでも聖王ゆかりの遺跡は結構見たことあるけど……こいつは初めて見たな。配置されている場所とされてない場所があるのか？ まあ、いい。今は仕事優先だ。破壊させてもらおうぞ」

俺が魔法を使おうとすると、目の前の敵は強力なAMFを発生させてきた。とはいえ、俺のスキルはAMFの影響を大して受けられないため、問題なく目の前の敵を破壊可能な大きさの氷柱を造ることができた。

「潰れろ」

生み出した氷柱は目の前の敵に深々と突き刺さり、あつけなく敵は沈黙してしまった。

「……え〜」

あまりにも呆気なく片が付いたため肩透かしを食らっていると、遺跡の奥から何かが大量に動いてくる気配を捉えた。

そちらを覗き見てみると、先ほどと同じ機体がゾロゾロとやってきたのが見えた。

「まあ、あの程度ならこの遺跡なんかすぐ荒らされるよな」

この遺跡が手つかずの理由が何なのか、俺は今現在身を持ってそれを知ることになってしまった。

強力なAMFを常時発動させ、ほとんど音を立てずに動き、高性能なステルス機能を持つ機体が大量発生する。

これでは魔法を主体とする魔導師では確かにどうにもならない。

遺跡に入ったが最後、大量の敵に囲まれ魔法も碌に使えずに排除されてしまうだろう。

「……仕方ない。響け《鎮魂の鐘》」

どれだけいるのか分からない敵をいちいち全部相手にしては魔力などすぐに底を突いてしまう。それはこれから起こる予定の戦闘に響いてしまうため、俺はコレクションの一つである古代遺物を取り出し、その鐘を鳴らした。

カラーンカラーンカラーン

遺跡の内部に澄んだ鐘の音が響き渡る。するとある変化が起きた。

普段は問題なく見えている俺の左目の義眼は何も移さなくなり、それと同時に遺跡内部の魔力などのエネルギーで動いていた仕掛けが全て停止した。

当然こちらに迫ってきていた敵の動きも停止している。

今俺が鳴らした鐘は《鎮魂の鐘》と呼ばれる古代遺物^{ロストロギア}で、あらゆるエネルギーを鎮静化させる効果を持つ。

効果範囲が音の響く範囲なので、こういった音が響く場所ではかなり強力な古代遺物だ。

「とはいえ、これ使うと俺の装備も動かなくなるから困るな。さって、

効果が続いているうちにお宝を盗掘ちようたいするか」

持続時間があまり長くないのが難点だが、贅沢も言ってもらえない。俺はさっそく盗掘を始めた。

「ん〜？ レリックがやけに多いな。まあ、スカリエツテイが買うからいいか。お、これは見たことないな。後で解析しとくか。あと、これと、こつちも……なんだろこれ？ あ、これもついでに……」

しばらく俺は盗掘に専念した。

さすがに聖王教会が直接管理している聖王ゆかりの遺跡といったところか、古代ベルカ時代の貴重な古代遺物がザクザクと出てきた。めぼしい物を盗れるだけ盗ったころ、ちょうど《鎮魂の鐘》の効果が切れた。

「やべ、動き出した」

もはや目ぼしい物は盗れるだけ盗った俺は、長居は無用と遺跡から急いで出た。だが俺は古代遺物を回収するのに夢中で、一つ重要なことを失念していた。

《鎮魂の鐘》はあらゆるエネルギーを鎮静化させる。それはつまり、通信に使用されるエネルギーも鎮静化しているということだ。

「……」

ラヴィエは変化した自分の身体を眺めながら、慣らすように身体を動かしていた。

イオリと共にこの遺跡に来ると決まったあの日、ラヴィエはイオリからある古代遺物を渡されていた。それは現在、彼女の顔を覆い隠すように着けられた仮面だ。

「……ん」

名前が何だったのかラヴィエは忘れてしまったが、効果の方は覚えている。使用者の肉体を設定した条件に一番適した状態に変化させるという物だ。

今回この仮面に設定した条件は戦闘。そしてその条件に設定した

仮面を被ると、彼女の肉体は急激な成長を遂げ、普段のお子様体型から18歳ほどの成長した女性の肉体に変化したのだ。

最初は戸惑ったがラヴィエだが、仮面の効果なのか少し動いただけでしっくりときた。それからしばらくは仮面を着用したままでトレヤノーヴェと訓練をした。

「……んん」

さすがは古代遺物ロストロギアといったところか、戦闘に最も適した状態というだけあったここ数日の訓練でラヴィエの格闘能力は凄まじい成長を遂げることとなった。

今の彼女はその力を存分に振りたいという、初めての衝動というものを感じ、どこことなく落ち着かない雰囲気だ。だからこうして早く敵が来ればいいと思い、イオリの帰りを待ちながら遺跡の前に陣取っている。

「……来た」

そうしていると、遠くから高速でこちらに向かって飛翔してくる団体を察知した。

大きな魔力が3に、そこそこの魔力が12。

ようやく待ちに待った来客がやってきた。

「……イオリ、お客様。……イオリ？」

ラヴィエはイオリの言いつけ通り、敵が来たことを通信で伝えようとした。だが、そのころ丁度《鎮魂の鐘》を使用していたイオリとは通信が繋がることがなかった。

「……ん」

どうしようかとラヴィエは首を傾げた。

おそらく遺跡の内部で何かあったのだろうということはわかるが、それが何なのかは遺跡探索などしたこともない彼女には想像すらつかない。

「……………戦う」

しばらく悩んだ彼女の出した答えは、当初の予定と同じ敵との戦闘だった。

イオリのことを迎えに行こうかとも考えたラヴィエだが、彼の逃げ

足や回避能力はよく知っているため特に問題はないだろうと判断した。

トーレやノーヴェとの模擬戦を行えば彼女たちに攻撃を当てるとも、勝つことも可能なラヴィエだが、どういう訳かいまだにイオリと模擬戦をすると彼に勝つことができないのだ。というか、攻撃が当たらないのだ。

そんなイオリのことだ。遺跡で怪我を負うことなどないだろうとラヴィエは信じている。

むしろ、彼が常々口に出している化け物との戦闘を自分が引き受けた方が、彼のためになると判断した。

「……エフアングーリウム」

《J a w o h l》(はい)

ラヴィエが自らの愛機に語りかける。

「セットアップ」

《A n f a n g》(起動)

その言葉と同時にラヴィエの両腕は光に包まれ、そしてその腕には鉄腕が装着された。

ヴァイスシュトルツ

「……白の誇り」

ラヴィエは自らの両腕の鉄腕を確認すると、次に《白の誇り》を発動しその身に純白の防護服を身に纏った。

《V o l l e n d u n g》(完了です)

「……ん、いつでも行ける」

ガキン

気合十分と自らの愛機に訴えかけるように拳をぶつけて鳴らしたラヴィエは、魔力の近づいてくる方角を見つめた。

ラヴィエが気合十分になった少し前、機動六課の作戦司令室にアラートが鳴り響く。

「グリフィス君、どないしたん!」

はやては指令室に入るとすぐに自分の席へと向かい状況の報告を促した。

「八神部隊長、襲撃です！ それも同時に2か所です。シャーリー、映像を」

「わかってる！ 今出します」

グリフィスの言葉を聞く前から作業を開始していたシャーリーは、すぐに映像を表示した。

そこにはガジェット・ドローンによって襲撃されている輸送列車とある遺跡が映し出された。

「列車はレリックを輸送していたものです。もう一つ、遺跡の方は聖王教会が管理している遺跡です」

「狙いはどっちも古代遺物ロストロギアやな。……それにしてもかなり離れとるな」

はやては苦い顔で二つの世界の距離を見つめた。

自分たちのいる場所からどちらかには行けるが、二つの世界同士では移動できないという何とも微妙な距離だ。これが偶然ではなく計画的に起こされた犯行であることは言うまでもない。

（つまりは輸送列車の情報が漏れとるということやな。この間で内通しとるんは逮捕したのに、まだおるんか）

はやて自身もこの間摘発したのはほんの一部だということはわかってはいたが、こうも早く内通者が再び行動を起こすとは思ってもなかった。少なくとも、しばらくはおとなしくしていると考えていたのだ。だが実際は、舌の根も乾かぬうちに内通者は動き出している。

（私が考えとるよりも、もっと上の方におるんやな）

今回の件でそのことを痛いほど思い知らされた。

「はやてちゃん……」

そんなはやての様子を見て、ラインフォースIIは心配そうに自らの主を見つめる。その視線に気が付いたのか、はやてはラインフォースIIを安心させるように笑って見せた。

「大丈夫やよ、ライン。……よし！ グリフィス君、なのは隊長とフェイト隊長に連絡を！ それとシグナムとヴィータにも連絡や。すぐ

にブリーフィング開始や」

気合を入れ直したはやてはグリフィスにそう指示を飛ばす。

「はい、八神部隊長」

そしてグリフィスは指示通りなのはとフェイトの二人に連絡を取った。

なのはの方は訓練を切り上げてすぐに全員を連れて作戦司令室へとやって来た。だがフェイトの方は運悪く、現在外へと出ているためこちらに来るのは無理だった。

「はやて隊長、高町なのは、並びにスターズ分隊、ライトニング分隊集合しました」

「現在2か所がドローンによって襲撃されとる。レリックの輸送列車の方がドローンの数が多いうえに、飛行方もおる。なのは隊長とフェイト隊長にはスターズとライトニングの全員を連れて、そっちに回ってもらおうことになるわ」

「了解しました」

はやての指示になのはは敬礼で答えた。

「それとや、フェイト隊長は外におるから現地で合流や。無理だけはせんといてな」

「うん、大丈夫だよ」

なのはの性格上、しつかりと釘をさすのを忘れないはやて。そのことをなのは自身も分かっているのか、困ったような照れくさい様な表情でそう答えた。

「八神部隊長。シグナム副隊長とヴィータ副隊長と通信が繋がりました」

「了解や！ シグナム、ヴィータ、聞こえとるか？」

『こちらシグナム。八神部隊長、問題ありません』

『こちらヴィータ。こっちも問題ない』

通信の向こうから聞きなれた二人の守護騎士の声が聞こえる。

「状況はデータで送った通りや。二人には遺跡の方に行ってもらおうことになる。ドローンの数は少ないようやけど、油断しい——」

「な！ なにこれ!?!」

そのときシャーリーの驚愕の声が指令室に響いた。

「シャーリー？ どうしたんだ？」

グリフィスがただ事ではないと察し、シャーリーに声を掛ける。

「こ、これを見てくださいー！」

そう言つてシャーリーはデータを表示した。

そこには全員が驚愕する情報があった。

推定魔力測定不能。

シャーリーが遺跡周辺のデータをスキャンしていたところ、遺跡の入口付近にそう表示される存在がいることが分かった。

機動六課で最も膨大な魔力を持っているはやてでさえ、測定そのものはできる。それなのにこの場所に居る相手は測定不能と出るほどの魔力を有している。

魔力が多ければ強いという訳ではないが、それでも脅威が大きいのもまた事実。

機動六課の中に緊張が走った。

「……はやてちゃん」

なのはが視線でどうするかとはやてに問いかける。

状況的にはなのはを始めフェイト、シグナム、ヴィータを急行させたいところだが、それをしてしまうと今度は輸送列車に行けるメンバーが新人のみになってしまう。

通常のドローンだけならば問題はないが、飛行型がいるという報告があるため安全を考慮するなら空戦魔導師二人は確実に派遣したいというのがはやての本音だった。

「……なのはちゃんとフェイトちゃんは当初の予定通りでお願いや。シグナム、ヴィータ、きついかもしれないけど……」

『主はやて、私もヴィータも魔力で負けているからといって、戦いで負けるとは思っていません』

『心配ねえよ、はやて。すぐに片づけて帰ってくるから。それよりも、なのは！ おめえこそ無理すんじゃないやねえぞー！』

「にやはは、大丈夫だよ」

いつものやりとりであるが、それが今はとても頼もしく感じられた

機動六課の面々は、決意を込めてはやてに視線を送る。

「せやな、私の守護騎士が負けるわけないな！ それなら作戦開始や！」

「了解！」

はやての号令を合図に全員が一斉に動き出した。

・
・
・

「という訳で、私が空戦部隊を引き連れて、シグナムとヴィータちゃんの応援にかけつけました！」

そう言ってリインフォースⅡはシグナムとヴィータに敬礼しながら並走して飛行していた。

「あんま無茶すんじゃねえぞ、リイン」

「応援感謝する、作戦については先ほど述べた通り、私とヴィータでアンノウンを攻撃、空戦部隊の諸君らにはドローンの始末を頼む」

さすがに二人だけでは心配だったはやてが送り込んだのは、余所の部隊から借りてきた空戦部隊と、それを率いるリインフォースⅡだった。

最初は本当に二人で向かうつもりだったシグナムとヴィータだったが、ドローンの数と測定不能という魔力を警戒しすぐに部隊と合流した。

そして移動しながらのブリーフィングを行っていた。

《Zielerkennung》（目標発見しました）

「本当か？ アイゼン」

「レヴァンティン」

《Best・tiggung》（確認しました）

二人は愛機からの報告を受けて空戦部隊に周囲に散会するように指示をだした。

「行くぞ、リイン！」

「はい！ ヴィータちゃん、ユニゾンイン！」

ヴィータの声に答えてリインフォースⅡは融合機としての己の役

割を果たすため、ヴィータと融合した。

「てめえが、遺跡襲撃の犯人だな？」

「こちらは管理局だ。抵抗しなければ手荒な真似はしない」

二人はそう言って遺跡の入口に佇む真っ白な少女へと声を掛けた。

「……」

そんな二人を仮面越しに眺めるラヴィエ。

「おい、てめえ！ 聞こえてんのか」

「……」（こくり）

「聞こえているのに反応しないのは、投降の意志がないと判断しているのだな？」

「……」（こくり）

そのやり取りを最後に、両者は構えた。

「一応、名を聞こう」

シグナムが騎士としてそう尋ねると、ラヴィエは少し首を捻り口を開きかけた。

「……ラ……」（ふるふる）

だがそこで何かを思い出したのか、ほんの少し声を出したかと思うとすぐに口を閉じてしまい、首を横に振り始めた。

「なんだ、てめえ？ 名前がないのかよ」

「……ある」

ラヴィエが喋ったことに驚いたヴィータだが、それでもラヴィエは名前を告げることはなかった。ラヴィエはイオリに名前がばれたら次から動きにくいから、あまり名乗らない様にと言われたことを思い出したのだ。

ラヴィエとしては、名前と呼ばれないのはとても不愉快ではあったが、イオリとの約束なのでそこは我慢することにした。

「シグナム、これ以上は無駄だ」

「そのようだな。ならば、力づくで捕まえさせてもらう」

シグナムとヴィータの二人は目の前の少女を無力化するために。

「……ん。いく」

ラヴィエはイオリを守るために。

両者の戦いが始まった。

「……なんだこりゃ」

そんな激闘の気配に気が付かず、マイペースにできてきたイオリが視た光景は、管理局の連中相手に楽しそうに戦闘を行っているラヴィエと、そのラヴィエの攻撃を防ぎながら互角の戦いを繰り広げるシグナムとヴィータによって破壊されつくされて地形が変わってしまった光景だった。

激闘

「いくぞ！ アイゼン！」

「ごちらもだ、レヴァンティン」

《《J a w o h l》》（了解）

バシユン

シグナムとヴィータの声に答えて二人のデバイスがカードリッジと装填した。

「喰らえ！」

《《S c h w a l b e f l i e g e n》》

ヴィータは4つの鉄球を生み出し、それをアイゼンで打ち出した。鉄球は打ち出された勢いのままラヴィエへと突撃していく。

「……ん」

だがラヴィエはその鉄球に怯むことなく、自らヴィータ達との間合いを詰めるために鉄球を回避して突っ込んでいった。

「あめえよ」

そんなラヴィエを見ても別段驚いた風もなく、ヴィータはそう言い放った。

《《F l u g k ・ r p e r》》（誘導弾です）

エファンゲリウムから警告が発せられる。

「んっ」

回避したはずの鉄球が死角の背後からラヴィエを強襲する。それを身体を捻って回避したラヴィエだが、その隙を見逃すほど現在対峙している騎士たちは甘くなかった。

「すまないが、手加減できんぞ。——紫電一閃！」

距離を詰めたシグナムが炎を纏わせた剣を振り降ろす。

必殺と言っても過言ではないタイミングで己の技を放ったシグナムだった。並みの魔導師や騎士であれば回避や防御は間に合わず、仮に防御することができたとしても強引に防御を突き破る自信がシグナムにはあった。

「ん！」

「なっ！」

だが次の瞬間起こった現象に、シグナムは息を飲む。

完全に決まったと思つた一撃を、こともあろうにラヴィエは片手でレヴァンティンの刃を掴み受け止めた。

「シグナム！ 離れろ！」

「っ！ レヴァンティン！」

《Nachladen》（装填）

バシユツバシユツ

「はああああ!!」

カードリッジの連続使用により爆発的に魔力を高めたシグナムが強引にラヴィエの手から逃れる。そしてそのタイミングでヴィータが放つていた鉄球が四方からラヴィエを襲った。

鉄球はラヴィエと接触すると同時に爆発を起こし、爆炎がラヴィエを飲み込んだ。

「……やってねえよな」

「だろうな。それにしても、戦い方は素人くさいが潜在能力が脅威だな」

先の攻防でラヴィエの動きが素直すぎたことから、歴戦の騎士である二人はラヴィエが実戦経験がほとんどないことに気が付いた。だが先ほどの完全な隙をついてのシグナムの攻撃に反応した反射速度に加え、レヴァンティンの刃を無造作に掴んで無傷だったことから今の爆発で対象が沈黙したとは二人は思っていなかった。

そして案の定、煙が晴れるとそこにはラヴィエが静かに佇んでいた。

「無傷かよ」

「防御をしたような気配はなかったな」

「つてことは、あの防護服パリアジャケットがすげえ頑丈つてことかよ」

《ja》（肯定です）

『シグナム、ヴィータちゃん。解析完了しました！ 目の前の少女はおそらく、普通ではありません』

そのとき今まで対峙していたラヴィエのデータ解析に集中してい

たりインフォーズⅡの声がした。

「どういうことだ？」

「普通じゃねえのは今のでわかってるよ」

『違うんです。目の前の少女の魔力ですが、複数の波形がみられます。まるで複数の魔導師が混ざったような歪な魔力波形なんです。推測ですが、何らかの人体実験の実験体だと考えられます』

複数の魔力が混ざり合った状態など本来はあり得ないのだが、目の前のラヴィエはそのあり得ない存在として実在していた。

そしてそんな普通ではない存在がいる理由など、3人には一つしか思い浮かばない。

「胸糞わりいな」

「違う。だが、ここで我らが引くわけにもいかない」

『はいです！』

とりあえずラヴィエの事情については保護してから調べることにした3人は、目の前の無傷のラヴィエをより警戒することにした。

「つつてもあの防御力じゃあ、遠距離攻撃は意味なさそうだな」

「そうだな。……ならばやることは一つだ」

「だな。近づいてぶっ叩く！」

二人は先の攻防でラヴィエに対して遠距離攻撃がほとんど意味をなさないことを悟り、接近戦の構えを取った。

「……ん」

そしてそれに応じるようにラヴィエも拳を握り、一気に間合いを詰める。

「速い！」

行動を起こしたとシグナムたちが感じた瞬間、ラヴィエは凄まじい速度でシグナムに向けて拳を繰り出した。それをシグナムはレヴアンティンで受け止めると、辺りには金属同士がぶつかりある甲高い音が響き渡る。

「喰らいやがれえー！」

シグナムがラヴィエの攻撃を防ぐと同時に、ヴィータも攻撃に移っていた。

加減無しのフルスイングでのハンマーによる一撃、ヴィータのアイゼンによる痛烈な一撃デイトリヒ・シュラクがラヴィエを側面から襲う。

「んっ！」

「なっ!？」

ガツンという激しく金属の塊がぶつかり合う音が鳴る。

ヴィータの一撃をラヴィエは己の拳をぶつけて相殺したのだ。

空中という足場がない場所において、遠心力の加わったハンマーの一撃を相殺するには、かなりの速度か重さが必要となる。だがヴィータの見たところ、ラヴィエはそんな重さがあるようには見えない上に、今の状態は完全に静止している状態だ。

まさかそんな状態から腕の力だけで一撃を防がれると思っていなかったヴィータは硬直した。

本来ならヴィータの考えた通り、ラヴィエの体格では先の一撃を受けることができなかった。だがラヴィエには《怪力》というスキルがある。

《怪力》は能力自体は魔力による身体強化という単純なものだが、上限というものが存在しないという特性がある。ゆえに、こういった空中で足場がなくともラヴィエにとっては力を込めること自体は難しいことではない。

だがそんなことを知らないヴィータは動きが一瞬止まってしまった。

そしてその隙を見逃すほど、ラヴィエはお人よしではない。

《Flamme Bleischart》(炎の散弾)

ヴィータの攻撃とラヴィエの拳がぶつかり合いヴィータが硬直した際に、ラヴィエの拳が炎に包まれ紅蓮の炎が散弾となってヴィータを襲う。

《Panzer Schild》

炎に包まれる直前でアイゼンがヴィータの前面にシールドを展開する。

「こちらを忘れるな！ 陣風！」

《Sturmwinde》

ラヴィエの拳を防いでいたレヴァンティンから不可視の衝撃波が迸る。

「っんー！」

《Shield》

その見えざる衝撃波をシールド防ぐが、その瞬間いまだに残っている炎を突き破ってヴィータが現れた。

「だから、——あめえってんだよー！」

《Raketenform》

アイゼンがラケーテンフォルムへと形を変え、カードリッジを吐き出す。

「ぶつとべえ!!」

《Raketenhammer》

アイゼンからゴオというのロケットの噴射音が鳴り、ヴィータが独楽のように回転しながらアイゼンの鋭い尖端をラヴィエに振り抜く。

「こちらもだ、レヴァンティン。紫電一閃！」

そしてそのヴィータと挟撃する形で、反対側からシグナムの一撃が迫る。

「……ん」

「なっ!?」

『危ない!』

本日何度目かの驚きの声がシグナムとヴィータの口から洩れ、次の瞬間二人の一撃がお互いを襲った。

先ほどまで確かにそこに居たはずのラヴィエが、二人の攻撃が当たる直前に、突然その姿をけしたのだ。そのせいで二人は攻撃目標を見失い、挟撃という手段が最悪の形でこの結果になってしまった。

何とかリインフォースⅡが二人の間に防御を展開し、直撃は避けることができた。

これもラヴィエの持つレアスキルの一つ《短距離転移》だ。

「……エフアン」

《Titan Eisfaust》(巨人の氷拳)

そしてシグナムとヴィータがお互いの攻撃を防ぎ動きが止まった

ところに、ラヴィエは頭上から魔法を放った。

ラヴィエの右腕が大量の氷に覆われ、まるでビルのような氷の柱がラヴィエの腕に装着された。

それは良くみれば腕の形をしている。名前の通り、氷で形作られた巨人の拳。

純粹にその質量で相手を押しつぶすためのイオリ直伝の魔法だ。(イオリが作ってもここまで大きくならない。精々が直径1m、長さ3m程度の柱が限界だ)

その巨人の拳をラヴィエが振り降ろす。

すぐにシグナムたちも異変に気が付いたが、いかんせんビルが頭上から降ってくるような事態では回避も間に合わない。

ラヴィエも必殺を予感していた。

巨人の拳は木々を押しつぶし遺跡の一部も削り、地面へと叩きつけられた。

あまりに巨大な質量に地面には大きなクレーター作り上げた。

そして氷の塊が砕け散ると、先ほどまでシグナムたちが居た場所には何も残ってなかった。

「んっ!」(こくり)

それを確認したラヴィエは満足そうに頷いた。

《Caveat》(警告)

「っ!」

勝利を確信していたところに自らの愛機から突然の警告が発せられ、ラヴィエは瞬間的に《短距離転移》でその場から移動した。

ラヴィエが居た場所を凄まじい速さで鉄球が過ぎ去っていった。

「くそっ! 避けやがった」

声のする方をラヴィエが見ると、そこにはシグナムとヴィータ、そして新たな敵が地面からこちらを見上げていた。

「すまない、シスターシャツハ。助かった」

「いえ、騎士シグナム。私の方こそ遅くなって、申し訳ありません」

そこにはトンファア型デバイス、ヴィンデルシャフトを構えた、聖王教会所属のシスター、シャツハ・ヌエラが経っていた。

「それで騎士シグナム。あの少女は一体……」

『それは私がご説明します。あの少女はおそらく何らかの実験体だと思います。詳細についてはデータを持ち帰ってから解析となります。現状ではドローンは彼女が率いているようです。膨大な魔力量に、《短距離転移》や《変換資質》など、複数のレアスキルを所持しているようです』

ラインフォースⅡがこれまでの戦闘で判明したラヴィエの情報の説明していく。

「なるほど、かなりの強敵ですね。それにしも困りました。遠距離攻撃が効果がないというのですと、空を飛ばれては私はあまりお役に立てません」

シャツハは申し訳なさそうにそういった。

せつかく応援に来ておいて、役に立てないことが悔しく、情けなかった。だが空戦適正の低いシャツハでは、シグナムやヴィータと空戦を繰り広げられるラヴィエの相手は少々荷が重い。

「あん？ あいつ、降りてきたぞ？」

「え？」

シャツハがシグナムたちとそんな話をしていると、何を思ったのかラヴィエが地面へと降り立った。

「……」

「えっと、彼女はなぜ降りてきたのでしょうか？」

戸惑いの声を上げるシャツハ。

だがその質問に答えられるほど、シグナム達も目の前のラヴィエについて詳しくはない。

わざわざ空戦を捨てて敵の数を増やすなど、何を考えているのか予想もつかなかった。

『本人に聞いてみましょうか？』

「さつきから何にも答えねえんだ。意味ねえだろ」

ラインフォースⅡの提案をヴィータが一蹴する。

「なら私が話しかけてみます。よろしいですか？」

だがこちらが話している間、攻撃してこないラヴィエを見てシャツ

ハは話しができるのではないのかと思いきや言いだした。

少し考えてシグナムが了承するのを確認し、シヤツハがラヴィエに語りかける。

「あなたの名前を教えてくださいいただけますか？」

「……」（ふるふる）

「それでは……あなたは誰とここに来たのですか？」

名前を聞かれても首を横に振るだけのラヴィエを見て、シヤツハは質問を変えた。

「……イオリ」

そしてラヴィエは少し考えるようなそぶりを見せたあと、小さな声でイオリの名前を呟いた。ラヴィエはイオリから名前を教えるとはいけないと言われてはいるが、他のことを喋ってはいけないとは言われていない。

いくら身体が成長してもラヴィエの年齢まで成長したわけではない。そのため何を喋ってはいけないのかまでの判断がつかない。

結果として、イオリに言われた名前以外は喋っても問題ないと判断してしまっただけだ。

「イオリ！ あの野郎来てんのかよ」

ヴィータがこの間の不覚を取った戦いを思い出し声を荒げる。

「あなたとイオリの関係は？」

「……？」

関係と言われてもラヴィエには分からなかった。

「何故ここにきたのですか？」

「お仕事」

「仕事？」

「……イオリが変態さんに頼まれた」

ラヴィエの中ではスカリエツティは、イオリが変態、変態と呼んでいたため、スカリエツティ＝変態という呼び名で固定されていた。

それをそのまま正直に告げると、シヤツハはとても困った表情で固まってしまった。

変態が何のことなのか分からなかったからだ。

「それではなぜ飛行を止めて降りたのですか？」

「? ……イオリが戦えって言った。飛べない人がいるから降りて戦う」

ラヴィエの中ではイオリから言われた戦えという指令が最優先事項だ。そして彼女の中での戦いとは、正面からぶつかり合うこと。そのため空中から一方的に攻撃するのは戦いと認識できておらず、シャツハが飛べないという言葉が聞こえてきたため戦うために地上へと降りてきた。

そこまで話してシャツハは目の前の少女が見た目と実際の年齢が一致していないことに気が付き、子供に話しかけるように騎士ではなくシスターとしての口調で語りかけた。

「私達が戦う必要はないのではないですか？」

「……だめ。イオリが戦えって」

だがそんなシャツハの言葉でもラヴィエの意志が揺らぐことはなかった。

「そうですか……では、言うことを聞かない悪い子にはお仕置が必要ですね」

言葉だけでは伝わらないと理解したシャツハはヴィンデルシャフトを構えた。

「もういいのか？」

「はい。彼女をイオリとやらの呪縛から解くには、少々強引にいかないといけないようです」

その言葉を聞いたシグナムとヴィータもそれぞれのデバイスを構えた。

「……エフアン」

《Blitz Beine》(雷光の脚)

ラヴィエの脚部が雷光に包まれ、文字通り雷光となってシグナムたちの周りを移動し始める。

「はあー」

いきなりの高速移動にも関わらず、シャツハとがそれに劣らぬ速度でラヴィエに追いつがる。二人は凄まじい速度で駆けながら時おり

拳とトンファーをぶつけ合い、あたりに甲高い音が響く。

「あいにくと、私は速い相手には慣れている」

《Schlangeform》

ジャラリと音と共に、シグナムのレヴェンティンがシユランゲフォルムに形を変える。

「いくぞ、レヴァンティン」

バシユツバシユツ

《Schlangebeie・enagriff》

長く伸びる連結刃が蛇のようにうねりながらラヴィエに襲い掛かる。

「ん」

《Hinder nis》(障壁)

ラヴィエの移動する空間そのものを削り取るかのような連結刃の攻撃に、さすがのラヴィエも足を止められてしまった。

連結刃の範囲に存在する気を斬り裂きながらも勢いは弱まるどころか、さらに速度を上げてくる。ラヴィエの障壁にレヴァンティンの刃がぶつかり、いやな音を立てて障壁を攻め立てる。

「ヴィータ、今だ!」

「まかせろ! アイゼン!」

《Gigantform》

ヴィータがラヴィエの脚が止まったのを確認すると、最大の一撃を入れるにかかると。

ギガントフォルムへと形を変えたアイゼンがカードリッジをロードし、ヴィータの魔力が高まっていく。

「ぶっ潰れるお!! 轟天爆砕! ギガントオシユラーーク!!!」

「ん……楽しい」

強大な鉄槌が迫りくる中、ラヴィエは初めて自分の中に湧き上がる感情を理解し口にした。その表情には今までの無表情ではなく、うっすらと笑みが浮かんでいる。

「エフアンゲリウム!」

《Jawohl》(了解)

ラヴィエは今までに無いほど力強く拳を握りしめ、自らの魔力を高めていく。

「劫火烧滅」

《Wei・flamme Leckgas》（白炎の一撃）

力を込めた右腕には今までの赤い炎とは違い、ラヴィエの魔力光と同じ白い炎が纏われた。そして今までの熱量とは比較にならない熱量が、ラヴィエを中心に周囲の草木を燃やし、地面を溶かし始めた。

ラヴィエはその白炎を纏った右腕で自らを押し潰すために振り降ろされた鉄槌を迎え撃った。

『ヴィータちゃん！』

「なっ！」

二つがぶつかり合った瞬間、ヴィータには信じられないことが起きた。

ラヴィエの拳とぶつかり合った場所から、アイゼンが溶けだしたのだ。

「ヴィータ！ 離れろ！ シスターシャツハ、ヴィータを！」

「はい！」

これまでで一番の非常識な事態に、シグナムがすぐに離れるように叫ぶ。そしてシャツハにも指示を出し、ヴィータの攻撃が中断されると同時に、シャツハが高速移動でヴィータをラヴィエの拳の射線からズラした。

その瞬間、先ほどまでヴィータが居た場所を白い熱線が通過する。

「くっ」

シャツハはヴィータを抱えて地面に着地するとともに膝を着いた。

直撃どころか掠ったわけでもないというのに、その熱量で周辺の空気までもが高温になっておりヴィータを助けに行く途中で運悪くその場所を通過し、僅かに肩に火傷を負ってしまった。

「シスターシャツハ、大丈夫かよ」

「問題ありません。っっ」

「無理すんなよ」

辺り一帯に焦げ臭い匂いが立ち込める。

今の攻撃によりあちこちの草木が燃え上がり、地面もガラス状に溶けてしまっている。

「どうやら、私達の認識が甘かったようだ。この少女は危険すぎる」

「ああ、化け物だぜ」

『今の熱量は一魔導師が出せるような熱量ではありません』

シャツハを庇うようにシグナムとヴィータが壁となる。追撃に備えて、二人は意識を集中させていたが、不意にラヴィエが視線を外した。

ラヴィエの視線の先には遺跡の入口がある。そしてそこには見覚えのある男が居た。

「……なんだこりゃ」

俺は我が目を疑った。

いったい何をどうすれば、ほんのわずかな時間でここまで地形が変わるのだろうか。

地面にはミサイルでも打ち込んだようなクレーターがあり、周囲にあった木々は軒並み斬り倒されている。おまけにあちこちが燃え上がり、地面の一部が溶けていた。

「……イオリ」

ふと名前を呼ばれた。

視線を向けるとそこには管理局の二人と見知らぬ騎士の3人と対峙しているラヴィエの姿があった。

「えーっと、この惨状は……」

何となくこの惨状が戦いの結果だということとは理解できたが、いったいどれほどの規模の魔法を使ったらこうなるのかは想像もつかない。

俺は困ったように頭を掻いた。

「その少女は貴様の関係者のようだな」

シグナムが俺を睨みつけてきた。

……相変わらずおつかない。

「まあな、隠す気はないから答えを言っちゃえば、俺にとっては末の妹みたいなもんだ」

とはいえ、今後のラヴィエが自由に活動するために、名前までは教える気はない。

「末の妹？」

「ま、その辺は無限書庫で調べりゃ分かるだろ」

かつて俺が実験体となっていたプロジェクト【M】。無限書庫にならその資料が納められていても不思議ではない。

「それはプロジェクト【M】のことか」

「あれ？ なんだ知ってんのか」

俺は少し驚いた。

無限書庫自体には資料があると考えていたが、俺の正体がばれてからそれほど時間が経っていない。あの本の海といっても過言ではない無限書庫から、たったこれだけの時間で資料を見つけられるとは思っていなかった。

「末の妹。プロジェクト【M】の完成体だ」

俺はラヴィエの隣に移動すると、彼女の頭を撫でながらそう紹介した。

「あつちい!?! なんだこれ!」

ラヴィエの頭に触れると、俺は火傷した。

「……ん」

氷を出してラヴィエが俺の手を冷やしてくれる。

「お、お前、何したんだ？」

触れただけで火傷をするなどあり得ない熱量だ。ここら一体の溶けた地面はラヴィエの仕業だろう。

「……ん、あ」

「なっ！ おい！」

そのとき、ラヴィエが突然血を噴き出して俺に倒れてきた。

「ぐっ！」

ジュウツと言う音と共に肌が火傷をしたが、そんなことよりもラ

ヴイエだ。

「……あ」

「くそっ、いったいどうしたんだ」

突然の事態に俺だけでなく管理局の連中も戸惑っていた。

俺は慌てて左目の能力を最大にして、ラヴィエの詳細なデータを読み込んでいく。

「ああ、クソっ！　そういうことか」

ラヴィエの身体は今回のために無理やり成長させたものだ。その結果、ほんの僅かに【M】と身体のリンクに歪みが生まれてしまっていた。

今回のこの惨状を見るに、ラヴィエは複数のスキルの連続しように加え魔力の大量消費と激しい戦闘行為を行った。

その結果、歪みが大きくなってしまい身体に負荷がかかってしまったのだ。

「くそ、しくじった」

本来なら【M】が完全に馴染むのにはもつと時間が掛かるはずだ。ラヴィエの身体が特殊で、予想以上に【M】との融合が上手くいったため失念していた。

完全に俺の失態だ。ラヴィエを連れてくるべきではなかった。

「《蘇生の棺》」

俺は棺桶型の古代遺物を呼出し、その中にラヴィエを放り込んだ。

《蘇生の棺》は俺の持つ古代遺物の中でも、特に効力の大きい回復系の古代遺物だ。一説には死者を入れておけば死者すら復活すると言われているほどのものだ。

【M】の調整まではできないが、これに入れておけば肉体のダメージは少なくとも問題ないはずだ。

「どうやら時間を掛けている暇はなくなったな。勿体ないとか言っちゃられない」

俺は転移用の結晶を複数取り出して使用した。

この転移結晶は魔力が大きなものを送る場合、使用する結晶の数が増えてしまう。今回は複数の古代遺物に、ラヴィエもいるために

かなりの量を消費してしまうが、ラヴィエの安全には代えられない。
「待ちやがれ！」

「じゃあな、今回は構ってるヒマはないんだ」

俺はそれだけ言い残すと、その場から消え去った。

大当たり

管理局の前から逃げ出した俺は、アジトに戻るとすぐに棺からラヴィエを出すと調整用ポットの中に彼女を寝かせた。

「バイタル、脳波ともに問題なし。……肉体の負荷の方は問題ないな。問題はリンカーコアと【M】か」

ラヴィエが目の前で吐血した時は死ぬほど驚いたが、内臓や脳にダメージが発生するような最悪の事態は回避することができた。だが問題はリンカーコアと【M】の融合のほうに発生してしまっている。「魔力波がバラついてる。【M】の調整プログラム起動。メンテナンスシステムによってリンカーコアと【M】の同調を一時遮断。リンカーコアの修復プログラムも起動。……修復予想時間は24時間か」
「どうやら最悪の最悪は免れたようだ。」

最悪の場合、ラヴィエの自我が失われて暴走するか、【M】が臨界突破を起こして大規模爆発が発生する可能性があった。

前者の場合、暴走したラヴィエが【M】に内包されているあらゆるスキルと、膨大な魔力を用いて周囲に破壊をもたらす人型兵器になっていた。そうなれば人的及び物的被害がどれほど出るのか想像もつかない。

後者の場合は、その威力そのものが予測できない。

最低でも一つの次元世界そのものが消滅してもおかしくない。おまけにそんな大規模な消滅が起これば、次元震が

起きてても不思議ではない。

そんな事態にならなかつたことに俺は安堵の息を漏らす。

「とはいえ、今回の件は完全に俺の失態だな。ラヴィエが起きたら謝らないと」

修復が終わるまで目覚めることのないラヴィエの寝顔を見ながら、俺は猛省することにした。

今後は戦闘はしばらくの間、厳禁だ。少なくともラヴィエのリンカーコアと【M】が完全に融合するまではできればスキルも魔法も使わせたくない。

『ピンポーン——解析が終了しました』

そのとき、ラヴィエの調整用ポットとは反対方向にあるコンソールから報告があった。

「……」

俺はその報告を聞いてげんなりした。

——何もこのタイミングで解析が完了することはないだろう。

しばらくはラヴィエの調整にかかりきりになりたいと思っていたのに、このタイミングで古代ベルカの資料解析が終わってしまったようだ。

これは前にスカリエツティからラヴィエを受け取る際に引き受けた依頼、《聖王のゆりかご》の隠された大まかな位置を特定するために行っていた作業だ。

資料が膨大な上に、《聖王のゆりかご》は古代ベルカでもかなり重要な存在だったようで解析にかなりの時間がかかると踏んでいたのだが、俺の予想よりも遥かに早く特定することができたようだ。

とはいえ、このタイミングで解析が完了するのに悪意めいたものすら感じる。じつはスカリエツティの奴が面白そうなタイミングで作しているのではないかと、あり得ないことを考える。

「んなわけないか」

その時、絶妙なタイミングで通信が入った。

『やあ、何やらトラブルが起きたようだね?』

その通信の相手はたった今顔を思い浮かべたスカリエツティ本人だ。

「お前……実は俺のアジトをハッキングしてないか?」

思わず本気でそう聞いてしまった。

『面白いことを言うね。君のアジトはこの通信機を覗いて全てが独立しているじゃないか。さすがの私もウーノでも、それではどうにもならないさ。おまけに、君は特殊な結界で徹底的にアジトの位置まで隠蔽している。そんなもの私でも手を出さないさ』

正論のためグウの音も出ない。

「……ならいい。それと、トラブルは特に問題ない。そつちも管理局、

「というか機動六課の目が分散してよかつただろ？」

『ああ、今回は私も動きやすかつたよ。それと、君が持ち出した古代遺物にレリックはあつたかい？ あつたなら買い取るよ』

「そういつてスカリエツティが本題に入った。」

「ああ、いくつかある。あとで取引といこう。それと、もう一つ報告がある」

『何かな？』

「俺は先ほど出た資料解析の結果は報告した。」

「探し物の《聖王のゆりかご》、大まかな目星がついた。近いうちに見つけられそうだ」

『ああ、それは素晴らしい。これなら予想より早いうちにお祭りを開催できそうだ。君も参加するかい？ 今回ラヴィエ君が随分活躍してくれたようだから、特別に招待状も送るよ』

「スカリエツティが俺の報告を聞いて機嫌よさそうに笑う。そして例の祭りやらに参加しないかと聞いてきた。」

「絶対に嫌だ。お前の主催する祭り何て絶対碌なもんじゃない」

「俺は嫌悪感を隠そうともせずになんか吐き捨てた。」

『おや、嫌われたものだね』

「むしろお前に好かれる要素があるのか」

『娘たちは私を慕ってくれているよ』

「ナンバーズはスカリエツティが生み出した存在だ。それが親を慕っているのは当然だろうとツツコミを入れたくなつたが、チンク^{N.O.5}のことを思い出して俺は押し黙つた。」

「チンクとはそれなりに話したことがあるが、あいつはかなり自己をしっかりと確立していた。ひよつとすると何かのきつかけでスカリエツティの手を離れるかもしれないと根拠もなくそう思ったからだ。」

『おや、反論は無しかい？』

「いや……そのうちお父さんパンツと一緒に洗濯しないでって言われちまえ」

「とはいえ、そのことが俺にとってどうでもいいことだと気が付き、俺は適当に反論してやっつて話を終えた。」

「それよりも、俺はこれから《聖王のゆりかご》を探しに行ってくる。候補地がいくつも見つかったとはいえ、解析した資料が古いから、確度がまだまだだからな」

『お願いするよ。その間、ラヴィエ君はどうするんだい？ 何なら私の方で預かるうか？』

そう言ってくるスカリエツティの瞳に、好奇の色が混じっているのを見逃さなかった。おそらくラヴィエが機動六課相手に戦った戦闘データを入手し、ラヴィエに興味を持ったのだろう。こうなったスカリエツティにラヴィエを預けたら何をされるか分かったものではない。

「断る」

俺は即答でスカリエツティの提案を断った。

大事な末の妹を変態に預けられるか。

『それは残念だ』

スカリエツティにしても俺の回答は予想通りだったようで、肩をすくめるだけでそれ以上は何も言っていない。

『さて、それでは私もお祭りの準備で忙しい。レリックの取引はいつも通りの手筈でお願いするよ。それと、《聖王のゆりかご》の件もよろしくお願いするよ』

スカリエツティはそう言って通信を終了した。

「はあ、ラヴィエが目覚めるまで《聖王のゆりかご》について調べてくるか。ついでにレリックも」

ラヴィエが目覚めないとアジトを長時間離れることはできない。その現状でできることと言えば、レリックの取引のために行く必要があるミッドチルダに行くこと。

そのついでに資料の解析結果の一つであるミッドチルダ近郊の《聖王のゆりかご》隠し場所候補の一つを調査するくらいだ。

「エファンゲリウム、俺は少し出てくる。一応ラヴィエが目覚める前に返ってくる予定だが、もし帰ってこなかったらラヴィエに心配するなって伝えといてくれ」

俺は調整用ポットの脇にあるテーブルの上に置かれたエファン

ゲーリウムにそう言伝を頼んだ。

《ja》(はい)

エフアンゲーリウムは一言だけそう答えた。

ラヴィエの愛機たるエフアンゲーリウムは、ラヴィエが倒れてからずっとこの調子で必要最低限の対応にしか応じない。

主であるラヴィエの不調に気が付かなかった己を恥、今回の戦闘データを元に自己AIプログラムを高速で最適化を行っているため、ほとんどの機能が動いていない状態だ。

こういう勤勉なデバイスを見ると、必要ないとはいえ相棒としても欲しいと感じてしまう。

(ま、そうはいつでも必要ないものを持つのは主義じゃないな)

俺は内心でそんなことを考えながらアジトを後にした。

「さてとスカリエツティの奴から送られたデータだと、今回の取引はこのはずなんだか……」

俺はスカリエツティとの取引場所へと到着するなり、困惑していた。

普段の取引ではスカリエツティが指定した場所へ行くと、ナンバーズのドワーエ^{N.2}が待っていた。だが今日に限っては違った。

「さて、そのこの2人と1匹。見ない顔だが……誰だ？」

俺は左目に映る柱の裏に結界まで張って隠れている奇妙な集団に話しかけた。

一人はかなり腕の立つ男の魔導師ないし騎士だろう。左目に映った魔力の量や、魔力の流れからわかる魔力の制御能力から見て間違いない。

——それはいい。だが俺が気になっているのは、残りの1人と1匹だ。

1人は背格好からして、ラヴィエよりも少し年上の10歳そこらの女の子だ。

そして最後の1匹、これは非常に珍しい存在だ。

大きさや形状、そして内包している魔力と術式から読み取るに、どうやら古代ベルカの純正融合機のようなのだ。

「誰が1匹だ！ てめえ！」

俺にばれているとわかると、その珍妙な集団は結界を解除し柱の裏から出てきた。そして出てくるなり赤い融合機がものすごい剣幕と口調で噛みついてきた。

「……赤くて小さい奴はみんな口が悪いのか？」

どうでもいいことだが、俺は管理局にいた赤く小さなベルカの騎士を思い出した。

「何のこと言ってるやがるんだ、てめえ？ それより、あたしは虫じゃねえ！ 匹つてのを取り消せ！」

なおも噛みついてくる融合機をめんどくさそうに眺めながら、俺は男から注意を逸らさないようにした。この中で俺が脅威を感じるのはあの男のみだ。

「アギト……落ち着いて」

「ルール……でも」

俺は頭を掻きながら一番話の通じそうな男へと話しかけた。

「で？ あんたたちは何者だ？」

「……俺たちは」

「……ドクターからお使いを頼まれたの」

男が何かを言う前に少女が前に出てそういった。

「ドクター？」

医者と言われても俺はパツと思いつかなかった。

「ルールー！ あんな奴、医者じゃねえよ！ 変態で十分だ」

俺はアギトと呼ばれた融合機の変態という言葉でピンときた。

「ひよつとしてお前ら、スカリエッテイの使いか？」

「そうだ。俺たちはいつもの取引相手の代役だ」

「どうやら正解のようだ。」

それよりも俺はスカリエッテイのことを変態と呼ぶ、あの赤い融合機に一気に親近感を覚えた。そしてスカリエッテイのことを変態と

呼ぶということ、この3人はあいつとそれなりに繋がりがあると確信できた。

「そうか。それじゃあ、今回はあんたら3人と取引すればいいんだな」
スカリエツティのことを変態と呼ぶ同士のことも匹から人に訂正して確認を取る。

「ああ」

確認が取れた俺は地面にしゃがみ込むと、自分の影に手を入れた。ずぶりと泥に手をつ突っ込むような感触をかき分けて、手を進めたいくと指先にお目当ての感触があった。

「よつと」

その感触の物体を影から引き上げる。するとアタツシケースに影が泥のように絡み付いて現れた。

「これがレリックだ。今回は4つある」

「何だよ、今の」

俺がアタツシケースの中を確認させえるためにアタツシケースを開ける。だがアギトにとってはそんなアタツシケースの中身よりも、先ほどの俺の影が気になるようだ。

地面スレスレまで下降したアギトが、俺の影を足先で突いていた。

「ん？ 今のは一応レアスキル？だよ」

今のは自身の影を一種の亜空間とするスキルだ。魔力を使うこともなく重さも感じないので普段は靴代わりとして持ち物を入れて使っている。ただ、入れられる量は俺の身体の体積の3倍程度である上に、生物は入らない。おまけに中に入れてあるものを取り出すには、先ほどのように手探りで影の中を探さないといけない。

さらに入れた物を取り出すとき、影が絡み付いてなかなか取り出せない。そのせいでいざというときに、とっさに使用することもできない。

——正直な話、かなり使い勝手が悪い。

だからこそ、このスキルに関しては何の知られても何の問題もない。

「……ない」

俺がアギト相手にスキルを説明していると、ルールーと呼ばれていた少女が俺の方を見上げていた。

「ん？ ないって、何がだ？」

主語が抜けている言葉に俺は首を傾げる。

「ルールー」

ただアギトには何がないのかが分かったようで、悲しそうな表情でルールーのそばに寄り添う。

「えつと、それで……何がないんだ？ 取引に不備でもあったか？」

「いや、問題ない。……ルーテシアは、あるN〇のレリックを探している」

「どうやらルールーとは愛称であって、本名はルーテシアというらしい。」

「あるN〇のレリック？」

「……X I」

「ん〜……ないな」

俺は手持ちの端末を操作して、過去に取引したレリックの番号を調べてみたが該当するばレリックは無かった。

「興味本位で聞くけど、なんでX Iが欲しいんだ？」

「……ドクターが必要だって」

「何に使うのか知らないが、スカリエッテイあの言っていることを信用するのはやめとけよ？」

このルーテシアという少女はラヴィエと同じように無表情であると同時に、自分の感情がいまいち理解できていないようだ。

こういった瞳をした人間はかつて俺の居た実験施設にもいた。大概の場合が幼い頃から実験体として育ったせいで、感情が育つような環境にいなかったのせいだ。

彼女も同じような環境でそだったのだろう。

スカリエッテイが手元に置いていることを考えると、あの変態も何らかの形で関わっているのだろう。そしてルーテシアにはその真実を伝えず、利用している関係といったところだろう。

(まあ、そこまで教えてやる必要もないか)

別段善人を気取るつもりもない俺は、証拠もないので考えるだけで口には出さなかつた。そして取引も無事に終了した俺は、すぐにこの場を後にしようとする人に背を向けた。

「おい、お前。もしも、もしもだ。レリックのX-Iを見つけたらルーに教えろ」

俺が背を向けると、アギトがそう告げてきた。

「まあ、教えるくらいならいいけど……俺も仕事だから金は貰うぞ?」

「うっ、か、金は何とかする! だから教えろよ! 絶対だらな」

「……アギト」

「わかつたわかつた。連絡先を教えてください。もし見つけたら連絡するから」

端末を取り出して、俺は連絡先をルーテシアと交換した。

「それじゃあな」

「……バイバイ」

「じゃあな」

俺は挨拶を終えると、今度こそここから立ち去った。

・
・
・

ルーテシアたちとの取引を終えた俺は、その足でそのままミッドチルダ近郊に存在する遺跡に向かった。

「……おかしい」

その洞窟に入つて、遺跡の入り口まで辿り着いた俺が一番感じたのは違和感だ。

遺跡の入り口自体は今にも崩れそうな洞窟のような場所の中にあつたにも関わらず、遺跡の扉自体は劣化した様子すら見せない機械仕掛けの扉だつた。

その扉の様式自体は珍しくもないのだが、問題はここに来るまでの道とこの扉の差だ

まるで別で造られた遺跡を後になってから、この場所に持ってきたようなそんな後付したような違和感がある。

「……とにかく入ってみるか」

俺は扉に触れて左目によって扉に施された封印を探っていく。

「えらく嚴重な封印だな。……ん、アクセス権がかなり制限されている。本当に極一部しか入れないようになってる」

遺跡に封印が施されていること自体はさして珍しくもないが、ここまで嚴重に封印を施されているものは珍しい。こういった場合、遺跡の中にあるものは非常に貴重な物、重要な物、危険な物の三択の場合が多い。

「さて、何が出るかな？」

俺は扉に施された封印の解読を終え、さっそく扉の封印の解除に取り掛かることにした。

影の中に手を入れてあるものを探す。

「お、あった」

目当ての物を見つけた俺は、それを影から引っぱり出す。

それは端的に表現すれば、アンティーク調の古めかしい鍵だった。

「さて、やるか」

この鍵の名前は《森羅の鍵》。

形はただの鍵ではあるが、これもれっきとした古代遺物ロストロギアの一つだ。

効果はあらゆる封印や錠を解除するという、とんでも性能の古代遺物だ。ただ使用するにはこの鍵自体に施されたプロテクトを解除する必要がある。

——そのプロテクトが何よりも曲者だ。

プロテクトの解除方法自体はシンプルなもので、鍵が内包する魔力の伝達経路に正しい道筋で魔力を通すだけだ。要は、紙に書いた迷路をペンを使って迷うことなくクリアすればいい。だがこのプロテクトの最大の難点は、魔力を通す伝達経路のパターンが無限に存在する上に、伝達経路そが毎秒変化する。さらに通す魔力は人間が制御できないレベルでの精密な操作（人間に手でナノサイズの文字を書けというようなもの）が必要だ。

本来この工程は専用の設備を使用して魔力の伝達経路の正解を瞬間的に読み取り、専用の魔力制御システムで伝達経路に魔力を通して

初めて使えるようになる。ただ残念なことに《森羅の鍵》自体は古い遺跡で見つかることはあるが、その専用の設備は現存している物が未だに見つかっていない。

おそろしいほど精密機器であるため、何のメンテナンスもされない状態では機能を維持できないのだろう。

そのせいでこの鍵は無用の長物と言われてしまっている。

「……………こーだー！」

だが俺はその問題を、左目と自らのスキルである超精密制御を代用することで解決した。

左目で毎秒変化する伝達経路の予測と確認を行い、俺の超精密制御による魔力の操作で可能な経路に変化した瞬間に魔力を通す。

それでも成功確率は3割あるかないかというところだ。

「よー！」

幸いにも今回は一回で成功できた。

「さて、開錠」

プロテクトの解除された《森羅の鍵》を扉に向けると、その扉に存在しないはずの鍵穴が現れた。俺はその鍵穴に《森羅の鍵》を差し込み、軽く捻った。

カチャリという音と共に、左目に映っていた扉の封印が失われている。

そして静かに扉が開いた。

「おじやましますっ」と

扉を潜るとそこには扉と同じ材質でできた金属製の長い廊下が伸びていた。

「すうーっ………ピィィィ」

俺は息を大きく吸い込み、口に指を加えて思いつきり音を鳴らした。

音は俺の近くで僅かに反響したが、すぐに聞こえなくなってしまうた。

「……………」

俺は音の反響具合を確認した。

どうやら俺が予想していたよりも遥かに大きな遺跡のようだ。久しぶりに攻略しがいのありそうな巨大遺跡に、俺はうずうずしていた。

「さて、装備の方は大丈夫だ。時間は……余裕だな」
今持っている装備と現在の時間を確認し、俺は今からここを潜っても問題ないと判断した。

いくらうずうずしているとはいえ、遺跡攻略のための準備を怠るような間抜けでも初心者でもない。うずうずしているからこそ、自分のできることを正確に把握していなければ遺跡の攻略はできない。

「というわけで、出発っ」と

俺は遺跡の奥へと向かって歩き出した。

「ほうほう……遺跡っていうより施設か？ いや、それよりも城みたいな構造をしてるな。おまけに古代ベルカの様式そのもの。ひよつとして、いきなり当たりを引いたか？」

詳しい年代はもつと詳しく調査しないことには分からないが、これまでいろいろの遺跡を見てきた経験からこの遺跡が古代ベルカの物であることはわかる。おまけに、古代ベルカでもかなり高度な物だろうことが見て取れる。

俺はさらに詳しく調査するために奥へ奥へと進んでいく。

「げっ」

マップピングも進めながら奥へと進んでいくと、つい最近視た厄介な兵器がいた。

高度のステルスにAMF、おまけに頑強な装甲。聖王ゆかりの遺跡で見られたドローンだ。

左目のおかげでかなり離れた距離から発見できた上に、この遺跡自体が機能停止状態で最低限の防衛機構しか稼働していないおかげで、あちらはまだ俺に気が付いていない。

俺は面倒事を避けるため、ドローンのいない方へと移動することにした。

「ここは……大広間か？」

広く開けた空間に出た。

天井には美術品としても価値が高そうなシャンデリアが吊られ、床には触り心地の良さそうな絨毯、そのほかにも高価そうな装飾品が見て取れる。

完全にお城の中だ。

「マジか。マジで当たり引いたのか」

《聖王のゆりかご》は伝承によれば戦艦であると同時に、聖王の居城でもある。そのことを踏まえて考えれば、ここに来る途中の廊下などはまさに戦艦の通路にも見える。

そして聖王ゆかりの遺跡で重要な場所に配備されていると思われるガジェット。ドローンもいることを考えればここが《聖王のゆりかご》内部であると予測できる。

「……さすがに中枢に行くには防衛機構は生きてるだろうな」

どれほどの機能が生きているのかは分からないが、下手に重要施設に足を踏み入れ無い方がよさそうだ。

伝承が正しいなら、この《聖王のゆりかご》はとんでもない兵器だ。下手に突いて動かれたら帰れないかもしれない。

「予想外に調査もスムーズに終わったし、ここはいったん帰るか」

一応スカリエツテイへの依頼は果たしたことになる。

俺は危険が起ころる前に帰ることにした。

「——念のため置き土産しとくか」

オークション会場

「……………あむ」

「え？」

アジトから帰った俺は我が目を疑った。

「……………あむあむ」

「……………え？」

俺は思わず目の前の光景を二度見してしまった。

まだラヴィエが覚醒するには数時間あるはずだ。

それなのに俺の目の前には目を覚ましたラヴィエが、冷凍庫にしまっていたはずのバケツ状の容器に入った大容量のアイスを抱えている光景があった。

いつもアイスはアイス用の小さな皿に移して食べるように言っているのに、俺が居ないのいいことにバケツに直接大きなスプーンを突込み、一生懸命アイスを掘りながら口の周りをベタベタにしながら幸せそうに頬張っている。

あまりにアイスに集中しているせいで、ラヴィエは俺が帰ってきたことに気が付いていない。

「……………ん」

しばらくその光景を呆然と眺めていると、ラヴィエが入口に立っている俺にようやく気が付いた。

「……………おふおえり」

ラヴィエは大型スプーンの上に乗っている大きなアイスの欠片を口に押し込み、バケツをさっと自分の背後に隠しながら気まずそうに「おかえり」と言ってきた。

一応悪いことをしているという自覚はあるのか、こういった行動は本当に子供そのものだ。

いつもなら叱るところなのだが、俺は無言でラヴィエに近づき頭に手を乗せた。

「ただいま。それと、無理させて悪かった。ごめんな」

手を乗せたラヴィエの頭を撫でながら俺はそう謝罪した。だが謝

られたラヴィエは、何を謝られたのか理解していないようで首を傾げている。

「今回は管理局相手に頑張ったから、アイスそは好きに食べていいぞ」
俺がそう言うのとラヴィエは目を輝かせて隠したバケツを抱え込み、再びスプーンを動かし始めた。

「さて、ラヴィエが起きたのはいいが……こんなに早い理由が分からないな」

ラヴィエが入っていた調整用ポットの端末の前に座り、俺はシステムのログを調べ始めた。

「……ふむふむ」

調べていくと途中まではシステムが通常通りに稼働していたことは分かった。だが時間的に俺が遺跡内部に入った辺りからシステムの動きが変化しているのが見られる。

「システムに問題はない。いや、問題ないどころか、ラヴィエの生体データの詳細が入力されて、調整用ポットがよりラヴィエにあった仕様になってるな」

調整用ポットだけでなく、システムそのものもラヴィエに対して最適化されている。これなら確かに当初予測していた時間よりも早く調整が終わったのも頷ける。

問題は誰がこれをやったか、だ。

「……ん」

「なんだ？」

俺が考えていると、ラヴィエがアイスを食べる手を止めエフアンゲリウムを俺に差し出してきた。

「……まさか」

そこで俺はラヴィエが何を言いたいのかを察した。

「エフアンゲリウム……これはお前がやったのか？」

《ja》(はい)

俺の問いをエフアンゲリウムが肯定した。

確かにエフアンゲリウムなら、ラヴィエの詳細な生体データに加え実践データも持っている。おまけにラヴィエとの同調もかなり進

んでいるため、システムプログラムをラヴィエに最適化することも可能だろう。とはいえ、まさかそんなことを自発的に行うなど、全く予想していなかった。

だが本来はエフアンゲリウムに使用しているパーツでは、この調整用ポットとのシステムとは根本が違いすぎるためアクセスするとすら難しいはずだ。

それなのにエフアンゲリウムはどうやったのか、アクセスしただけではなくシステムの書き換えすらも行って見せた。

どうやらラヴィエが成長するとともに、エフアンゲリウムも予想外の独自成長を遂げているようだ。

エフアンゲリウムに使用されているシステムの根幹は「M」が使用するために、プロジェクトMの当時の研究者たちが作成したものだ。

さらに大本は古い遺跡で出土した^{ロストロギア}古代遺物を流用している。

今回の件はおそらくその使用されている^{ロストロギア}古代遺物に起因しているのだろう。

「一応、こつちでも調べたいから書き換えに使用したデータと、今回の方法を教えてくれ」

《J a w o h l》（了解しました）

エフアンゲリウムから大量のデータが端末に送られてくる。

「今日はデータの整理だな」

あまりの量のデータに全てに目を通すだけでも徹夜が確定しているのが分かった。そこからさらに解析やらなにやらをしていくことを考えると、数日はアジトに籠りきりになってしまいそうだ。

「うああ、今回はオークション行けそうもないな」

近々ミッドチルダで行われる^{ロストロギア}古代遺物のオークション。ここでオークションに掛けられているのは、^{ロストロギア}古代遺物の中でも安全な上に危険もないと判断された物品だけだ。

俺としてもそんな表向きの物品に興味はない。

ただどこの世界にも悪巧みをする奴らはある。

^{ロストロギア}古代遺物のオークションということで、この時ばかりは普段嚴重す

ぎるほど嚴重な古代遺物の輸送に関する規制がどうしても緩くなる。するとその機に乗じて表向きオークションに掛ける古代遺物に紛れこませて違法な古代遺物を密輸してくる連中がいる。

盗掘者は発掘した違法古代遺物を高値で売るため。

収集家は普段管理局の目が厳しく、手に入れることができない珍しくも危険な違法古代遺物を手に入れるため。

双方が闇にまぎれて動き出す。

普段なら俺もこの機にコレクションに加えない古代遺物は売り、珍しい古代遺物を買うこともある。さらに、あわよくばそういつた違法古代遺物を買付けに来たどこぞのお偉いさんたちと、コネクションも作ることもある。

「はあ、今回は無理だな」

ただ今はラヴィエのことが最優先であるため、俺は今回はオークションへと行くことをあきらめていた。

「あ、データの整理する前にスカリエツティに《聖王のゆりかご》のデータ送るか」

俺はそう呟くと、先ほどまで探索していた遺跡のデータをまとめ始めた。

位置情報に大まかな内部構造と現在稼働していると思われる防衛機構、それと解除した封印の代わりに施してきた新たな封印の解除用魔法。それらのデータを手早くまとめてスカリエツティへと送る。

当然暗号化も忘れずに行う。

「よし、これでOKだ。さてと、本題の方に取り掛かるとするか。エファンゲリーウム、サポート頼むぞ」

《ja》(はい)

大量のデータとの戦いが始まった。

「くあゝ」

あれから2日、俺はほとんど徹夜でデータの整理を行っていた。

時折ラヴィエに調整用ポットに入ってもらい現在の状態のデータも更新しながらの作業だったため、かなりの時間がかかってしまった。

ただ予想外だったのが、エフアンゲリウムの補助がかなり優秀だったためにオークションには間に合った。

「どうするかな」

オークション自体はしばらくしたら始まってしまったため、やや遅れての参加になってしまう。ただ俺が本当に参加したいのは裏のほうだ。

こちらは例年通りならば表のオークションが終わってから開催されている。今からアジトを出れば十分に間に合う。

「……う〜ん」

かなり悩む。

ここ近年の裏オークションで取引されている古代遺物の質は年々落ちていく感が否めない。それにもしも目玉商品があるのなら噂が流れるはずだ。

今回の裏オークションで出品される品物に関して、そんな噂は聞いた記憶がない。つまりはさして珍しくもない品物が出品されているだけだろう。

もう一つの目的である金だが、こちらはここ最近スカリエッティからの依頼を受けたり、レリックを複数個取引したりなどでまとまった金額が手に入ったばかりだ。

おまけにこれまで多額の金喰い虫だった【M】の維持管理装置が停止しているため、そこまで金に困っていないのが現状だ。

正直今回は参加する意義があまりない。

「……イオリ」

俺が頭を悩ませていると、ラヴィエが近づいてきた。

「ん？　なんだ、ラヴィエ」

「……………食べ物無い」

「え？　……あゝ、そっそっちいや食料そっちの補充は最近してなかったな」

最近補給のためにミッドチルダに行ったときは、どういうわけか管理局の連中と行く先々で遭遇したため、ラヴィエの服など必要最低限の物だけ買って逃げ帰ってきた。

それからスカリエッティの依頼などでごたごたしていたせい、すつ

かり補給するのを忘れてしまっていた。

「よし。なら買いに行くか。ついでにオークションにも顔を出すとするか」

「……オークション？」

「ああ、ラヴィエもアジトにずっといるだけだと気が滅入るだろ？ たまには気分転換も兼ねて出かけようってことだ」

オークションにはあまり行く気はなかったが、食料の補給をするためにはミッドチルダに行く必要がある。それならラヴィエの社会勉強ついでにオークションがどういうものか見せるのにもいい機会だ。

「さて、そうと決まればラヴィエ用のドレスも買いに行かないとな」

確かあのオークションはそこそこの格式が高く、ドレスコードがあったはずだ。

「……ドレス？」

「そ、ドレス」

俺はラヴィエを引き連れてミッドチルダへと向かうことにした。

・

俺たちは現在オークション会場へとやってきていた。

「……」

白を基調としたドレスを身に纏ったラヴィエが無表情ながらも、どこか嬉しそうな雰囲気であんな前を歩いている。元々の雰囲気が物静かなこともあり、その姿はどこぞの御令嬢と言っても違和感がない。

それに対して俺の方はどこにでもある普通のスーツだ。傍から見れば、御令嬢に付き従う召使といったところか。とはいえ、どちらもそれなりの店で購入してきたものなので、こういう場でも浮くことはない。

「ラヴィエ、しばらくここで待っていてくれ。ちよつといろいろと手続きしてくるから」

「……ん」(こくり)

そんなどうでもいいことを考えながら、俺はエントランスホールへ

ラヴィエを残して受付へと向かった。

「招待状をお持ちですか？」

「はい、こちらを」

受付に言われて、俺は招待状を差し出した。

「……確認しました。本日はお楽しみください」

「そうさせてもらいます」

受付から返された招待状を受け取った俺は、愛想笑いを浮かべながらそう返した。

当然のように招待状を受け付けに渡した俺だが、この招待状は偽物ではない。俺と懇意にしているとある企業のお偉いさんに融通してもらった真正正銘の本物だ。

名前は偽名ではあるが、こういつた場で詳しく調べられることもない。

それから数枚の書類に目を通した俺は、その足で地下駐車場へと向かった。

地下駐車場へ辿り着いた俺は、周囲に人の気配がないことを確認すると黒塗りのトラックの近くへとやってきた。

「此方こなたはここに」

「……彼方かなたはあちらへ」

おもむろに呟いた俺の言葉に、どこからともなく返答があった。

そしてドサリという音と共に、俺の足元に一冊のカタログと黒い封筒がいつの間にか現れた。本当は俺の左目には何が起きたのかしつかりと映っているが、ここはマナーと身の安全のために何も見えてないふりをする。

「……ふむ」

ペラリペラリとカタログのページを捲っていく。

これは例の裏オークションに出品される違法ロストロギア古代遺物の一覧だ。俺がここに来てから行った行動は、いわば裏オークションに参加するための暗号のようなものだ。

しばらくカタログを眺めていたが、やはりというか目ぼしい物が無い。

今回は出品する予定もないため、これで裏の方には参加する目的が完全になくなってしまった。

「今回は見送りだな」

「……コレクター^{コレクター}収集家だな」

その時、背後から声を掛けられた。

裏の方を仕切っているところの暗部だろう。気配を一切感じさせないのはさすがだ。

「そうだが……何の用だ？ 裏では干渉しないのがルールだろ」

裏のルールは例え知り合いであっても干渉しないのが不文律だ。それを裏を仕切っているところそのものが破って接触してきたことに驚きながらも、表情を変えずに応じる。

「お前はジェイル・スカリエツィと知己だな」

「おい、あんな変態と知己にするな。あくまでギブアンドテイクの関係だ」

あんな変態と友達扱いされるのはたまったものではないため、俺はそう訂正する。

「……奴がこのオークションを狙っているというのは本当か？」

だが背後の奴はこちらの言葉など聞いておらず、こちらに質問を投げかけてくる。

「知らん」

暗部が尋ねてきた質問に、俺は即答した。実際知らないことだ。

「……本当か？」

「本当だ。ただ、あいつは最近レリックを探してる。カタログには乗っていないから競売には掛けられないんだろうが、もしも別口で密輸してるなら注意しろ」

普通ならこんな問いかけに意味はないだろうが、おそらく嘘発見器かそれに類する物を持っているのだろう。俺の知らないという言葉と忠告を聞くと、それ以上は深く追求してこない。

そしてそのまま俺の背後にあった気配も消えていった。

「つたく、何だっただ」

頭を掻きながらぼやく。

ここ最近はスカリエッツィの奴からの依頼ばかりを受けていたことから、疑われたのだろうかということは予想できた。

そして俺の回答が本当だということを確認を得たことで、俺への疑いは8割ほど晴れたといったところだろう。

それ自体は問題ない。

ただ——スカリエッツィが動いているという情報だけは俺の中に不安を残した。

「……スカリエッツィの奴、何を企んでるんだ？」

もやもやした感情を持ったまま、どうすることもできない俺は地下駐車場を後にした。

「……あれ？ ラヴィエ？」

だがエントランスホールへと戻ると、そこには待っているように言ったラヴィエの姿がなかった。

「……」

ラヴィエはイオリに待つように言われたエントランスホールの椅子に腰かけながら静かに待っていた。時折思い出したように来ている白いドレスのスカート裾の位置を意味もなく直したり、袖のフリルを指先で摘まんでみたりしていた。

表情には出ていないが、このドレスがとても気に入っているラヴィエだった。

「……ん」

そんなラヴィエの前を見たこともない小さな人が通り過ぎて行った。

「……なに？」

思わず興味を惹かれたラヴィエは、思わずその小さな人を追いかけて行く。

ふよふよと漂う小さな人に気が付かれないように追いかけていくと、小さな人は曲がり角で停止した。それを確認したラヴィエは、小

さな人の背後からそつと近づいていき、小さい人を手で捕まえた。

「きやつ!? な、なな何ですか!? は、はやてちゃん」

「……捕まえた」

小さい人を捕まえたラヴィエは、満足そうにそう呟く。

「あはは、お嬢ちゃん。うちの子を放してくれへんか?」

ラヴィエは小さい人ばかり気を取られていて、周りに3人の大人がいることに気が付いていなかった。

「……小さい人」

「せや。その小さい人は私の家族なんよ。だから放してくれへんか?」

「……家族、ん」

家族と聞いたラヴィエの脳裏にイオリの姿が思い浮かぶ。もしもイオリが誰かに捕まえられたらいやだと思ったラヴィエは、捕まえていたリインを解放した。

「……ごめんなさい」

「ちゃんと謝れるんやな、ええ子やな」

ラヴィエが何も言われる前に頭を下げたのを見て、はやては笑みを浮かべながらそう言っつてラヴィエの頭を撫でた。

「にやはは、リインも大丈夫?」

「はい、なのはさん。びつくりしましたけど、大丈夫です」

「あ、リイン。ドレスに皺が」

その光景を見ていたなのはとフェイトは、苦笑を浮かべながらリインを気遣った。3人とも子供がやったことに目くじらを立てるような性格でもない。おまけにラヴィエがすでに謝罪をしているのだ。ここから怒るような気も起きないでいた。

掴まれたリインにしても驚いただけで、実際に痛みもないのでラヴィエのことを怒る気もなかった。

「……ごめんなさい」

というよりも、先ほどまでもリインを捕まえた時の嬉しそうな声が、今ではとても沈んでいるため怒るよりもどうやって慰めたらいいのかと考えていた。

「怒っていませんよ。それよりも、私リインフォースⅡといます。あなたのお名前は？」

リインがラヴィエの顔の前まで移動すると、自己紹介をしてきた。

「……ラヴィエ」

「ラヴィエちゃんですか。いいお名前ですね。捕まってあげられませんかけど、お友達にはなれますよ」

リインはそう言って小さな手をラヴィエに差し出してきた。

「……ん、友達」

ラヴィエは珍しく照れたような表情でリインの小さな手と握手した。

そんな微笑ましい光景を見て笑みを浮かべながら、はやてたち3人もラヴィエの視線の高さに合わせてしゃがみ込んだ。

「私は八神はやてや。よろしくな」

「私は高町なのはだよ」

「私はフェイト・T・ハラオウン。よろしくね」

そのリインの自己紹介に続くように、3人が笑顔でラヴィエに自己紹介をした。

——もしもこの光景をイオリが見ていたら、裸足で逃げ出していただろう。

「それよりも、どうしてリインを捕まえようと思うたんや？」

「……小さい人初めて見た」

融合機など普通に生活していれば見ることなどまずない。子供の視点で見たら、それこそお伽噺で登場する妖精だと勘違いしてしまうががない。そしてその時の子供の反応として捕まえようとするのは不思議なことではないと全員がその回答と先の行動に納得ができた。

実際にラヴィエの今回の行動は、はやてたちが考えた通りだった。「そか。でもな、リインは私の家族なんよ。捕まえるのは勘弁してな？」

「……ん」(こくり)

ラヴィエが頷くのを確認したはやては、再びラヴィエの頭を撫で

た。

「それより、はやて。この子、ひよつとして迷子かな？」

フエイトが心配そうにそう尋ねる。

「あ、そうだよ。こんなところに1人なんて……」

「せやな。なあラヴィエちゃん、誰と来たん？」

「……家族」

「どこにおるん？」

はやてに問われてラヴィエは来た道を指さした。

「エントランスホールやな。それやったら一緒に行くか？」

「……大丈夫、1で行ける。バイバイ、リイン」

「バイバイです、ラヴィエちゃん」

ラヴィエは初めてできた友達に手を振ってその場を後にした。

・

・

「……ん、イオリ」

「お、帰ってきた。どこ行ってたんだ？」

しばらくエントランスホールで待っていると、ラヴィエが帰ってきた。

迎えに行こうかとも思ったが、ここは警備もしっかりしている上にエフアンゲリウムも持っているのだ。変なことにはならないだろうと、なにより入れ違いになる方がまずいと考えここで待っていた。

「ん？ なんだか機嫌がいいな？」

「……ん、友達ができた」

ラヴィエの一言に俺は驚いた。

まさかラヴィエが友達を作ってくるとは考えてもみなかった。

「そうか、よかったな」

とはいえ、驚いた以上に嬉しかった。

「どんな子だ？」

「……小さい人」

小さい？

ラヴィエよりも子供ということだろうか。

「あ、午後からのオークションが始まるみたいだ。帰ったら友達のと教えてくれよ?」

「ん」

午後のオークションの開始前の合図が聞こえた俺たちは会場の中へと向かった。

人物紹介Ⅱ・ラヴィエ保有スキル

人物紹介

名前 イオリ

身長 173 cm 体重 62 kg

魔力量 B

魔力光 青に近い水色

魔導師ランク 推定B

所有スキル 凍結変換 超精密制御 ドッペルゲンガー 並列処

理 魔力の高速運用 シャドープール

・元はプロジェクトMの実験体。10世代目のⅡタイプ。

作成時のコンセプトが制御能力の高い個体であったため、攻撃や防御よりも魔力の運用、操作に特化している。さらに生まれつきリンカーコアが4つあり、自由に抜き取ることができる。

かなり慎重で見つからない努力だけでなく、見つかった場合の対処法やなどまで数十通りの作戦^{プラン}を常に用意している。その他にも管理局の上層部にパイプを作り、そもそも捜査の対象にならないように根回しもしている。

戦闘技術や駆け引き、逃走に関しては高い能力を有するが、戦闘能力自体はさほど高くない。

フェイトたちのことを化け物扱いして、かなり恐れている。

本人いわく、「まともに戦ったら瞬殺される自信がある」

本来の戦闘方法は、所有するロストロギアを主体として、魔法はあくまで補助的なもの。

所有しているロストロギアはかなりの数だが、実際には魔力量の関係もあり使用できない物が多数ある。

かつて実験体ではあったが、実験でされたことは血液採取とリンカーコアの採取だけなので、研究者にたいしては恨みなどは持っていない。(他の実験体はリンカーコアを抜き取られる際に、苦痛を感じていたため研究者に恨みや恐怖を抱いていた。)

そのため死んでしまった実験^兄体^妹のために、形だけでも完成させて彼

らの生きた証にしたいと考えている。

ラヴィエと暮らすようになってからはラヴィエの能力開発を中心にした生活を送る。最近は何かとミッドチルダへと行く機会が多いが、たびたび管理局の面々に遭遇するため困っている。

名前 —— ⇒ ラヴィエ

身長 125 cm 体重 22 kg

魔力量 不明 ⇒ 測定不能〔M〕と融合したことで魔力が増大。

膨大過ぎるため測定不能)

魔力光 無色 ⇒ 白色

魔導師ランク 無

所有スキル 複数〔M〕に内包されているスキルを習得。かなりの量のスキルを保有している)

・スカリエツテイによって作られた実験体。左右で色の違う瞳が特徴。

元は聖王オリヴィエを元にされているが、何らかの原因で突然変異を起こした。

聖王の能力は持つておらず、イオリ曰く空っぽの器。感情面でも空っぽのようで、命令されなければ何の反応も示さない。

イオリへの報酬として渡された。

現在は〔M〕と融合したことで自我も芽生えている。ラヴィエという名前を何よりも大事な宝物と考えているため、お前などの呼び方をされるのを嫌う。

戦闘能力に関して類稀なる格闘センスによる格闘と魔法を組み合わせた近接戦闘を得意とする。遠距離攻撃も可能だが、威力が高くなりすぎるためあまり使用しない。

オークション会場にて、リインフォースⅡとお互いの素性を知らないまま友人となる。

名前 エフアンゲリウム

形状 待機モード 雪の結晶のような形（ラヴィエは髪飾りのように身に付けている）

戦闘モード 両腕に装着される手甲

・ラヴィエの愛機。

【M】の高出力と複数のスキルを運用するために作られた特殊なデバイス。

作成したのはイオリだが、AIなどは当時の研究者たちが残したものを使用している。

大本になっている物は古い遺跡から出土した古代遺物ロストロギアを使用して
いるため、デバイスとしての性能は群を抜いている。

イオリの予想以上の成長を見せることもある成長するデバイス。
格闘戦闘を主体に構成されている。

ラヴィエのスキル集

現在までラヴィエが使用した。あるいは判明しているスキル。

《物質透過》

文字通りあらゆる物質を透過する。

ただし一部分だけを透過するといったまねはできず、物質透過中に透過を解除した場合は先にあった物質に自らの身体が弾かれてしまう。

《ヴァイスシュトルツ白の誇り》

バリアジャケットのような物ではあるが、性能などは比べ物にならない。

振れた魔力の結合を分解するため、その白を他の魔力が染めること
ない。かなりの高魔力でないと一切ダメージが通らない上に、非常に

頑強であるため並みの質量兵器でもダメージがない。

《ドッペルゲンガー》

リンカーコアに自身の血液を与えることで、能力、魔力、容姿すべてがオリジナルと同じ、完全な複製を作り出す。

作り出された複製は独自に思考し行動する。本体とリンクしているので、念話を用いずとも互いの位置や状態が把握できる。イオリの切り札の一つ。

《複製コア》

イオリは特異体質としてリンカーコアを4つ所持しているが、その情報を元に《M》に内蔵されたスキル。

能力自体は変わらず、リンカーコアを複数作り上げることができ

る。イオリの限界は4つだが、ラヴィエの場合は全部で12個まで複製することが可能。合計で13個所持できる。

《超精密制御》

最新のデバイス以上の制度で魔力を制御できる。そのため無駄な魔力の消費はなく、本来ならあり得ないほど魔法の長時間維持ができる。

イオリはこの能力のお蔭でデバイスなしで魔法を使用できるが、ラヴィエの場合は魔力量の次元が違うため、このスキルだけでの魔法使用は不可能。それでも精密な魔力のコントロールが可能であるため、デバイスと併用することで高出力を長時間維持したり、《並列処理》との併用でアクセルシューターなどを100以上同時に制御したりなどの離れ業が可能になる。

《並列処理》

完全に違う魔法を複数同時に操作したり、使用中の魔法を他の魔法で上書きしたりできる。

ラヴィエは《超精密制御》と併用することで、同じ魔法なら100以上を同時に制御可能となっている。

《変換資質》

各種変換資質。

イオリは凍結変換資質のみだが、ラヴィエの場合は他にも炎熱や電気の変換資質も持ち合わせている。

《短距離転移》

ノーモーション、ノータイムでの短距離転移。

《怪力》

魔力を使用しての身体強化。

魔力の消費量を増やせば増やすほど身体能力はどこまでも上昇する。ラヴィエがヴィータの攻撃を受け止められたのはこの能力のおかげ。

最悪の再会

「ふあ〜」

午後のオークションを眺めながら俺は隠す気すら起きずに、大きな口を開けてあくびをした。

「暇だ」

俺はこの表のオークションの正直な感想を口にする。

表で正式に競売に掛けられている古代遺物ロストロギアは、多くの研究者や考古学者たちがその用途や危険性を隅々まで確認し、安全であると認定された物だけだ。それはつまり未知の物のでも、ましてやハラハラする危険性がある物でもない。

自ら遺跡に赴き未知の古代遺物ロストロギアを発掘したり、その古代遺物を解析し使用している俺としては面白味などあるわけがない。

『続いてはこの《流水の水瓶》です。こちらをこのように傾けますと、水瓶から水が流れ、美しい虹を映し出します』

司会者が新たな競売品を出してきた。

そしてその《流水の水瓶》をステージ上で傾け、いきなり辺りを水浸しにしていく。これには会場から困惑の声や、最前列では驚きの声が上がった。

「……イオリ、お水」

「ん？ ああ、あれは幻影だ。そこそこ高度な幻影だから視覚、触覚、聴覚に作用してる。触れば水の感触と冷たさを感じるだろうが、それだけだ。まあ、アンティークとして飾る分には、そこそこな代物だな」
流れる水を見て興奮しているラヴィエに種明かしをする。

『皆様、落ち着いてください。これは幻影です。このように触れれば水の感触に、冷たさも感じますが実際に濡れることはありません』

会場の混乱を鎮めるために司会者が俺の説明と同じことを話している。

『それでは《流水の水瓶》の競売を始めます』

先ほどの司会者の実演と説明で興味を持った参加者たちが落札を始めた。

「……イオリも持つてる?」

全然興味を示さない俺に、ラヴィエがそんなことを聞いてきた。「無い。俺が収集するのは実際に使える古代遺物や危険な古代遺物だ。ああいった調度品には興味ないな。ただ、《流水の水瓶》は探せば結構いろいろな遺跡に現物があるから、欲しいなら今度探しに行くか?」

ここで買ってやってもいいのだが、正直あの程度の古代遺物に金を使うのは馬鹿らしい。それなら趣味と実益を兼ねて遺跡発掘をして発掘してきた方がいい。

「……ん、いや」

ラヴィエはそんな俺の言葉に少し悩んだが、元からそこまで欲しい物でもなかったのか、あつさり諦めた。

「そうか。他に欲しい物があったら言ってみろ。知ってる奴ならすぐ見つけてやるし、この場で買ってでもいいんだからな」

俺はラヴィエの頭を撫でながらそう言った。だが、ラヴィエの興味は次の瞬間には競売品から完全に離れてしまった。

「……あ、リイン」

「ん? さっき言ってた友達か?」

ラヴィエが指さした方を振り向く。

そこには現在、そして未来にも出会いたくないN0、1と3が、ドレスアップして2階の席から競売品を眺めていた。

「……あ、ラヴィエさん。つかぬ事をお聞きしますが……お友達は、あの席にいないよな」

額を押さえながらラヴィエに尋ねてみる。できれば違ってくれという切実な願いと共に。

「……いるよ。リインは小さい人」

そう言つてラヴィエが八神はやての傍をに寄り添っている融合機を指さした。

(小さい人ってそういうことかよー)

思わず心の中で叫んでしまった。

ラヴィエから小さいと聞いてはいたが、それはあくまでラヴィエよ

りも少し身長が低い程度だろうと考えていたのだが、ラヴィエの言う小さい人とは本当に小さいということだったようだ。

(マジかよ。 よりにもよって……あく、でもラヴィエに友達とは別れなさい、とも言えないし……ああ)

俺は頭を抱えた。

これが一般人ならば問題ない。仮に管理局に所属していたとしても、ごく平凡な職員ならばどうにでもなる。だが、あの3人はとにかくまずい。

まず第一にその実力だ。

万が一ラヴィエから辿られて俺に辿り着いた場合、こちらが不意を突かれる可能性がある。もしも不意を突かれてもしたら、何の抵抗もできずに逮捕される未来しか思い浮かばない。

次のその人脈。

集めた情報には聖王教会のカリム・グラシアと繋がりがあるという。カリム・グラシア、彼女自身は問題ない。彼女はその能力と立場上、直接誰かと戦うということはない。ただ問題なのはその義弟と側近であるヴェロツサ・アコースとシャツハ・ヌエラの二人だ。

ヴェロツサ・アコース。

その身に宿す稀少技能^{レアスキル}である無限の猟犬《ウンエントリヒ・ヤークト》を用いて、本局査察部所属の査察官になっている。

こいつの能力は無限の名に相応しく、無数に猟犬を生み出し従える能力だ。厄介なのはその猟犬が高度なステルス能力や探查能力を有していることだ。

これに追いかけられたら、どこまでも追いかけてくる。

そしてシャツハ・ヌエラ。

こいつはヴェロツサ・アコースと違い、特殊な能力はないが純粋に基礎能力が高い。

おまけに移動系魔法に高い素養を持つらしく、その移動速度で追われたら逃げられない可能性がある。

聖王教会だけでもこれだけ厄介なのが出てくる可能性に、俺は本当に頭が痛くなってきた。

(おまけにあいつらは、かの有名な三提督とも親交があるらしいって噂も聞いたこともある。……ああく、本気で詰むぞ)

どうしたものかと悩んでいると、最悪のタイミングでフェイト・T・ハラオウンと目が合った。

目が合った瞬間、俺は顔を顰め、フェイトは驚愕に目を見開いた。

「ラヴィエ……逃げるぞ」

「……う？」(こくり)

ラヴィエの耳元で小声でそう呟くと、状況を理解していないラヴィエは不思議そうな表情のままだったが、俺の指示に従い頷いた。

それを確認した俺は目立たないように、それでいて迅速に会場を後にした。

・
・
・

「はあく、まあ……無理だよな」

建物の外に出ると、そこには最近妙に縁のある人物たちが立ち並んでいた。

シグナム、ヴィータ、それと初めて見る守護騎士の二人。確か記憶にある機動六課関係者資料に記載されていたシャマルとザフィーラだった気がする。

そしておまけに機動六課に配属されている新人たちだ。

機動六課における直接戦力が勢揃いだ。

「……お祓いやった方がいいかな？」

ここ最近のあまりの運の悪さに、お祓いなどという非科学的なことを本気で検討しなくなった。

「おとなしく捕まれば、お祓いでもなんでもしたるよ」

そして俺を追って会場から出てきたはやて、なのは、フェイトの3人も追い付いてきた。

前方に守護騎士、後方に例の3人組。

今回ばかりは完全に詰んだ。

「今日本当にオフなんだけどな……」

俺は愚痴と言いつつ訳を混ぜ合わせ、そう口にした。

「いくらオフでも、犯した罪はなくなりません」

その独り言のような愚痴に、フェイトが律儀に口を挟んでくる。

「ですよね〜」

苦し紛れの言い訳が通用するわけもなく、俺は両手を上にあげ、素直に降参の意を表明する。たが頭では何とか逃げる算段を考える。

転移系の古代遺物は、この至近距離では発動よりも後ろのフェイトの方が速いため却下。

戦闘によつてこの場を切る抜けるのは、ラヴィエに魔法を使用させることができないため却下。

助けを呼ぶは、呼ぶ相手がいないため却下。

次々とこの状況を打開するための案が脳裏をよぎるが、その全てが現状では不可能だった。

「下手に抵抗せえへんかったら、危害は加えんよ。それと、こっちの質問にいくつか答えてもらえるやろか」

「はいはい」

好都合だ。

このまま少しでも時間稼ぎができれば、その分考える時間も増える。

今は何の策も浮かばないが、何かの拍子に状況が変わることを期待し、俺ははやての質問に答えることにした。

「まずは、そのラヴィエちゃんって娘や。家のラインとお友達になった娘を疑うんは嫌やけど、この間シグナム達と戦った白い女は、そのラヴィエちゃんやな？」

「……ん」（こくり）

はやての問いかけにラヴィエが頷く。

「正解。ラヴィエは、とある施設でプロジェクトFの技術で造られたクローン体だ。まあ、問題がある個体だったせいで廃棄処分されそうなどころを、俺が拾った。それで実験体として俺が参加していたプロジェクトMの技術を使って誕生した存在だ。あ、こいつはつい最近生まれたばかりで、物事の善悪も判ってないから、その辺は考慮してく

れよ?」

スカリエツティから受け取ったこと、ラヴィエの素体が聖王オリヴィエであること。

プロジェクトMによって生み出された「M」の存在など、本当に重要なことは伏せながら当たり障りのない情報を渡していく。

今の状況で下手に嘘をついてボロを出してしまうと、相手に見切りをつけられ次の瞬間には拘束され護送されてしまう可能性がある。

それを避けるためにも、できるだけ相手にとって興味深い内容を話す。

人間誰しも自分が優位に立つと、知りたいことはできるだけ早く知りたいという欲求が出るものだ。そこをうまくつけば時間が稼げるはずだ。

「プロジェクトF」

そして俺の予想通り、プロジェクトFという言葉にフェイトとなのはが反応した。ついでに新人の少年も反応していたが、こちらは予想外だ。おそらくあの少年もプロジェクトFの遺児なのだろう。

「フェイトちゃん、エリオ君」

「大丈夫だよ、なのは」

「はい、大丈夫です」

プロジェクトFにいい思い入れなどないのだろう。フェイトは何かを思い出したのか表情には哀しみが、もう一人の少年の表情には暗い色が見え隠れする。

俺もよく知る実験体が、自分がどういった存在なのかを知った時の表情だ。

「……少年」

本来は特に語ることもないが、エリオという少年を見ると、ふとまだ実験施設に居た頃のこと、そして実験^元体^妹たちのことを思い出し、気が付くと声をかけていた。

典型的な魔が差したというやつだ。

「え」

エリオの方もまさか俺に声を掛けられるとは思っても見なかった

のか、驚きと困惑が入り混じった表情を浮かべている。

「実験体の先輩としてのアドバイスだ。自然に生まれた生命も、人工的に造られた生命も何も変わらないぞ。お腹が空けば飯を食う。眠ければ寝る。誰かを愛する。喜びを感じ、怒り、哀しみ、楽しさを学ぶ。……俺が見てきた中で普通の生命も、人工的な生命も同じだ。違いないなんてなかった。お前が悩んでることは人との違いだろうが、そんなもの実験体が気にしているほど、周りは気にしてなかったぞ」

かつて俺自身が悩んだ経験とそれを乗り越えた時に感じた答えを告げる。

「……」

犯罪者である俺の口から出た言葉が、あまりにも意外だったのか誰も声を発していなかった。

「……………ありがとうございます」

エリオがそれだけ言って頭を下げた。

本来なら管理局の職員が犯罪者に頭を下げるなど止めるべきことだが、上司であるはやてからは止める気配が伝わってこなかった。

「さてと、それで？ ほかに聞きたいことは？」

自分で作ったシリアスモードに耐えられなくなった俺は、おどけながらはやてにそう聞いたのだ。

「まだまだあるぞ。まあ、話しは所で聞かせてもらおうか。あ、かつ井はでえへんよ」

「かつ井ってなんだ？ ほら、ラヴィエ行くぞ」

ガチャリという音と共に俺は両手に手錠をはめられた。

一応俺の言葉を考慮してくれたのか、ラヴィエには手錠は掛けられず、代わりに両手をなのはとフェイトという二大エースと繋ぐことになっていた。ついでに友達になったというリインフォースIIがラヴィエの頭に乗っておしやべりをしている。

その姿はともではないが逮捕されているようには見えない。

おそらく機動六課の面々にしてもラヴィエに関しては、逮捕というよりも保護という考えなのだろう。

「やれやれ、本当に最悪の再会だよ」

俺は手錠の重さを感じながら、機動六課の面々に連れられて会場の控室へと導かれた。

情報提供

オークション会場の一室、そこは現在幾重にも結界が張られ、中から出ることはもちろん外から入ることもできない牢獄と化していた。その牢獄は俺が逃げないようにするために、転移系統の魔法、能力を重点的に封印する仕様となっている。さすがの俺も、これではおいそれと脱出することができない。

おまけにラヴィエは俺とは違う部屋に連れて行かれてしまった。念のために左目とラヴィエに持たせている盗聴器から向こうの様子を確認してみた。

「……なんで玉子サンド?」

本来取り調べには不要なはずの玉子サンドが、大皿の上に所狭しと乗せられてラヴィエの前のテーブルの上に置かれていた。

「……」(もごもご)

「ラヴィエちゃん、おいしいですか?」

ラヴィエは呑気に目の前に置かれたその玉子サンドを頬張り、その様子を嬉しそうに管理局のラインフォースⅡが眺めている。

そんな場違いな光景に思わずそう呟いてしまった。

「……アイスの次」

「ラヴィエちゃんはアイスが好きなんですか?」

「……」(ぶんぶん)

ラインフォースⅡの質問に、ラヴィエにしては珍しい激しい頭の上下運動で、同意の意を示している。何も知らない者が見れば、それは非常に和やかな光景だ。

この光景を見る限り、ラヴィエは安全なようだ。

まあ、そもそも機動六課の連中がラヴィエに何かするとは思えない。機動六課に関わるようになって、連中の経歴を調べたから分かる。ここの連中はとんでもなく優秀ではあるが、どうしようもないお人好しの集団だ。

そんな集団が子供に何かするとは思っていない。

「さて、それで? 俺に何が聞きたいんだ? 答えられる範囲なら、な

んでも答えるぞ」

ラヴィエの安全を確認した俺は、目の前にいるはやて、なのは、フェイトに視線を向ける。

「えらい協力的やな。普通こういうんは、嫌がるもんやのに」

はやてが俺の協力的な姿勢に、意外そうな視線を向けてくる。

それはそうだ。

ついさっきまで敵対していた人間がいきなり協力的になったら、誰だって裏がないかを疑うだろう。

「まあ、捕まったからしかたない」

俺はそう言つて肩をすくめた。

これは単純に俺が自分の中で定めているルールだ。

- 一つ、殺しはしない。
- 二つ、制御不能な古代遺物は封印する。
- 三つ、無理はしない。

俺は自分でこの道に入った時に、この三つのルールを自分に課した。別に深い理由があるわけではない。単純に

実験^兄体^妹達とそういう約束をしただけだ。だがそんな事情を知るわけもない管理^は局^や員^てたちは、いまいち信用できないといった表情だ。

それに何より俺は無理はしないが、逃げ出すことを諦めてはいない。そのためには時間が必要だから質問にも素直に答えると言つたにすぎない。

素直に質問に答えておけば、凶悪犯や殺人犯のように問答無用で船や監獄に連行される可能性は低い。特に今のような突発な事態ではなおさらだ。

「なんや調子狂うなあ」

「にやはは、なんだか普段逮捕してる犯罪^人者^{たち}と違うね」

「うん。抵抗もしなかったしね」

はやて、なのは、フェイトの順で苦笑しながら感想を述べていく。

「まあ、この状況で逃げられるような能力もないしな」

「この間はラヴィエちゃん、やったか？ 大人の姿になってシグナム達と戦つとつたやん」

当然の疑問である。だが現状で、ラヴィエは「M」の融合を促進するために、あらゆるスキルと魔法の使用に制限を掛けてしまっている状態だ。

この状態では例え古代遺物の仮面をつけて、大人に成長したとしても戦うのは無理だろう。

それに、そもそも今はラヴィエの体調のためにも戦わせるどころか、魔法を使わせる気も俺にはない。

「まあ、そこはちよつと調子が悪くてな。しばらくは体調を考慮して魔法も使わせないようにしてるんだよ」

「そういえば映像で血吐はいとつたけど、大丈夫なん？」

「問題ない。ただ念のため魔法は使わせないようにしてくれ」

「ええよ、ライン達にも伝えとくな」

俺のお願いをはやては快く了承してくれた。

……やはりこういうところはお人好しだ。

「さて、それで？ まずは何について聞きたいんだ？」

ラヴィエに関してでも心配がなくなったことで、俺はさつそく本題に入ることにした。

「予想はついとると思うけど、私が聞きたいんはスカリエツテイのことや」

「まあ、そうだろうな」

予想通りの質問だ。

「さつき俺から回収した端末があるだろ？ ちよつとそれ持ってきてくれ。ああ、別に逃げるつもりはないぞ。あの端末に情報が入ってるから、それをやるよ」

「……私が言うんもなんやけど、そんなにあつさりと情報を渡してええん？」

あまりにもあつさりと俺が言っただけだと、はやてが何とも言えない表情をしていた。

「ん？ いいよ。あの変態野郎は一応客だけど、それ以上に嫌いだからな。それに、先に俺の情報を管理局に流したのはあいつだ。ならやり返したって文句はないだろ」

俺は一切悪びれることなく言い切った。

そして手渡された自分の端末の電源を2回押して立ち上げると、スカリエツティの情報を次々とはやてに渡していく。

まずはあいつが使っているアジトの情報。とはいえ、あの変態のことだ。俺が捕まったことを何かしらの手段で知って、すでに引き払っているだろう。

次に研究成果であるナンバーズの情報。これはちよつと迷ったが、結局渡すことにした。特にクアットロの情報はかなり詳細まで渡す。

あいつ嫌いだし。

「今あるのはこんなところか」

「……えらい気前がええな」

予想以上の情報にはやての方があつげにとられている。

まあ、いきなりアジトの情報や、保有戦力の詳細な情報を「はいどうぞ」と渡されても信じるのは難しいだろう。

「あく、言っておくけど、あいつ逃げ足速いから、多分アジトに関しては無駄足になるぞ」

一応あとで騙したと言われるのは嫌なので、アジトに関してはそう付け加えておく。

「そのくらいは私も承知や」

今まで散々尻尾を掴めずにいた相手のことだ。その辺は管理局も重々承知しているようだ。

「まあ、目ぼしい情報はこんな物かな？　あとは聞きたいことは？」

「次はレリックについてや」

ある意味当然の質問が来た。ただこの質問には俺も困った。

「ん〜、なんていえばいいのかな？」

レリックの機能。単純に言ってしまうと、あれは超高エネルギー結晶体だ。

それ単体では外部から大きな魔力を受けると誘爆するだけの代物だ。

そう説明しても目の前のはやては納得した様子 wasn't.

「そのくらいは管理局もしつとるんよ。私が知りたいんは、なんのレ

リックをスカリエツティが探しとるかや」

「はやてはそう断言する。」

スカリエツティがただリックを探しているのではなく、何らかの特別なリックを探していると感づいているようだ。

「……王の印」

そこまで知っているならと、俺は情報を開示することにした。

「王の印?」

「ああ。こつからは俺も確証がないから、推測混じりだぞ? レリッククつていうのは、古代ベルカ王朝時代から存在する。そのほとんどはさつきも言ったように、単純に超高エネルギー結晶体でしかない。ただ、古い文献にはリックの中に王の印と呼ばれる特別なリックが存在するとある」

おそらくリックがこれだけ大量に造られた理由は、その王の印を隠すためではないかと俺は考えている。木を隠すなら森の中というように、大量のリックに紛れた王の印は外見だけでは見分けがつかないようになっていいるはずだ。

そしておそらく王の印とは、古代ベルカ王朝の王の一人である聖王ゆかりの物だろう。

それならスカリエツティが俺に依頼してきた件も納得がいく。

「……」

その説明を聞いたはやては苦虫を噛み潰したような表情をしていた。想像以上にスカリエツティが行おうとしていることが大きかったのだろう。

「まあ、俺が答えられるのはこのくらいだな。あとはサービスとして、管理局の内部にも気をつけろよ?」

「……サービス? どうゆうことや?」

はやては俺のの言葉の真意を推し量ることができずに聞き返してくる。だが、残念なことに時間切れだ。

ピーピー

はやての持つ端末へ連絡が入ってきた。

「はい……っな?! なんだ!」

はやてが驚きと怒りをなймаぜにしたような表情で端末に怒鳴る。
俺はその様子を見ながら帰り支度を始めた。

「残念だったな。八神はやて」

そう言っではやての肩を叩きながら俺は堂々と監禁部屋を後にした。

・
・
・

「ラヴィエ。帰るぞ」

俺は監禁部屋から出た後、ラヴィエを迎えに来た。

「なっ！　なんでてめえが!?　てめえ、はやてはどうした!？」

部屋に入ると赤いチビこと八神ヴィータがこちらを睨み付けてきた。

ついでに部屋にいた他の連中も臨戦態勢に入っている。

「何もしてねえよ。単純に俺とラヴィエの釈放命令が上から来ただけだ」

俺は事もなげにそう告げる。

そのことに全員が驚愕の表情を浮かべていた。いや、ラヴィエだけは良くわかっていないようで、貰ったアイスを幸せそうに食べている。

「てめえ！　冗談も大概に……」

「ヴィータ……」

今にも襲いかかってきそうなヴィータを後からやって来たはやてが制した。

「この男が言ってるんは本当のことや」

はやてはそれだけ言っで力なく首を振った。

「だから言っつたろ？　気をつけろってな」

なぜ俺がわざわざ情報をペらペらと喋っていたのか。

理由は単純だ。さっき端末を受け取った時、俺は電源を2回押し
た。あれはとある大物に救難信号を送る合図だったのだ。

俺はこれまでにかなりのロストログアを闇に流しているし、依頼で

遺跡を荒らすこともある。

そうなつてくると、自然とお偉いさんとも繋がりができる。

そしてそういったお偉いさんは、俺が捕まってしまうと困ることが沢山あるため、こうした事態に救助を要請すれば、管理局に圧力をかけてくれるのだ。

これが現行犯や捕まった後に管理局の施設や船に入れられてしまえば難しいが、それ以外の場合なら誤認逮捕という名目で俺の身分をでっち上げてくれる。

「まあ、そういうわけだ。いい社会勉強になつたろ？ 世の中綺麗ごとじゃ回らないんだ。あ、たださっきの情報は本当だから、あの変態を捕まえるなら急いだ方がいいぞ？」

俺はそれだけ言い残すと、ラヴィエを連れてオークション会場を後にした。

襲撃と逃走

ラヴィエを連れて八神はやてから解放された俺は、そのままオークション会場へと向かった。

本来なら管理局のエースが固まって行動している場所から、すぐにも離れたいところだがここですぐに行動を起こして追跡されでもしたら余計に面倒なことになってしまう。

だから俺はこのオークションが終わるまで会場に居て、オークションが終了して帰る客に紛れて行方をくらませることにした。

「ふああ、ねみい」

「……………」

ただ興味のない物の説明を延々と聞かされ続けているは、さすがに眠くなってくる。隣ではラヴィエがすでに寝息を立てている。

そんな様子を見ていたら、俺も眠ってしまったい衝動に駆られる。だが、俺はどんなに眠くても眠ることができないでいた。

なぜなら、同じ会場内の二階席、丁度会場が一望できる席に八神はやて率いる管理局の面々がいるからだ。

(さすがに、これじゃあ眠れないな)

俺は溜息をつきながらオークションに掛けられる品々を眺めるふりをして、会場内にいる客を観察し始めた。

(…………居ないな)

客層を確認し、目当ての人物たちが居ないこと確認した。

探していたのは俺と同じ、裏の客層だ。基本的に顔を秘匿する連中がほとんどだが、中には捕まらない自信からか堂々と素顔を晒したまま表のオークションに参加する奴もいる。ただ今回はそういった奴らも見当たらない。

(管理局がいるから…………いや、ないな)

管理局の局員が居るから来ていないのかと一瞬考えたが、ああいった奴らは自己顕示欲が強い。

管理局の中でも有名な連中が来ていると知っていれば、むしろ喜んで参加して無意味に挑発しているところだろう。

(そう考えると、居ないのはいいいことだな)

ただでさえ面倒な状況を、さらに面倒にされては堪ったものではない。

(はあ、それにしても暇だ。この調子だと、今回は裏に顔を出してる暇もないな)

完全に骨折り損の草臥れ儲けとなつてしまった。

「……ん」

「ん？ 起きたかのか。……どうした？」

先ほどまで寝息を立てていたラヴィエがいつの間にか目を覚まして、俺のスーツの袖をクイクイと引つ張っていた。

「……来る」

「来る？ 何が……」

ラヴィエがそう警告を発した次の瞬間、俺もそれを感じた。

(これは……召喚。それにこの魔力は、確か……)

会場から少し離れた場所で、誰かが何かを召喚しているのを察知した。そしてその召喚を行っている者の魔力には身に覚えがあった。

あの変態科学者の元にいた召喚士の少女の物だ。

この状況に、俺は今日のイレギュラーな事態を思い出した。

裏のオークションの受付の時に接触してきた暗部、そいつが言っていたジェイル・スカリエツィがこのオークションを狙っているという情報。

(あの変態、マジでやりやがった)

表には表のルールがあるように、裏には裏のルールがある。

そして今回の襲撃は、完全にルール違反だ。こんなことをしたら、ジェイル・スカリエツィは裏で完全に敵認定される。そうなれば取引はおろか、何らかの研究で協力者が欲しくなっても協力すらしてもらえなくなる。

(あいつは変態だが、そんな簡単な計算ができないはずがない。なのに、なんで……)

今までの付き合いで知った、スカリエツィの人物像とあまりにもかけ離れた行動に、俺は眉を顰めて理由を探ろうと思っていた。

「……ん、近い」

そんな俺にラヴィエがまた警告を発する。

その声に気配がさつきよりも近くなっていることを察し、俺は思考を中断し席を立った。

「……そうだな。考えても情報が少なすぎる。ここは騒ぎに乗じて逃げるか。行くぞ、ラヴィエ」

「ん」

俺はラヴィエを連れて静かに会場を後にした。

・
・
・

「つて、そう簡単にはいかないよなあ」

会場を後にした俺達だったが、そこはさすがにすんなりとは帰らせ
てくれるはずがなかった。

「デメエ、やっぱり」

建物から出た瞬間、丁度目の前に赤い少女が下りてきてこちらを睨
んできた。

(まじか……)

眩暈がしそうになった。

管理局機動六課所属、八神はやて率いるヴォルケンリッターの一
人、鉄槌の騎士ヴィータがそこにいた。

何がやっぱりなのかは知らないが、完全に敵認定されているのは確
実だ。

「んっ！」

おまけに前回の戦闘のせい、ラヴィエがヴィータを確認した瞬間
に戦闘態勢に入ってしまった、一瞬触発の空気だ。

(つて、ラヴィエ。お前は戦っちゃダメって言っただろ)

一瞬で出来上がったこの、ちよつとした刺激で今すぐにでも戦闘に
入りそうな空気に俺は動けなくなってしまうていた。とはいえ、何時
までもこのままとはいかない。

(頼むから戦闘だけは勘弁してくれ)

そう祈りながら、意を決して話しかけた。

「あく、八神ヴィータ。お前が何を勘違いしているか知らないが、俺は、俺たちは無関係だ」

「何言ってやがる。この状況で関係ないわけねえだろ！」

八神ヴィータが睨みながら、こちらの言い分を両断してくる。

(……まあ、だよな)

俺も相手の立場なら、そう断言するだろう。

スカリエツティを追っている中で出会った犯罪者。

さらについてこの間戦闘を繰り返して、今日も機動六課が警護している中に表れ、今スカリエツティによつて襲撃を受けている建物から誰よりも先に逃げようとしている。

これだけ状況証拠が揃ってしまうと、本当に無関係であつても誰も信じないだろう。

(あの変態、次会ったら……次?)

状況としては切羽詰まっているはずなのに、俺は唐突に先ほどの答えの片鱗を感じた。

「……そうか。あの変態……次なんだ」

気が付いた時には思わず眩きが漏れていた。

「次? 何言ってやがる」

「……?」

俺の唐突な眩きに、八神ヴィータは警戒を緩めず問い返し、ラヴィエは不思議そうに首を傾げている。

「ヴィータ副隊長!」

そんなとき八神ヴィータの後方から、見慣れない少女二人が駆けてきた。二人の装備と八神ヴィータを副隊長と呼んだことから、同じ機動六課の部下であることは容易に想像できた。

「《氷柱》」

俺は躊躇いなく氷の杭をその少女たちに向けて放った。

八神ヴィータが常に意識をこちらに向けていられる状態なら、彼女は俺の行動と同時に動いただろう。だが、そこに新たに意識を向ける対象が現れたせいで俺の動きに反応が一瞬遅れた。

「なっ!? 防げ!」《氷霧》

二人の少女に向けて放たれた氷の杭に視線を向け、八神ヴィータは全力で指示を飛ばした。

「きやあ!!」

「うわっ!」

咄嗟の指示に二人は俺の放った《氷柱》を防ぐことはできたが、俺にとつては八神ヴィータの意識が逸れただけで十分だった。

「この霧は……くそっ!」

見覚えのある霧に八神ヴィータが悪態をつく。

『さて、俺たちはこれで帰らせてもらう』

周囲に展開された氷の霧によって、俺とラヴィエの姿は捉えられない状態となったことで、俺はようやく帰ることができるようになった。

「え、え?」

「くっ! この!」

青髪の少女はまだ混乱しているようで、周囲を見回しているが、オレンジ髪の少女は自分たちの失態に気が付いたのか、挽回しようと銃型のデバイスを構え魔法を放とうとしていた。

「ティアナ、やめろ」

それを八神ヴィータが制止する。

『おいおい、ここで無暗に魔法なんか使うと会場にあたるぞ?』

俺の霧の中では感覚が狂う。そんな状態で魔法を放ったら、どこに行くか分かったものじゃない。

『あ、そうだ。捕まるのは勘弁だが、あの変態には仕返ししたいから少し情報をプレゼントしておくか』

転移の準備を始めた俺は、先ほど思い至ったスカリエツティの計画について、機動六課にプレゼントすることにした。

あの変態のせいでひどい目にあっただから、これくらいの仕返しはいいだろう。

『あの変態、ここ最近行動に勢いがある。いや、有り過ぎる。あの変態は、変態だが馬鹿じゃない。そんな勢いで動けば、周囲との関係が拗

れるなんて簡単に想像できる。それなのに行動するってことは、止まる必要がなくなっただけのことだろう。多分、あの変態の計画は次の段階に進むぞ。せいぜい気を付けろ』

俺はそれだけ言うと、ラヴィエを連れて転移した。

逃走その後

管理局とのコネまで使って釈放されたのに、結局戦闘が発生してしまつたことに不満を抱きながらも俺はラヴィエを連れて無事にアジトまで辿り着いた。

「あー疲れた」

俺は着替えもしないでそのまま近くのソファアークにダイブする。

裏のオークションも見れず、さらに転移結晶まで使用する羽目になり完全の赤字だ。大赤字。

経済的には赤色なのに気分は完全に青色だ。^{ブルー}二重の意味で辛い。

「……楽しかった」

ただそんな俺の心境に反して、ラヴィエはそう口にした。首だけ動かしてラヴィエの方を見ると、無表情ながらも確かに楽しそうな雰囲気伺える。

「そうか」

赤字ではあったが元々はラヴィエの気分転換も兼ねていたお出掛けだ。そのラヴィエが楽しいと言うのなら、高くは付いたが気分の青色は幾らか晴れた。とはいえ、考えなくてはいけない事も多く発生してしまつた。

まずはラヴィエが友達と言っている融合機。確か資料にはリインフォースIIと記されていたはずだ。

「えつと確かこのデータだったはず」

俺は起き上がってソファアークに座り直し端末を操作してデータを探す。目当てのデータはすぐに見つかった。

「……友達」

操作している端末に表示された映像を見てラヴィエがそう呟く。

そこにはリインフォースIIのホログラムと管理局に登録されているデータが表示されている。

ラヴィエの呟きに俺は苦笑しながらデータを確認していく。

「作成されたのは闇の書事件以降。役割としては消滅した闇の書の管制人格の代わりか。八神はやて専用に調整されてるから基本的に赤

の他人とのユニゾンは不可。元となったプログラムと同じヴォルケ
ンリッターとのユニゾンは可能」

データを確認しながら内容を声に出して読み上げ、頭の中で情報の
整理と危険度についてを考察していく。

まず単純に性能としてはかなり高い。基礎の部分に闇の書の欠片
と八神はやてのリンカーコアを使用しているのである意味当然とな
る。

誕生してからの年数は短いの上に、あくまでも八神はやて補助な
で目立った実績などは特に無い。ただ言い換えるところらが能力を
推測するだけの情報もない事になる。

経験がない事を吉とするか、情報がない事を凶とするか悩みどころ
だ。とりあえずは今手元にある情報を整理していくと気になる部分
があった。

「融合機である事自体が秘匿されてるのか。となると八神はやてとユ
ニゾンした場合、管理局が隠したいと考える程の能力が発揮されるの
か？」

俺はいくつかの可能性を検討し始めた。

まず最悪なのは、猛威を奮っていた闇の書の能力をそのまま使用で
きる場合。リンカーコアを強制的に収集し、更に扱える魔法を無限に
増やしていける。恐ろしいほどの脅威だ。

ただこの可能性は限りなくゼロに近い。もし万が一そんな能力な
ら管理局が使用を許可しないだろう。

次の可能性は、闇の書が過去に収集した魔法を全て扱える場合。こ
の場合には収集機能が無いだけで、長い年月で収集した魔法があるから
最初の可能性と脅威度は変わらない。

ただこれも可能性は高くない。過去に起きた闇の書の事件でも、主
がリセットされると前の主の時に収集した魔法もリセットされ魔法
を持ち越した記録は存在しないためだ。

次の可能性は、闇の書の前身となった旅する魔導書に戻っている可
能性。この場合は魔法を記録する事が主目的となるため直接的な
脅威は低いが、俺の魔法を記録され解析されると後々のかなり面倒な

事になる

そして残念な事にこの可能性は比較的高い。

そして一番あり得そうな可能性は、八神はやてが所有者になってから収集された魔法を自由に扱える。これは2番目の可能性に近く十分な脅威だ。

ただ八神はやてがリンカーコアの収集を行っていた期間はそこまで長くない上に、管理局の記録を漁れば被害者を調べる事は可能で、そこから収集した魔法の予測と対策は考えられる。それでも十分な脅威だ。

「……専用の融合機を秘匿しているって時点で2番目の可能性が高いか？ いや、でも流石に過去の魔法を全部はないだろう。そもそもそんな危険物の使用を許可するとは思えない。やっぱり現実的なのは3番目と4番目だな」

どちらにしても恐ろしい能力なので気が滅入りそうだ。

「……ん？」

そんな事を考えていると、ふと違和感の様なものを覚えた。

「……おかしい。いくら何でも一部隊にここまで戦力が集中するわけがない」

俺は手元にある機動六課の構成と個人の能力情報を掻き集め、時系列と部隊編成そして個人能力を順に並べていった。

そして時系列に大規模な事件や事故についての情報を追加していく。

「何だこれ？」

「……何？」

俺が首を傾げていると、ラヴィエも興味を持ったのか真似して並べた情報に顔を向ける。

頭の整理も兼ねて俺はラヴィエに自分の考えを説明していく。

「ラヴィエ、例えばだ。例えば50の強さを持った敵が20体いるとする」

「……ん」

「それに対してこちらは100の強さを持った味方が5体、それと1

0と20の強さの味方が10体いるとしよう。敵は20体バラバラに動くから何処にいるかは分からないし、強さが50以下の味方は敵に会うと負ける。そんな時、味方をどう配置したらいいと思う?」

「……味方の強さは個別? 合計?」

「合計でいい」

「……ん、10と20の強さの味方を合計50になる様に分ける。100の味方はバラバラにする」

ラヴィエの一般的な解答は正しい。俺でも普通はそうする。

この考えの中で敵は俺たちのような犯罪者で、味方は管理局員だ。そして今100と仮定しているのは機動六課の隊長陣。

普通はこんな戦力は分散させて管理局全体としての能力アップを図るはず。

例外としては大きな事件や事故があり、それに何らかの組織の関与が疑われた場合は能力の集中が考えられる。だが機動六課設立前にそんな話は聞いた事がない。そして設立後のやっている任務はレリック回収やスカリエツィの追跡、後は新人の教導だ。おまけに部隊を作るにあたって隊長格のはりミッターまで付ける始末。

コストとパフォーマンスの釣り合いが全く取れていない。

「……? それってダメなの?」

「ダメでは無いけど普通はやらないな。コストもかかるし周りからやっかみもある。特に管理局は海と陸で仲が悪い。それなのに海を代表するような面々が後見を務めてこんな部隊を作ったら、色々問題が起きてもおかしく無い。それを強行するなら何らかの事情があるんだろう」

「……事情って?」

ラヴィエの当然の質問に俺はため息と共に答える。

「それがわかったら苦労はないんだよなあ」

結局は何も分からないという事だ。

それでも何かやばい事が起こる前兆のような気がする。

俺はそんな嫌な予感を感じながらも、今日はこれ以上考えるのも面倒になってきた。

「やめだやめ。ただでさえ予定外も戦闘で疲れてるのに、こんな事まで考えてられるか。これ以上悩んでたら絶対ハゲるぞ、俺」

「……イオリ、ハゲ？」

「断じて違う！　今もこれからもそんな予定はございません！」

あんまりな言葉に俺は語気を強めて否定する。ラヴィエの事だから、ここでしつかり否定しておかないと、誰かと話している時にそんな事を言いかねない気がする。

ここはしつかりと否定するしかない。

「いいかラヴィエ。ハゲって言葉は人に言っちゃいけない言葉だ。分かったか？」

「……ん」

無表情のままいつもと同じ返事が返ってくる。

凄く不安になる返事だが、これ以上は不毛な気がした俺は早々に話を切り上げる事にした。

「さて今日はもう疲れたし、とつとと休むか。それともラヴィエは何かしたい事があるか？」

「……ん、アイス」

それだけ言ってラヴィエはキッチンへと向かっていった。

「何ていうか随分マイペースになったな」

個性を獲得してきたラヴィエを見て俺はそんな事を呟きながら自分の部屋に戻って休む事にした。

機動六課のついて

「さて少し本腰を入れて調べるか」

色々な出来事があつて濃密な一日となった昨日は流石に疲れて寝てしまったが、俺は昨日気が付いた情報の整理と調査に本腰をいれる事にした。

寝て頭がスッキリした状態で改めて考えると、今回の件は異常過ぎで無視するにはリスクが大きすぎる。そんなわけで俺は今、機動六課の設立に件で直接的或いは間接的な関係が有る組織や人物に加え、機動六課に所属しているメンバーが個人的に関わっている人物や組織に至るまでデータを並べていた。

「うえ……、分かつてはいたけど多すぎだ」

予想していたとはいえ膨大なデータ量を見て思わず呻き声が出てしまった。

「とりあえず今回の組織編成の主要人物をピックアップして……それから関係がありそうなところを片っ端から調べるか」

絶対に外せない人物をピックアップする事にした。

まずは3人の後見人の一人であるリンディ・ハラオウン。

「データベースだと現役時代は魔導師ランクは総合A A+で最後衛の補助型。多分結界魔導師かな？ 夫が闇の書事件で故人。管理局内ではかなり顔が広いのか」

軽く人間関係を洗っていくつもりが、そこに表示されているのは錚々たる面子だ。

かの伝説の三提督を筆頭に、友人としてレティ・ロウラン提督など管理局でも人望と能力が高い人物の名前がどんどん出てくる。

才能があつて人柄が良くて人望も厚い。おまけに美人。はたから見たら完璧な上司だ。

「この人……孫までいるのに全然歳とってねえな」

思わず現実逃避してしまいたくなる。

既に一人目で反則級でお腹いっぱい状態だが、ここで辞めたら昨日と同じなので俺は次の人物の情報を開く。

「次はクロノ・ハラオウンか」

名前の通りリンディ・ハラオウンの息子で、14歳で執務官になっている。この時点で既におかしい気がする。

魔導師ランクは総合AAA+で、25歳の現在は次元航行艦クラウドエアの艦長を務めている。

機動六課設立にあたり色々動いているようで、八神はやてのリミッター解除権限を持っているようだ。

……どれだけ優秀なんだよ。

「なんというか、この親にしてこの子ありだな。なんだよこのエリート親子は。ここまで凄いと人体実験で強化された俺たちの立場が悲しくなるなあ」

今の俺はきつと遠い目をしている。

情報を整理しているだけで精神ダメージを負うなんて初めての経験だ。

「ヤバイな。これ最後まで俺の心は保つか？」

最初の二人で折れかかってしまった俺の心。頑張ってくれ。

「次がカリム・グラシア。管理局少将。……んん？　なんだこれ？　情報が殆ど無い？」

管理局の情報に階級は少将と表示されているが、殆ど最低限のデータしか無い。それなのに機動六課なんていう異常な部隊の後見人を務めている。

俺は首を傾げながらカリム・グラシアについて情報を集め始めた。しばらくしてようやく納得できる理由を見つけられる事ができた。

「ああ、この人聖王教会上層部の騎士か。あそこって結構秘密主義だから情報あんまり無いんだよなあ。えっと、確かこっちの少しあつたはず」

今整理している情報のベースが管理局のものなので、聖王教会所属のカリム・グラシアの情報が殆どなかったのだ。おまけに少し詳しく調査して分かったが、どうにも彼女は名目状少将の地位を与えられているだけで、厳密には管理局の職員とは言い難い扱いとなっている。

「……何びく？」

俺は当たり前の疑問を口にした。

別段他の組織から出向という形で人材が動くのは珍しいことじゃない。ただそういう状況で動く場合は何らかの専門家が殆どだ。この場合考えられるのは聖王関連の何かが見つかり、管理局が聖王教会に協力要請した場合などが考えられるが、それだと態々機動六課の後見人になる必要も無い。

それにカリム・グラシアのデータの秘匿具合を見るに、何らかのレアスキル保持者の可能性が高い。それを聖王教会が異動させるとは考え難い。

「流石に分からないな」

情報が少な過ぎて考察も推測も出来ない。

機動六課設立のタイミングから見てカリム・グラシアが何らかの鍵であると考えられるだけにもどかしい。

「……この際聖王教会に潜入してみるか？ 俺一人だと厳しいが、ラヴィエがいれば可能だろうし……ん？ げっ」

聖王教会への潜入を視野に入れて頭で今後をシミュレーションしている、思わず声が出てしまう嫌な情報が目に入った。

「ヴェロツサ・アコースの義姉!? うっわ、最悪だ」

ヴェロツサ・アコース。

俺が管理局員で嫌いな奴トップ3に入る。レアスキル《無限の猟犬》ウンエントリヒ・ヤークトが兎に角厄介で俺との相性が悪い。

猟犬は数が多い上に探査能力が高い。魔力で生成されるから低コストでその癖普通に硬くて俺の魔法じゃなかなか破壊できないときている。

おまけに猟犬が得た情報を術者に送信出来るらしく、過去に遺跡で猟犬と出会った時など近くの管理局員が集結し始めて転移する羽目になった。かといって数が少ない時に通信妨害した上で破壊してみたら、それでも管理局員が集まり始めた。

推測だが術者と繋がりがあって破壊すると術者にロストした位置が伝わるんだらう。その時も消費型の古代遺物ロストロギアを使わされる羽目になった。

ヴェロツサ・アコースと関わると必ず赤字になる。最悪だ。

「ラヴェエエがいるならそれでも……いや、やっぱりやめよう。そうなるが一番いいのは、聖王縁ゆかりの古代遺物ロストロギアを見つけて、聖王教会の上層部に対価として情報もらう方が安全だな」

次のプランを考えながらとりあえずはカリム・グラシアについてはここまでとした。

「さて後は実働部隊か。この辺は今更だな」

八神はやて筆頭に守護騎士プログラムのヴォルケンリッター。そしてエースオブエースこと高町なのはに、執行官のフェイト・T・ハラウン。

「まあ、この隊長、副隊長に関しては何も無いな。会った逃げの一択。基本詰みだ。この間みたいなきを突くのも次は厳しいだろうしなあ」

正直に言って過剰戦力もいいところだ。大概の犯罪者なら捕まえるのにお釣りが来る戦力だ。

あとは新人で学生時代からコンビ扱いとなっているティアナ・ランスターとスバル・ナカジマ。

「ティアナ・ランスターに関しては……平凡だな。なんか凄い親近感が湧く。相方のスバル・ナカジマは……へえ、詳細は不明だけど何らかの実験体。しかも姉妹揃ってか。何かこのコンビは親近感湧くなあ」

向こうとしては犯罪者から親近感を覚えられても迷惑だろうが、境遇や才能といった点からどうしても親近感を覚えてしまう。

「次がキャロ・ル・ルシエとエリオ・モンディエルか」

竜召喚で有名なアルザス地方少数民族「ル・ルシエ」の名前に少し驚いた。

そしてエリオ・モンディエルに添付されているプロジェクトFの文字に何とも言えない表情になる。

「あの民族がアルザスから出てくるなんて随分珍しいな。あとはエリオ・モンディエルか。なんていうか、隊長格は過剰戦力で下は訳有り多数って感じだな。上にしろ下にしろどう見ても集まり方が異常だ

な」

この情報だけで初見で感想を述べるなら、問題児や訳有りを安全に教導するためとれなくもない。

「いや、やっぱり無理があるか。バックヤードも顔見知りで固めてる。どう見ても何か大きな事件なんか素早く対応するために信頼とかを一番に考えてる布石だ」

でもその大きな事件が全く見えてこない。

「なんだよこの部隊編成。方向性が全く見えない」

改めて情報を整理しても余計に分からない。

専門家を集めた何らかの対策チームでもない。かと言って試験部隊にしては私設と言っていいくらい身内が固まり過ぎてる。

戦力集中を目指しているならリミッターの意味がわからない。

総合して考えると「何が起きてても何とか出来そうな布陣」という曖昧なものになってしまった。

「自分で言ってるアホらしくなってくるな」

やはり考えるにしても鍵が足りない。

「仕方ない。ラヴィエが起きたら聖王縁の遺跡を探索しに行くか」

俺は結局昨日と同じ結論。

この部隊が異常という答えまでしかたどり着けず、

コーヒーを入れてラヴィエが起きてくるのを待つことにした。

今後の指針

「……おはよう、イオリ」

《Guten Morgen（おはようございます）》

「お、起きたか。おはよう、ラヴィエ。それとエフアンゲーリウムもしばらく寛いでいるとラヴィエが目を覚ましてきた。挨拶をしながら俺は朝食を用意しテーブルに置いてラヴィエに席に着くように促す。

俺に促されるままに寝惚け眼で席に座りラヴィエはゆっくりと食べ始めた。

「食べながらでいいから聞いてくれ」

「……ん」

ラヴィエが小さい口にパンを頬張りながらこちらを向いて頷く。

「今後の活動指針だが、どうにも嫌な予感がある。その関係でいくつか調べたい事と欲しい情報がある。一つは機動六課という部隊について」

「……きどろっか?」

まだ眠いせいか呂律が回っていない。このまま話しても頭に入らない気もするが、そこはエフアンゲーリウムがいれば問題ないだろうと話を続けることにした。

「あー、昨日のラインフォースⅡ。ラヴィエの友達がいる部隊のことだ」

何て説明しようか迷った末、ラヴィエが一番わかりやすいように俺はそう説明する事にした。ラインフォースⅡの名前が出たことでラヴィエの目がしつかりと覚めたようだ。

「……ん、ラインにまた会う」

「それは出来れば避けたいなあ」

「……ダメ?」

ラヴィエが無表情の顔の中にも悲しそうな雰囲気を含めて尋ねてくる。俺は困った表情で頭を掻きながらどう返事をしようか考える。

（流石にダメとは言いにくいな。でも会わせると俺が一緒だと俺は捕まるし、ラヴィエは捕まらないにしても保護は確実。保護ならいいけど、変なところから横槍が来ると実験体にされかねないし。うーん）

機動六課の面々に関してはラヴィエ個人が会いに行けば、意外とすんなりリインフォースⅡに会わせてくれる気がする。最悪でも保護されるだけだろう。経歴や情報にある人柄を信じる限り、その予想はほぼ確実だと思う。だが管理局と秘密裏に取引してる身としては、あの組織の裏というか闇を嫌というほど知っている。

彼女達がラヴィエを保護したとしても、何処かで情報が漏れ確実に横槍が飛んでくる。それは避けたい。かといってラヴィエにダメとも言い難い。

「……ダメ？」

ラヴィエが再度質問してくる。

「う、うーん、ちょっと色々準備したら可能。かなあ？」

考えた末に俺が出した答えがコレだった。

兄妹としては末っ子のお願いを聞いてやりたい。俺は頭をフル回転させて必要な工程を考える。

まずラヴィエの知識面での教育に《M》の完全調整と戦闘訓練によるラヴィエ自身の戦力向上。万が一戦闘になっても独力で逃走できるくらいが最低ラインだ。

次いで根回し。

管理局の上層部は俺にかなり情報を持っている。先日の機動六課とラヴィエの戦闘の情報から、《M》が完成した事を察している連中もいるはずだ。なのにそれらしい動きや接触の気配がない事から、現状は干渉する気は無いと考えていい。だが確実というわけでもないの、幾つか根回しによる念押しが必要だ。

あとは場所の確保。

何処でいつ会うかも重要になってくる。当然管理局のお膝下であるミッドチルダは論外。出来る限りこちらに有利なフィールドが望ましいが、あからさまな場所だとあちらが罫を警戒して会う事に応じない可能性が高い。

そして最後に土産だ。

ラヴィエがラインフォースⅡに会う間と別れる時、その主人である八神はやてがこちらを見逃す事を渋々ながらも認めるような土産があれば最良。

あれだけの面子を揃えた部隊を率いているからには、それなりに腹芸が出来ないと話にならない。なら他の面子よりは裏取引に応じる可能性は高い……はず。

「よし、考えは纏まった。なんとかいける！ ……気がする」

「……ラインに会える？」

「ああ、多分な。ちよつと大変だし、ラヴィエに協力してもらおう必要もあるけどな」

「……ん、がんばる」

そう言つてラヴィエは残っている朝食を急いで食べ始めた。

朝食を摂り終えた俺は早速目的の世界へ移動するための準備を始めた。

まずは命綱と言つて差し支えがない《転移結晶》。これがないと万が一の場合俺は詰む。

「……コレ何？」

ラヴィエが興味を持ったのか俺が広げていた道具の一つを持って差し出してきた。それは長さが30cm程の杭だ。

「それは《ビーコン》だ。いい機会だし少し説明するか」

収集家と呼ばれるくらい古代遺物ロストロギアを集めている身としては、こうした説明をするのは楽しく、熱が入る。

《ビーコン》は厳密には古代遺物ロストロギアじゃない。《ゲート》と呼ばれる古代遺物の技術を解析して俺が作成した転移用の道具だ」

効果としてはアジトに設置してある《ゲート》に帰還するだけだが、本来は次元航行艦が必要な距離でもある程度の距離なら帰れる。現代の技術で作ったにしてはかなりの性能だと自信を持って言える。

「……便利。でもこの前使わなかった」

「まあ、問題もあるんだ。展開するにも多少時間がかかるし、通った後

も一定時間が過ぎるまで《ゲート》と繋がったままになる。だから近くに誰かがいるとアジトまで乗り込まれる」

一応《ゲート》の所に登録者以外が来ると発動する罠を仕掛けてるけど、安全確認が出来ないと俺には怖くて使えない。だからどうしても緊急時は《転移結晶》になっちゃおう。

「……《ゲート》は？」

「こっちは完全な古代遺物だ。ロストロギア本当は対になるゲートがあつてそこを自由に行き来できるんだけど、俺が見つけたのは片方だけ。今は色んな古代遺物の合わせ技で無理矢理使ってる状態だ」

「……探さない？」

「無理だ。元々超長距離移動を目的にした古代遺物だからこれの近くにはない。そもそも壊れてない保証がない」

一時期は探そうかとも考えたが、元が次元移動のための物。当時の記録もない状態で探すとなれば複数の世界を舐潰しに探すしか方法がない。例えるなら海で拾った二枚貝の片方を、ヒント無しに海から探そうとしている様なものだ。とても現実的ではないと諦めた。

「……こっちから起動は？」

「それも無理。多分セキュリティだと思うが、繋げるためにはどちらかの起動時に出る魔力パターンをもう片方に入力する必要がある。まあ、好きなように繋がられると防犯って意味だと不味いし当然だろうな」

説明されて納得したのかラヴィエも諦めたようだ。

「まあ、ラヴィエならエフアンゲリーウムに補助があれば生身でも次元間移動も出来そうだから、あんまり関係ないけどな」

「……ん、でもおもしろい。あとイオリ楽しそう」

「ははは、実際楽しいからな。ラヴィエも興味を持ってきて嬉しいぞ」

そんなのんびりとした会話をしながら俺は準備を進めていく。

戦闘用や移動用、補助に緊急用。多岐にわたる古代遺物を並べては吟味し、時にはラヴィエが興味を持って説明する。その繰り返しで2時間ほど準備が整った。

「さて準備完了だ。ラヴィエ、出発するぞ」

「……ん」

先程話した《ゲート》の前へ移動する。

「《ウラノス・アイ天の眼》起動。経路の測定を開始」

俺のその言葉で義眼となつている片眼が起動する。

《現世界座標の読み取り……完了》

《目標世界座標の読み取り……完了》

《次元間経路の測定……完了》

普段あまり使う機会のないデバイスから音声が出る。

「《ゲート》の起動。及び《回廊》の接続を開始」

《ゲートの起動を確認》

《回廊の接続を確認。オールクリア》

「次元路展開」

《次元路形成……完了》

先ほどまで向こう側が見えていた《ゲート》に黒い渦が現れた。

「よし、それじゃあラヴィエ出発だ」

「……ん」

開かれた次元路へと俺達は身を投じた。

古代遺跡

「ふう、眩しいな」

《ゲート》の黒い渦、次元路に身を投じ体感で数秒の浮遊感を味わった後、俺達はアジトから一転太陽が降り注ぐ丘の上に立っていた。普段ならいい景色という感想も出るのだろうが、今の俺は徹夜明けのような疲労感があるので、この日差しの強さは正直に言っすぎてきついものがある。

《Unverst•ndlich（不可解です）》

「どうしたんだエファンゲリウム？」

いきなりのエファンゲリウムの言葉に俺の方が不可解な表情を浮かべることになった。

《Dies ist zu weit vom Verst•ck
entfernt（ここはアジトから遠すぎます）》

「ああ、そういうことか」

エファンゲリウムが何を気にしているかが分かった。

現在いる世界は先ほどまでいた俺たちのアジトがある世界からかなり離れた世界だ。普通ここまで離れている場合は次元航行艦やそれに類する物、または専用の転移施設が必要になる。なのに一瞬でそれらを使用することなく移動したことが不思議なのだろう。

「まあ、《ゲート》と他の古代遺物^{ロストログニア}を並列起動した裏技みたいなものだからかなり無理するから俺のただでさえ多くない魔力がごっそり持っていられるけど、次元航行の記録や転移の反応が残らないから見つかり難くて便利だぞ」

《Gro•artig（素晴らしいです）》

デバイスのAIとはいえ素直に褒められるのはむしろ痒い。

「……（ん）は？」

エファンゲリウムの質問に答えると次はラヴィエはここがどこかを訪ねてくる。

「ここは聖王教会が管理してる世界のひとつだ」

「……聖王教会？」

ラヴィエが首を傾げて不思議そうにしている。

「あれ？ 聖王教会そのへんの知識は一般常識としてインストールされてると思うんだけど……ひよつとして抜けてるか？」

まさか《M》のインストール時に不具合でも起きて見逃していたのかと冷や汗が流れる。ただでさえ微妙な調整が必要だったのにミスを見逃していたとしたら大問題だ。

「んーん、ある」

「そ、そうか。それじゃあどうしたんだ？」

ミスしていないことに安堵しながら、それならどうしてラヴィエが首を傾げているのかわからない。

「……ん、聖王は私のオリジナルで人間。でも宗教は神様を崇めるつてある。……不思議」

「ああ、そういうことか」

ラヴィエの中では宗教＝神様となっているのに、人間である聖王オリヴィエを崇めているのが不思議に感じている様だ。

普通の人間なら過去の偉人が成した偉業など普通は出来ないことを成した人を、聖人などの神に類する存在として崇めることに疑問を持たない。ただラヴィエにインストールされた知識は本当に必要最低限のため齟齬が生じてしまった様だ。

「まあそういうわけで、人間っていうのは成した偉業によつては人を崇める事もあるつてわけだ。特に聖王オリヴィエは、戦乱の古代ベルカを自身を犠牲にしてまで戦争を終結させたつてことで信仰されている。まあ、どこまで真実かは謎だがな」

どうせ宗教の事だから、何処かで自分たちの都合のいいようにねじ曲がっているだろうと俺は考えている。

「……ん、私のオリジナルは凄い」

「それでいいと思うぞ。オリジナルっていうより遠い祖先くらいの考えでいいんじゃないか？」

俺自身が造られた存在なのでイマイチ上手く伝えられないので、ラヴィエが納得したのなら訂正も修正もしない。

「さてと大分楽になったし、そろそろ移動するか。ここからなら遺跡

までそう遠くないしな。ただラヴィエは《ヴァイスシュトルツ白の誇り》を展開してくれ。エフアンゲリウムもサポートを頼む。《あ白の誇りれ》には高いステルス能力もあるから、見つからない様にするのに最適だ」

「……ん、エフアンゲリウム」

《Jawohl（了解です）》

ラヴォエがエフアンゲリウムを手に取って掲げると白い光に包まれる。光はラヴィエを中心に渦を無し、その光景はさながら光の繭といったところだ。そして光の繭が砕け散ると白い装束を纏ったラヴォエの姿がそこにある。

「……ん、完了」

「よしそれじゃあ出発だ。見つからない様に注意して行くぞ」

俺が先導する形で遺跡の方へと進み始めた。

しばらく進んでいくと森の中に遺跡の入り口が見えた。

「(ラヴィエ止まれ)」

俺は念話でラヴィエに指示を出す。それと同時に森の草木に隠れながら遺跡の入り口近くに設置されている監視システムに目を向ける。

(型としては4世代前か。確かあのタイプは魔力感知を重視して、顔や網膜認証なんかはなかったはず)

事前の得た情報通りの古いシステムだ。あれなら魔力的な偽装を施すか、高位のステルスがあれば問題なく進める。

「(ラヴィエはステルス状態を最大にして、念のため魔力的にも視覚的にも見えなくなつて付いてきてくれ)」

「(……物質透過はダメ?)」

「(あれは調べてみたら透過してる間、魔力が出てるから今回はダメだ)」

「(……ん、分かった)」

返事をした直後にラヴォエが魔力感知だけでなく視界からも姿を消した。ラヴィエが指示通りの動いたことを確認し、俺の方は腕に嵌めている腕輪に魔力を流して起動する。

「《偽りの腕輪》起動。偽装認識を開始」

普段他人の認識を誤魔化して俺の姿などを自動で認識できなくしている古代遺物^{ロストロギア}《偽りの腕輪》を意図的に操作し、事前に入手していた聖王教会の上層部の一人の魔力パターンに偽装した。

「よし、行くぞ。ラヴィエは2mくらい離れて付いてきてくれ」

「……ん、了解」

姿は見えないがラヴィエからの返事が返ってくる。

準備を整えた俺は物陰から堂々と姿を晒して遺跡の入り口へと進んでいく。

『警告。警告。許可の無い者は即刻退去して下さい。繰り返します。許可の無い者は即刻退去して下さい』

ある程度近くに行くと警告音と共に監視システムの音声が流れ始めた。

「魔力パターンの測定申請」

『申請を受諾。これより魔力パターンの測定を開始します。……測定完了。該当者1名。聖王教会からの許可を確認しました。警報を解除します。ようこそグラウ司祭』

警告の音声が切り替わり、遺跡の入り口ゲートが開く。どうやら問題なく成功したようだ。

「それじゃあお邪魔しますっつと」

俺は開いたゲートから遺跡内部へと入ると無言のまましばらく進んでいく。進みながら監視システムの空白地帯を探していると、空白地帯^そはすぐに見つかった。というよりも監視システムはゲート周辺にしか設置されていないようだ。

「ラヴィエ、もういいぞ」

そう言うラヴィエが俺の背後2mの場所に姿を現した。

「……もういいの?」

「ああ、どうやら聖王教会は遺跡内部にまでは手を出していないみたいだ。地面を見る限り長期間人が出入りした跡もない」

そう言っただけ俺が足を持ち上げると地面には足跡だけがクツキリと残っている状態になった。もしも定期的にも人の出入りがあれば、

薄れていても他の足跡が残っているはずだ。

おそらく聖王教会はこの遺跡については保存を優先させているのだろう。

「……飛べば？」

ラヴィエは浮いている自分の足下を指してそう言った。ラヴィエとしては飛んでいれば足跡が残らないから、足跡だけでは人の出入りが無い証明にならないと言いたいらしい。

俺は苦笑を浮かべながらラヴィエの考えを否定した。

「確かにラヴィエくらい魔力が多ければそれも手だが、普通はどんな仕掛けがあるか判断出来ない遺跡で魔力のロスは致命傷になる可能性が高いからまず無いな。それにこういった古い遺跡は魔力に反応するトラップも多い。だからラヴィエみたいに常時飛んでるヤツはまずいない」

……本当に居ないよな。

こここのところ機動六課の隊長規格外格連中と関わる機会が多すぎてちよつと自信が無くなってきた。あのクラスの魔導士や騎士なら常時飛んでいても魔力的にも、障害を排除する能力的にも出来ても不思議じゃない。

「いやいやいや。あんなのがゴロゴロ居るわけないか」

これ以上この件に関して考えていると、本当にここで遭遇しそうな気がしてきた俺は頭を振って変な妄想を思考の外に追いやる。

「……行くの？」

「ああ、行こう」

頭を切り替えた俺はラヴィエにそう答えて遺跡の奥にすすみはじめた。